



50th
ANNIVERSARY

記念誌

協力隊マラウイ派遣50周年

目次

祝辞

マラウイ共和国 大統領 ラザルス・チャクウェラ ……	006
在マラウイ日本国大使館 特命全権大使 岩切敏 ……	007
日本マラウイ協会 会長 西岡周一郎 ……	008

ご挨拶

国際協力機構(JICA)理事長 北岡伸一 ……	009
-------------------------	-----

JICA海外協力隊

マラウイ派遣50周年に寄せて

日本マラウイ協会 副会長 柳沢香枝 ……	010
協力隊を育てる会 会長 山本保博 ……	011

歴代隊員から寄せられた思い出&メッセージ

貝塚光宗(初代隊員)昭和46年度1次隊 測量 ……	014
釣田 薫 昭和49年度2次隊 農業土木 ……	015
鶴田伸介 昭和51年度1次隊 理数科教師 ……	016
吉田 均 昭和52年度1次隊後期組 上下水道 ……	017
金森秀行 昭和53年度1次隊前期組 農業土木 ……	018
野村一成 昭和53年度2次隊前期組 養鶏 ……	019
渡辺嘉三 昭和53年度2次隊前期組 理数科教師 ……	020
上田秀篤 昭和53年度2次隊後期組 無線通信機 ……	021
麻生 学 昭和54年度2次隊 理数科教師 ……	022
石井正信 昭和54年度2次隊 自動車整備 ……	024
榊 道彦 昭和55年度3次隊 農業土木 ……	026
側嶋康博 昭和55年度4次隊 理数科教師 ……	027
水谷恭二 昭和56年度1次隊 森林経営 ……	028
井上康子 昭和57年度3次隊 看護師 ……	029
山上慎吾 昭和60年度2次隊 自動車整備 ……	030
久田守雄 昭和61年度1次隊 上下水道設計 ……	031

田村弘子(旧姓:田島) 昭和61年度3次隊 秘書 ……	032
工藤知子 昭和62年度3次隊 臨床検査技師 ……	033
黒岩宙司 昭和63年度3次隊 医師 ……	034
辻本美智子(旧姓:福田) 昭和63年度3次隊 体育 ……	035
吉田 修 昭和63年度3次隊 医師 ……	036
中川 総 平成3年度3次隊 栄養士 ……	037
蔵田團果 平成5年度3次隊 獣医師 ……	038
大西 寛 平成6年度1次隊 理数科教師 ……	040
杉下智彦 平成7年度2次隊 医師 ……	041
丹羽克介 平成8年度3次隊 野菜 ……	042
草苺康子 平成9年度3次隊 村落開発普及員 ……	044
木下秀俊 平成15年度0次隊 家畜飼育 ……	046
野元明俊 平成15年度1次隊 理数科教師 ……	047
古川範英 平成17年度2次隊 青少年活動 ……	048
癸生川 裕 平成17年度3次隊 AV機器 ……	049
山本作真 平成17年度3次隊 野菜 ……	050
秋野一幸 平成18年度2次隊 コンピュータ技術 ……	051
勝山裕子(旧姓:小松原) 平成18年度3次隊 村落開発普及員 ……	052
中村雄弥 平成19年度1次隊 エイズ対策 ……	053
貴田広子(旧姓:緒方) 平成19年度4次隊 青少年活動 ……	054
清家央樹 平成20年度4次隊 村落開発普及員 ……	055
有原美智子 平成22年度3次隊 エイズ対策 ……	056
青木道裕 平成24年度1次隊 村落開発普及員 ……	057
保志弘幸 平成24年度3次隊 村落開発普及員 ……	058
寺崎一生 平成25年度3次隊 品質管理・生産性向上 ……	059
加藤 碧 平成26年度2次隊 コミュニティ開発 ……	060
中村 岳 平成27年度1次隊 青少年活動 ……	061
浜中咲子 平成27年度1次隊 栄養士 ……	062
グウェバ美保(旧姓:岡部) 平成27年度2次隊 看護師 ……	064
清水良介 平成28年度1次隊 コミュニティ開発 ……	066
田仲永和 2017年度1次隊 小学校教育 ……	067

マラウイ側から寄せられた 思い出&メッセージ

Mr. Blessings Chilabade, Office of the President and Cabinet (OPC) ……	070
Mr. Francis Kasaila, Malawi Electoral Commission …	071
Dr. Humphreys Nsona, Ministry of Health ……	072
Ms. Jacinta Chipendo, OVOP ……	073
Mr. Austin Somba, KENDO Association of Malawi …	074
Mr. Mighty Kayoyo, Mzimba South District Education Office ……	075
Ms. Rose Mithi Majonanga, Monkey Bay Teachers Development Centre ……	076
Mr. Dasiano Mapanje, Mkwichi Secondary School…	078
Mr. Mwangi Mwamkenenge Msukwa, Accounting & Business Consultant ……	079
Mr. Moses Chavula, Kasungu District Hospital ……	080
Mr. Sangwani Khosa, Dedza District Irrigation Office ……	082
Ms. Vanessa Chidyanga, Lilongwe Water Board …	083
Mr. Austin Assan, JICA Volunteers Language Trainer ……	084
Mr. Joseph Francesco, JOCV dormitory ……	085

座談会

JICAマラウイ事務所現地職員が語る マラウイ協力隊の軌跡 ……	086
-------------------------------------	-----

50周年特集記事

特集1 有名になった隊員の活動 ……	090
特集2 グループ型派遣 ヘルスパスポートの改訂 …	092
特集3 自治体連携 宮城県、横浜市水道局 ……	094
特集4 隊員機関誌『ZIKOMO』 ……	096

協力隊マラウイ派遣の歴史

年度別派遣隊員数 マラウイ協力隊年表、分野別派遣実績 ……	100
----------------------------------	-----

50周年関連行事 …… 106

マラウイ隊員の今

隊員配置図 ……	110
竹内 真理 2019年度3次隊 PCインストラクター…	111
中根菜生美 2019年度3次隊 公衆衛生 ……	111
西村亜希子 2019年度3次隊 薬剤師 ……	112
尾崎 宏嗣 2021年度1次隊 小学校教育 ……	112
田野辺裕史 2021年度1次隊 小学校教育 ……	113
矢島 穂高 2021年度1次隊 理科教育 ……	113
新居真梨子 2021年度1次隊 小学校教育 ……	114
井上 里奈 2021年度1次隊 小学校教育 ……	114
後藤 さつき 2021年度1次隊 環境教育 ……	115
高橋 愛 2021年度1次隊 小学校教育 ……	115
寺門 香音 2021年度1次隊 小学校教育 ……	116
中田 慧 2021年度7次隊 言語聴覚士 ……	116
佐々木 裕 2021年度2次隊 理学療法士 ……	117
船田 ひかり 2021年度2次隊 小学校教育 ……	117

巻末ご挨拶

JICAマラウイ事務所 所長 丹原一広 ……	118
------------------------	-----

編集後記に代えて …… 119





祝辞／ご挨拶

マラウイ共和国 大統領 ラザルス・チャクウェラ ……	006
在マラウイ日本国大使館 特命全権大使 岩切敏 ……	007
日本マラウイ協会 会長 西岡周一郎 ……	008
国際協力機構(JICA)理事長 北岡伸一 ……	009
日本マラウイ協会 副会長 柳沢香枝 ……	010
協力隊を育てる会 会長 山本保博 ……	011

祝 辞



A handwritten signature in black ink, which appears to read "Lazarus McCarthy Chakwera". The signature is fluid and cursive.

Dr. Lazarus McCarthy Chakwera
President of the Republic of Malawi

The formation of the Japan Overseas Cooperation Volunteers (JOCV) in 1965 by the Government of Japan was a bold statement to the global community that cooperation and partnership were prerequisites for achieving sustainable development and maintenance of international peace and security.

I would, therefore, like to extend my heartfelt congratulations to the Government of Japan on the 50th Anniversary for the establishment of the Japan Overseas Cooperation Volunteers (JOCV) in Malawi in 1971. It is undeniable that this program has not only made significant milestones and deliverables in many countries across the world, including Malawi, but also left a legacy of Japan in the communities.

On the part of Malawi, my country has derived meaningful benefits from this program through various sectors ranging from agriculture; health; education; infrastructural development; energy; trade construction; community development; environment and climate change management; broadcasting; culture; water supply and sanitation; to Information, Communication and Technology (ICT); in line with our national development program titled the Malawi Growth Development Strategy (MGDS).

It is on this basis that my Government looks forward to the sustenance and longevity of this program as a vehicle for sharing best practices, technical assistance, skills and capacity building in pursuit of the socio-economic transformative agenda.

Let me seize this opportunity to pay tribute and homage to the Japan Overseas Cooperation Volunteers (JOCV) who lost their lives while serving in Malawi. We will forever cherish and remember their works and sacrifices for the cause of these two great nations.

I am also very proud to note that Malawi remains the largest recipient of JOCVs in the world numbering 1,897 so far. As Malawi, commonly known as, the Warm of Heart of Africa, we will continue receiving JOCVs with open arms and provide them with conducive environment to undertake their assigned roles and responsibilities seamlessly and safely. I am hoping that my country shall continue to be at the pinnacle of JOCV for the mutual benefits of our two countries.

In this regard, this partnership will be at the centre of the developmental agenda of the Government of Malawi as we embark on the implementation of the Malawi2063 Vision launched in January, 2021, and its upcoming short-term and medium-term programs.

My government also attaches greater importance to the Tokyo International Conference on African Development (TICAD) established in 1993. The TICAD platform is potentially used as a multilateral forum to highlight Africa's needs and promote mobilization of financial resources and technical assistance for the development of the continent, including Malawi.

In summing up, I wish to reaffirm my Government's firm commitment to JOCV program as a framework of enhancing and buttressing collaboration and cooperation with the Government of Japan for the betterment of our peoples at the grassroots level.



在マラウイ日本国大使館
特命全権大使

岩切 敏

マラウイ共和国へのJOCV派遣50周年を迎えられたこと、心よりお祝い申し上げます。

50年前の記念すべき第1歩は、赤い絨毯がタラップ下に敷かれ、VIPルーム利用、大統領府から手配された車での送迎、という手厚い歓迎を受けて始まったと聞いています。その時、私はまだ小学校6年生でした。この長く輝ける伝統をひしひしと感じるとともに、世界で最も多い協力隊派遣者数を誇るマラウイで、日本の特命全権大使としてお祝いできることは大変喜ばしく、かつ、大変光栄です。

マラウイは若年層人口の割合が高く若者のパワーが日々感じられます。他国と比べて経済力は劣るかもしれませんが、未来の可能性を秘めた人材の宝庫であり、穏やかな国民性と気候、豊かな自然、そして何よりも平和な環境にあります。その中で、隊員の皆様がマラウイで語られた日本の話、学校で教えられた多くの子どもたちの成長、現地の人々と共に汗をかき泣いて笑った数々のエピソード……これら一つ一つがマラウイで語り継がれ、マラウイにおける日本人のイメージを形作っているといっても過言ではないでしょう。

日本とマラウイは、独立以来、常に友好関係を保ってきています。技術協力、無償資金協力と並び、JOCV事業は大きな柱のひとつです。特に隊員の皆様は、常にマラウイの国民一人ひとりに寄り添い、ODAの大きなプロジェクトでは必ずしも恩恵を受けられない人たちにも、希望の光を照らしてくれました。

一方、この50年の間、志半ばで不慮の死をとげられた12名の隊員の方々に今一度想いを馳せる必要があります。今でも世界最貧国のひとつであるマラウイの当時の活動環境は劣悪でした。マラリアなどの感染症や交通・医療事情の悪さは想像を絶するものがあったと思います。その中で必死に頑張っていたにもかかわらず、志半ばで命を奪われた無念はどれほどでしょう。隊員の皆様だけでなく、ODA事業にかかわる者、そして日本人として、常に尊い犠牲の下に今の歴史があることを是非再認識すべきと思います。亡くなられた隊員の皆様には、心からご冥福をお祈り申し上げます。

50年という長い歴史に改めて思いをはせ、さあ、新たな時代に向かいましょう。隊員の皆様一人ひとりが主役です。



日本マラウイ協会
会長

西岡 周一郎

(元駐マラウイ日本国大使)

マラウイ協力隊派遣50周年、心からお祝いを申し上げます。

2013年秋、駐マラウイ日本国大使としての赴任前打ち合わせで、“青年海外協力隊の派遣実績が世界一多い国で、在留邦人数でも隊員が多くを占める国です”と説明を受け、マラウイでの協力隊事業について思い巡らせて赴任しました。

2015年にカサイラ運輸・公共事業大臣から、「80年代に最南部のンサンジェ中・高等学校で協力隊員2名から理数科を教わった。劣悪な環境下のマラウイの田舎で外国人も殆ど見かけない中、日本人が日々同じ生活をしながら、熱心に教えてくれていた事は強烈な印象として残っている。」と当時の経験と協力隊員の思い出を伺い、長い時間、国際協力について談じました。訪日の機会があれば、是非、当時の隊員と面会の場を設けたいと約束したものの、果たせずに帰国。2019年のアフリカ開発会議TICAD7の機会に、運よく外務・国際協力大臣の任にあった同氏の訪日が実現し、当会主催の集いの場にて、36年振りに、お二人の教員(塚田さん、松岡さん)との再会が実現しました。

協力隊事業の最大の理解者の一人が、カウンターパートの外務大臣となったのは幸運でしたが、在任当時多くの政・官・学術分野で活躍する方々から同様の経験を聞き、協力隊事業がマラウイの人々の身近にある事を実感しました。

マラウイの3年間、隊員活動の現場にも度々足を運び、現地に溶け込み、それぞれの課題と向き合って逞しく成長して行く隊員諸兄の姿を見て、大変心強く感じたものです。この50年間マラウイの人々が、全国津々浦々の1,800名を超える隊員の活動や出会いを通じて、日本人への理解を深め、日本を知る事になったのは、正に顔の見える国際交流、密度の濃い草の根の外交であり、その影響力は計り知れないものがあります。

この実績こそ日本とマラウイの関係における金字塔であり、協力隊事業におけるマラウイは特別な国と言っても過言ではありません。

50年を機に協力隊事業の価値を再認識し、新しい時代に向けての事業の進化と広がりを感じたいと思います。



国際協力機構

理事長

北岡 伸一

マラウイへの協力隊派遣開始から50周年を記念し、本誌を発行できることをうれしく思います。まず、50年の長きにわたりマラウイへの協力隊派遣をご支援いただいているマラウイ、日本両国の関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

マラウイへの協力隊派遣は、1964年の同国独立から7年後の1971年8月に開始されました。チレカ国際空港に7名の青年海外協力隊員が降り立って以来、2021年10月現在、累計派遣者数は1,897名に上り、派遣実績がある92カ国中、世界一の規模となっています。歴代の隊員達は、マラウイの歴史と共に歩み、現地の人々と一緒になってマラウイの国造りに献身的に取り組んできました。この間に育まれた両国間の信頼と友情の絆は、一人ひとりの地道な活動の賜物であり、何物にも代え難い宝です。マラウイに派遣された隊員達は、帰国後もマラウイとのつながりを大事にし、長年にわたる交流を深めています。

私は、2018年8月にJICA歴代総裁・理事長として初めてマラウイを訪問しました。実際に現地を訪れ、日本での豊かな生活から離れ、水も電気もないような厳しい環境下で、派遣された日本人自身が鍛えられる人材育成面の意義も深いことを実感しました。また、派遣職種の変遷からも、歴史の長さを感じました。一方、50年の間に、12名の隊員が志半ばで命を落とされました。みな若く、その多くが交通事故により亡くなられており、胸が痛みました。現地では、首都リロングウェの隊員連絡所に設置されている物故隊員の慰霊碑に献花し、故人の冥福を祈るとともに、悲劇を繰り返さないことを誓いました。また、今後の一層の健康と安全を誓い、マラウイにおけるJICA海外協力隊事業の更なる発展を祈念しました。

内戦もなく平和を維持したマラウイには、1971年の初代隊員派遣後、中断することなく隊員が派遣されてきました。しかし、2020年3月、新型コロナウイルス感染症の拡大により、全隊員が避難帰国を余儀なくされました。1年を超える中断を経て、2021年6月からマラウイへの隊員派遣が再開され、50周年の記念すべき年に新たに再スタートを切ることとなりました。

私たちの仕事は、「信頼で世界をつなぐ」ことです。それは、現地の人々と手を取り合いながら課題に取り組み、それを通じて両国の絆を深めていくことです。人々の移動や交流に様々な制約が伴う中、現地の人々と共に生活し、共に働くJICA海外協力隊が果たす役割への期待はこれまでに増して大きいと言えます。日本、マラウイ両国の関係者の皆様には、これからも協力隊事業に対するご理解、ご支援をお願い申し上げます。

2021年10月



JICA海外協力隊派遣50周年に寄せて

私がマラウイという国の名を始めて知ったのはJICAに入団して間もない頃だった。最初に配属された30名ほどの課に、2人のマラウイOVがいたのである(そのうちの1人は後にマラウイ事務所長になった村上さん)。JICAに就職したとはいえアフリカについての知識がほとんど皆無だった私は、この2人の先輩との会話を通じて、アフリカにも涼しい気候があること、マラウイには大使館はないが、協力隊を中心にJICAの活動が活発であることなどを知った。

しかしその後在マラウイ大使に任命されるまでの30数年間、マラウイとの関係は薄く、赴任国がマラウイと聞いて慌てて地図を見て位置を確認したくらいであった。そうなってから振り返ってみると、JICA人生を通じて知り合い、「アフリカ南部に派遣されたOV」と記憶されていた人々の多くが、実はマラウイOVであったことに気づかされたのであった。

マラウイに赴任中は、隊員の着任時、中間報告時、離任時と3回にわたって全員と面談する機会を持つように努めた。中間報告時には、前任の西岡大使にならって隊員を公邸に招き、日本食でもてなしつつ報告をしてもらった。活動が順調な隊員もそうでない隊員もいたが、最後には皆が何かをつかんで帰国してくれたものと信じている。

マラウイで感銘を受けたのは、少年時代の隊員との関わりを鮮明に記憶している人々の存在だった。カサイ元大臣の話はよく知られているが、それ以外にも、マラウイ随一の名医と言われるムワンサンボ博士(現保健省次官)、マラウイ・オリンピック委員会会長のムハンゴ元大臣、リロングウェ農業大学のカウンダ教授などが、30年以上昔に関わった隊員の名前を今でも覚えていて、懐かしんでいたことは印象深い。ムハンゴ氏はマラウイ・バレーボール連盟の会長でもあるが、バレーボールを始めたきっかけは、クラブ活動で隊員と知り合い、教えを受けたからであるという。またカウンダ教授は、自分を科学の道に導いたのは隊員であったと語った。

こうした事例は、マラウイ社会に広く存在しているはずだ。現在のマラウイは、50年前と比べればだいぶ様子が変わっているであろう。しかし他国に比べればその発展の速度は極めて遅い。その中で、海外協力隊員達が、マラウイの人々に影響を与え続ける存在であることを願ってやまない。

日本マラウイ協会副会長
柳沢 香枝



ムズズ中央病院にて

マラウイ派遣50周年を迎えて

協力隊の応援団に加わり、隊員達と接する機会も増えました。世界の最貧国に属しながらも派遣された隊員たちは全員、嬉しそうにマラウイの話をする様子にかねてから関心を抱いていました。その後、偶然にも私は2019年2月に同国を視察する機会に恵まれました。駐マラウイ柳沢香枝大使(当時)とは、かつて共に国際緊急援助隊創設に関わった仲でもあり、今回はともに隊員たちを見守る立場として、再会を果たせた喜びはひとしおでした。わずか4日間の滞在ではありましたが、その間に20名近い隊員の皆さんとお会いし、小学校教諭のある隊員の宿舎も視察させていただきました。そこでは毎日自分で水を運び、火を熾して炊事をし、ひとたび豪雨に遭えばトイレも崩壊してしまうような過酷な環境であるにも関わらず、当の隊員は不自由な生活を楽しみながら逞しく暮らしている姿に感銘を受け、協力隊の現場主義の神髄を実感しました。カスング県やムズズでは栄養士、公衆衛生、リハビリテーション等、医療系の隊員の活動を視察させていただきましたが、歴代の隊員たちが築き上げたヘルスパスポート(具体的には母子保健手帳)等の成果が上がりつつあり、同じ医療に関わる日本人として大変うれしく感じました。余談ではありますが、この時に視察したヘルスポスト(乳幼児健診会場)の屋根が暴風で吹き飛ばされてしまい、当会の実施する「小さなハートプロジェクト」で再建を支援することができたのは存外の喜びです。

東京2020大会では、ボランティアスタッフやホームタウンの推進等、多くのマラウイ隊員のOBOGが日本国内で活躍したと聞き及んでいます。2019年に日本で開催されたアフリカ開発会議では、来日したマラウイの外務大臣が、かつて指導を受けた隊員との再会を希望し、実現したことが話題となりました。

マラウイ派遣50周年の成果が実りを見せるのは、これからであることを確信して、お祝いの言葉とさせていただきます。

一般社団法人協力隊を育てる会
会長 山本 保博



歴代隊員から寄せられた 思い出&メッセージ

貝塚光宗(初代隊員)昭和46年度1次隊	測量	014
釣田 薫	昭和49年度2次隊 農業土木	015
鶴田伸介	昭和51年度1次隊 理数科教師	016
吉田 均	昭和52年度1次隊後期組 上下水道	017
金森秀行	昭和53年度1次隊前期組 農業土木	018
野村一成	昭和53年度2次隊前期組 養鶏	019
渡辺嘉三	昭和53年度2次隊前期組 理数科教師	020
上田秀篤	昭和53年度2次隊後期組 無線通信機	021
麻生 学	昭和54年度2次隊 理数科教師	022
石井正信	昭和54年度2次隊 自動車整備	024
榊 道彦	昭和55年度3次隊 農業土木	026
側嶋康博	昭和55年度4次隊 理数科教師	027
水谷恭二	昭和56年度1次隊 森林経営	028
井上康子	昭和57年度3次隊 看護師	029
山上慎吾	昭和60年度2次隊 自動車整備	030
久田守雄	昭和61年度1次隊 上下水道設計	031



田村弘子(旧姓:田島) 昭和61年度3次隊 秘書 ……………	032	秋野一幸 平成18年度2次隊 コンピュータ技術 ……………	051
工藤知子 昭和62年度3次隊 臨床検査技師……………	033	勝山裕子(旧姓:小松原) 平成18年度3次隊 村落開発普及員…	052
黒岩宙司 昭和63年度3次隊 医師……………	034	中村雄弥 平成19年度1次隊 エイズ対策……………	053
辻本美智子(旧姓:福田) 昭和63年度3次隊 体育 ……	035	貴田広子(旧姓:緒方)平成19年度4次隊 青少年活動 ……	054
吉田 修 昭和63年度3次隊 医師……………	036	清家央樹 平成20年度4次隊 村落開発普及員……………	055
中川 総 平成3年度3次隊 栄養士 ……………	037	有原美智子 平成22年度3次隊 エイズ対策……………	056
蔵田團果 平成5年度3次隊 獣医師 ……………	038	青木道裕 平成24年度1次隊 村落開発普及員……………	057
大西 寛 平成6年度1次隊 理数科教師 ……………	040	保志弘幸 平成24年度3次隊 村落開発普及員……………	058
杉下智彦 平成7年度2次隊 医師……………	041	寺崎一生 平成25年度3次隊 品質管理・生産性向上 ……	059
丹羽克介 平成8年度3次隊 野菜 ……………	042	加藤 碧 平成26年度2次隊 コミュニティ開発 ……………	060
草苺康子 平成9年度3次隊 村落開発普及員 ……………	044	中村 岳 平成27年度1次隊 青少年活動……………	061
木下秀俊 平成15年度0次隊 家畜飼育……………	046	浜中咲子 平成27年度1次隊 栄養士 ……………	062
野元明俊 平成15年度1次隊 理数科教師……………	047	グウェブ美保(旧姓:岡部) 平成27年度2次隊 看護師 ……	064
古川範英 平成17年度2次隊 青少年活動……………	048	清水良介 平成28年度1次隊 コミュニティ開発……………	066
癸生川 裕 平成17年度3次隊 AV機器……………	049	田仲永和 2017年度1次隊 小学校教育……………	067
山本作真 平成17年度3次隊 野菜……………	050		

派遣50年にあたり

私を含む7人の初代隊員がマラウイ共和国に降り立ってから半世紀がたちました。派遣50周年、この歳月は日本青年の一つの歴史です。

思い起こせば、7月末訓練修了、帰郷の後、8月13日協力隊事務局講堂での壮行会、同16日、同期85名は3方面に分かれて羽田を出発、19日チレカ空港に到着。政府関係者の温かい出迎えを受け、配属先省庁別に分乗して首都ゾンバへ、翌日ゾンバ山を含め市内観光、21日、砂利道を一路任地リロングウェへと赴任。

あれから50年、1998年の再訪に続き、本年8月再再訪を計画しつつありましたが、コロナ禍で断念せざるを得ませんでした。

1974年帰国後OB会たる「ムリブワンジ会」を結成、1983年「世界平和を目指し、発展途上国との相互関係の強化拡充に積極的に対応、人心交流、相互理解により真の友好への礎となるべく」日本マラウイ協会を設立、後にOB会を発展的に解消し合流しました。

関係各位それぞれの感慨は異なるにしても、青年海外協力隊を舞台に【730日の青春】の情熱と努力の足跡を、マラウイ共和国そしてマラウイ人の心に残した思い出を持つ私ども帰国隊員は、50周年が単なる[祭典]に終わってはならないと願う幾多の声を耳にしました。正に、この50年に亘る[志]ある若者の活動が、その本人にも、送り出した側にとっても、また日本社会、更に格差拡大が指摘される南北世界の関係に於いても、重く、厳しく検証されてこそ、政府事業として創設された本事業の意味するものが明らかになるでしょう。

またそれは参加した若者のその[行為]に対する評価にもつながってくるでしょう。

この様な視点に立ち、この記念すべき年に、心新たにマラウイに於ける青年海外協力隊の検証を行い、地球／人類の共存共栄を基調としながら多様に変化する国際社会に憶いをいたし、今後真摯に対処すべきと存じます。

それは取りも直さず本事業を共に進めてきた【マラウイ共和国】がこの50年間に隊員を受け入れることで[どのように変わってきたか]・[その実態はどうなのか]、そして今後本事業がマラウイ共和国に対応していくには[どうあるべきなのか]を考えることだと思います。青年海外協力隊マラウイ派遣隊員等の永年の経験によって培われた[知恵]を結集すべき時ではないだろうかという思いから、本事業の進展に寄与された諸賢各位に[来し方]を省みつ、新しい時代の[行く末]を語ってもらい、更なる前進を願う次第です。



マラウイ協力隊派遣50周年記念誌へ寄せて

マラウイへの協力隊派遣50周年を迎え、心よりお祝い申し上げます。半世紀にわたる派遣事業により、日本とマラウイ両国には数知れないほどの相互理解が生まれ、その交流が深化していることをお喜びいたします。

私がマラウイを好きになった理由の一つとして、次のような体験がありました。ブランタイヤの坂道にある商店街の文具と本屋の店の前で、ストリートチルドレンが私に「お金頂戴」と群れてくるのを見た現地の老人が、「ムズング(外国人)にお金をせびるような恥ずかしいまねをするな」と子供たちを叱っていたのを見て、この国の将来は明るいはずだと思いました。

50年を振り返って最大の危機というのは、やはり2020年3月新型コロナウイルスによる派遣隊員の避難帰国でありましょう。人類の歴史にも刻まれるような新型コロナウイルスのパンデミックにより、協力隊派遣事業を一時的にも停止せざるを得なくなったことは、長く続けられていた相互交流を停滞させたのではないかと危惧いたします。

両国の更なる友好・理解を図るために、「継続は力なり(Continuity is the father of success)」と言われますが、今後とも協力隊派遣事業を地道に続けられんことを願っております。

マラウイといえば思い出すこと

私は理数科教育の隊員としてマンゴチセカンダリースクールに派遣されましたが、ある日の教員会議で、校長先生が、ふたりの女性の先生に、「女生徒の民族舞踊の監督になってくれ」と気楽に頼んだら、ふたりとも、「私たちには家事もあるし、冗談じゃないわよ」って感じであっさり断られ、慌てたついでに「ミスターツルタ、君やれ」とおっしゃったので、「そりゃいくらなんでも！踊り方も知らないし」と私は反対したのですが、「心配するな。踊り方は生徒たちが知っている。君はスーパーバイズするだけでよしい」と言われて担当にされてしまいました。確かに何もしませんでした。別の時には、体育の先生が空席になったので、私が代理体育教師を務めることになりました。（自慢ではないが、私の学校時代の体育の成績は5段階で1（一番下）こそとったことはありませんが2は普通にとっていました。）しょうがないので、授業はサッカーの試合にして私も参加しました。ご存知かもしれませんが、マラウイの生徒たちはサッカーが上手です。しかし、実際に試合をしてみると、自分でもおどろくほど私は上手だということに気づきました。ドリブルにしろシュートにしろむかうところ敵なしという感じでした。実は私にはサッカーの才能があるのでした。と思ったのですが、あとで振りかえると、どう考えても、生徒たちが、このしろうと外国人教師に気を使って、私のフェイントに親切に引っかかってくれていたのです。これぞ Warm Heart of Africa か。（余談ですが、マラウイ国内で受けをねらって、「Malawi, the Warm Heart of Africa」と言ったら、何それ？という感じでポカーンとされたことがあります。）

思い出すのは楽しいことですが、実際には、私の理数科の能力の低さ（とくに実験）もさることながら、教師としての経験の無さもさることながら、週約30時間の授業には日々大苦勞しました。

マラウイで1964年の独立以来戦争が起きていないことは誇らしいことですが、社会経済的に大いに成長したかという疑問です。1964年から2020年までの56年間のGDP年平均増加率は約4.3%ですが、統計にもとづいてGDP増加率を人口あたりGDP増加率と人口増加率に分解してみると、 $(1+\text{GDP増加率}) = (1+\text{人口あたりGDP増加率}) \times (1+\text{人口増加率})$ は、 $1.0429 = 1.0143 \times 1.0282$ となり、人口増加率が約2.8%と大きく、人口あたりGDP増加率は約1.4%どまりです。（米ドル2010年実質価格。出典<https://data.worldbank.org/country/malawi>）もちろん人口あたりGDPがすべてではありませんが、されど人口あたりGDPだと思います。

協力隊のみなさまがお元気でマラウイの友人たちの自立に貢献されますよう。事故（とくに交通事故、さらに人間関係上の失敗を含む）、事件、病気（コロナを含むがコロナに限らない）などなどに気をつけてください。

私は、協力隊への応募でマラウイと聞いた時には知らない単語なのでマレー半島のことかと思ったのですが、その後は45年たった今でも家の中では日常的に「ジコモ」（ありがとう）、「ウジェニ」（言葉が出ないときに使うアレ、ナニ的な万能代名詞？）などと言うようになっています。



女生徒の民族舞踊

私のウォームハートプロジェクト

今日もバイクの音を聞いて子供たちが集まってきた。ほとんどが私の宿舎の近所に住むハウスボーイの子供たちである。宿舎はリロングウェ市内エリア11の二階建てのフラット(集合住宅)で、1階は子供たちに開放している。子供たちは5~7歳である。

「さあ、みんな集まったかな?じゃあ、いつものように音楽と読み書きのサンドウィッチ授業を始めるよ!」目がキラキラしてきれいな瞳を一人ひとり確認する。

「あれ?!ザキーヨ君はどうした?」子供の一人が「お父さんの仕事が変わって、遠くに行っちゃった」「そう、残念ね。あんなに一生懸命読み書きしていたのにね」ハウスボーイの子供の父親は、仕事が終わればまた新しい仕事を探して家族を養わなければならない。

子供たちの音楽のリズム感は抜群で、大抵身体で表現できる。音楽はリズムだけでなく、音階があることを子供たちに伝えるべく、日本から持ってきたピアノで「ドミソ」「ドファラ」「シレソ」「ドレミファ・・・ド」に合わせた発声練習を行う。その音階を色々な音でやってみる。ある時は子供たちに歌ってもらい、私からは日本の歌を聴いてもらう。

後半の30分は、読み書きの時間。壁にスノコを立てかけ、そこに図面の裏にマジックで大きく書いたアルファベットを音楽でやった節をつけて歌うのである。図面は職場であまった図面裏側を使い、子供たちが使う紙も図面を切ったものを使っている。鉛筆を初めて持つ子供が多い中、皆、興味を持ってアルファベットを書いている。書けない子には、後ろから子供の手

をとって一緒に書いてみる。「ほらね、書けた。大丈夫だいじょうぶ」と毎日繰り返すと少しずつ自信を持ってくる。書けた時の子供の笑顔を糧に毎日続けてみる。

ある時は、子供たちと「シマを食べる会」を行い、もちろん私も車座になって子供たちとンディオ(※青菜、豆などの副菜)をつまみシマと一緒に食べて、楽しいひと時を過ごしている。

40数年後、この子供たちはそれぞれの家庭を持って幸せに暮らしているだろうか。その頃私は、孫の顔を見ながら至福の時を持ちつつ、まだ仕事を続けているだろうかと思ふ。

24歳だった私は1977年マラウイ上水道に赴任し、マラウイ全土の地方公共水道プロジェクトの推進で5年1カ月いることになる。子供たちと過ごした時間は、私の大切なウォームハートプロジェクトである。ウォームハートプロジェクト(※日本マラウイ協会が実施する隊員支援スキーム)が生まれる23年前の出来事だ。



OV三人がマラウイ感傷旅行で40年後に見た成果

約40年前にJOCVの農業土木隊員だった那須さん・吉田さんと私の三人は、2018年8月22日に羽田空港で再会してマラウイへ感傷旅行に出発しました。那須さんは地元の市役所を休職して1977年にJOCV、帰国後は復職して2012年に定年退職していました。吉田さんは地元のコンサルタント会社を退職して1978年にJOCV、帰国後は別の会社を経て元の会社に復職し、2009年に転職して農業経営をしていました。私は県庁を退職して1978年にJOCV、帰国後は米国留学を経てJICA国際協力専門員に採用され、2015年に定年退職して地元に戻っていました。JOCVでは三人とも灌漑局に配属されました。当時のマラウイは人材が今よりもさらに不足しており、灌漑局長を含めて本部にいる灌漑技師の約半分は「お雇い外国人」でした。私らJOCVも、不足するマラウイ人技師の代わりに灌漑局が直営工事する地方の現場で施工管理／技術助言することが主な活動でした。よって、私たちの成果は、構造物を建設して人々に使ってもらうことでした。それらが今はどうなっているかを見たくて、旅行しました。

マラウイで三人はそれぞれが従事した現場を訪問して、達成が不十分なまま帰国した成果を見て回りました。那須さんはJOCV任期のほとんどを北部のハラ灌漑区でコンクリート製の頭首工（約4m高×8m幅×35m長）の建設に従事しました。頭首工は、河川を横断するように設置して水位を上げて水路へ取水する構造物です。そして工事が7割ほど進んだところで資金不足から中止となり、完成できずに任期を終えて帰国しました。40年ぶりを見ると、外国援助で頭首工は完成されて約240haの水田に水を供給し、農民の方々に使われておりました。吉田さんは、任期の前半は南部のチクワワ灌漑区で末端施設の工事に、後半は北部のリンパサ灌漑区で頭首工（約2m高×12m幅×20m長）の建設に従事しました。頭首工は、資機材不足からコンクリートが使えず、フトン籠（石を詰めた金網の箱）を積上げたものを造って帰国しました。40年ぶりを見ると、チクワワ灌漑区の構造物はかなり老朽化していましたが、なんとか機能しておりました。リンパサ灌漑区の頭首工は、後継隊員がフトン籠の上積みとコンクリート被覆で増強し、その後の底部洗掘による機能不全が外国援助で修復されて約500haの水田に水を供給し、農民の

方々に使われておりました。私は、任期の前半は北部のウォーベ灌漑区拡張計画の測量・設計に従事しましたが資金不足で工事は開始されず、後半は水道局へ出向して北部のチルンバ地方水道事業で複数施設の建設に従事しましたが一部を残して帰国しました。40年ぶりを見ると、ウォーベ灌漑区拡張計画は外国援助で完成していましたが、私の設計は使われておりませんでした。チルンバの施設は更新されてほとんど残っていませんでしたが、コンクリート製の横断暗渠（橋の代わりの構造物、約3m高×4m幅×5m長）だけは住民の方々の交通に使われておりました。

振り返りますと、任期中は三人共に2年ほどの短い任期と資金不足・資機材不足の制約から十分な成果を達成することはできませんでしたが、日本で先輩から学んだ技術と若い力を駆使して可能な限り質の高い構造物を残したことから、40年後を見ると、少なくとも一部は外国援助などの幸運と地元の方々の協力で完成・維持されて人々に使われておりました。特に頭首工は、240ha+500haの水田に取水が使われており、他の灌漑区のデータから推計すると約1,800人の農民の方々の生計に役立っていました。旅行後の感想として那須さんは、「構造物（頭首工）が残っていたことに感激した。その機能が十分に発揮されて下流の水田が青々と茂っており、そこで農民の方々が一所懸命に草刈りにいそしんでいる姿を見て『あ～、やってよかったな』と実感した」と言いました。吉田さんと私も同様でした。

最後に、マラウイ旅行ではJICA専門家のお世話で灌漑局と地元関係者のお許しを頂いて現場訪問と撮影ができました。全ての方々に改めて感謝申し上げます。



リンパサ灌漑区の頭首工で撮った写真(左から那須・金森・吉田OV)

ADMARC農場での思い出

僕が赴任した職場はthyoloのADMARC(Agriculture Development and Marketing Corporation)。現地ではチョーロと呼んでいました。ちょっと進むとお茶畑。ADMARCはマラウイで一番大きな半官半民の組織で、チェアマンのテンボー氏はバンダ大統領の次の地位でした。そこで養鶏隊員としてこの地区にあった肉養鶏chirambe農場、卵用鶏kwenengwe農場の2ヶ所の農場をまかされ赴任しました。後には卵用鶏lumzu養鶏場にも行くことになりましたが、赴任するきっかけは台湾人の園芸作物の専門家の黄さんが、野菜栽培の肥料に重要な鶏糞を常に欲しいと、稲田所長と笹子調整員に協力隊員の派遣要請をしたことが発端でした。鶏は自分の家で子どもの頃100羽ほど飼育されていましたが、マラウイへ赴任する前には北海道と岩手県で乳牛の牧場で働いていました。協力隊には家畜飼育で合格しましたが、職種変更して欲しいとの連絡を受け養鶏に変更し、派遣前に熊本県立養鶏試験場で半年間研修を受けました。農業高校、大学の農学部と進み、学生時代から休みの時には農家を探して農業実習に励みました。僕の農業の知識は農民から教えて頂いた知恵がほとんどです。マラウイの農場従業員の大半は学校を卒業していませんでしたが、体験で学んだ農業の知識がたくさんありました。マラウイは学歴がものを言う縦社会です。そこで、彼らの知恵を僕が代理になって上部に進言する。そして、その進言

のお陰で農場運営の効率が上がる、給料は上がらないけど、彼らの自信になる。それが一番良かったかなと感じています。帰国後、ンシマを食べる会に大使が来ていました。どこに暮らして居たかの質問。そこで、thyolo,bvumbweに住んでいましたと述べると直ぐに大使が、以前、優秀な養鶏隊員がいたらしいと言ってくれたのが一番うれしかった。その農場も職員の横領が発覚し大統領の命令で廃園、今は更地になっています。

当時は、ADMARCはマラウイで一番大きな組織で、米の集荷、肥料の配布、各地に牛、羊の農場もありました。養鶏場はマラウイ最大です。ブランタイヤからエッグマーケットの自動車が、未舗装の道を卵が割れないようにして毎日集卵に来ていました。プロイラーは毎日500羽処理、血は無料です。こちら僕が処理法を指示。食事に利用するために職員が持ち帰っていました。また、内臓はジュニアスタッフが分けて持ち帰ります。脂肪や脚、頭はシニアスタッフが持ち帰ります。従業員はタダでおかずが手に入るから、求人すると直ぐに人が集まります。また、リンベのHQからは幹部が脂肪や脚、頭を取りに来るのです。脚は台湾広報部の方にあげ、脂肪は炊いて食用油で利用していました。冬場には農場で生産した野菜を毎週ロンドンへ出荷していました。まだまだ貧しかった時代だったと、今になって思います。

STORY
07

渡辺 嘉三 (わたなべ よしみ)

昭和53年度 2次隊前期組

職種 理数科教師
任地 カロンガ
配属先 チャミナデセカンダリー
スクール

北部カロンガの空港から小型飛行機が離陸すると、不意に涙があふれ止まらない。理由が分からなかった。約40年前のことだ。今考えると文化の違いなどのプレッシャーからの解放や、やり切った充実感からだろう。

数学と物理化学を教えるはずが、着任するや校長に「生物を教えないなら要らない」と言われ、毎晩次の授業のために必死で予習したことが懐かしい。生徒は前向きで教えやすかった。車いすとそれを押す生徒がどちらも自然なのが新鮮だった。失敗もした。植物標本を採りに森に入り、全身に蕁麻疹が出て寝込んだ。授業で、生命についてUFOを引き合いに出すと「宇宙人は金持ちなんだね。飛行機に乗ってこられるんだから」。大学入試ではエンドウを育て試験当日写生させるよう指示された。他人に内容を漏らせば刑務所行き。まいた種を飼い猫が掘り返してしまい、慌てた。

敷地内に一軒家の宿舎がある学校生活に慣れると、地元の生活を知りたくなる。同僚の約10マイル離れた実家脇に藁ぶきの小屋を建ててもらった。そこでの生活も学びの日々だった。感謝は人でなく神に。持つ者が分け与えるのは当然。だが、婚資を女性の親に全て払うのはむしろ無礼だ。水浴びに行くと成人男性はよそを向き、子どもに女性陣が終わったか確認させる。ここでの生活の一部は、帰国後入社した朝日新聞のAERAに載せた。



1992年4月21日号のAERAの記事



2019年3月に訪ねた、村の中の我が小屋の隣家のおばさん(中央)と娘2人

帰国後10年してマラウイを訪ね、自分のこの間の変化を意識した。朝日を卒業後の2019年、アフリカ中心に取材をしようとマラウイに向かった。飛行機はブランタイヤからリロングウェまでだけ。今はムズズ、カロンガには飛ばない。ただ、バスの旅は快適だった。携帯電話が普及し、デジタルマネーの時代を実感した。私の小屋のあった場所を訪ねると、隣家のおばさんは85歳で元気だった。敷地内には90代で亡くなったご主人の墓もある。小屋は落花生畑に代わり、葉が風に揺れていた。コロナ禍が収まったらまた訪れたい場所だ。



町の様子は変わっても、カロンガで40年前に親しんだスーサ(自転車のスポークに刺した焼き肉)と甘くないバナナは今も健在

回想：マラウイ協力隊に参加して



活動中の一コマ

中高校生の頃から英語が好きだったこと、通信会社に就職して職場でJICA研修生の講師を務め、いつかはこういう人々の国へ行ってみたいと思うようになったことから、必要な無線の資格を5年かかって取った時に協力隊を受験した。

1978年12月からの派遣前訓練は、東京・広尾と代々木の訓練所で約4ヶ月弱という長期のもの。当時24歳の私には、この訓練所時代のインパクトは大きかった。実に様々なキャリアの人達と友達になって話ができ、自分の経験など、なんてちっぽけなものかと痛感した。

1979年4月、同期生15人とともにいざマラウイへ。任地/職場はゾンバの郵便電気通信局電気計測器修理校正センター(Calibration Center、後に2000年前にブランタイヤに移転)、イギリスからの援助で途上国らしからぬ立派な計測器が並んでいたが、スタッフはそれらを十分に使いこなせていなかった。成果物的には任期終了間際の1981年3月に1つの計測器の手順書が完成したのみ。しかし、

着任直後は修理報告書を英文で書くことができなかったが、カウンターパートらに色々教えてを請い、任期終了時には一人で書けるようになった。本当に自分が勉強させてもらった。

帰国後は1983年6月～2015年3月まで、マラウイOB/OGの集まりである日本マラウイ協会で会報の編集やチェワ語辞典の制作に携わり、マラウイのPRなどの活動をした。この間、2000年9月にマラウイを再訪し、カウンターパートと再会した。

定年後はコミュニティFM局に再就職、JICAボランティアの募集期にOGやJICAの方にゲストに来ていただき関連ラジオ番組をつくったこともある。こうしたときにOB/OG同士はすぐに話が広がる。

最近うれしいのは、今年72歳になる当時のカウンターパートが、私のFace Bookにコメントを書き込んでくれることである。いつになっても協力隊とのつながりは途切れない。



任期終了前の送別会で

帰国後のことと40年ぶりの里帰り



同期隊員の柳川さんの慰霊供養（グレートジンバブエ遺跡にて）

2019年秋、同期隊員の石井正信・牧子さん夫婦と三人で、約40年ぶりの「里帰り」をした。私たちは、1979年ジャカランダが満開の秋に派遣された。旅行にこの時期を選んだのは、満開のジャカランダの花を見たかったからでもあった。

石井正信さんは自動車整備（プランタイア）、牧子さんは助産師（プランタイア）、私はデザ中等学校が任地であった。学校は標高2198mのデザ山の山麓にあり、デザの町からは歩いて1時間ほど。学校の周りには、ブルーガム、杉などのうっそうとした森（植林地）で夜にはハイエナが家の近くまで来て吠えたものだった。放課後は毎日生徒たちとサッカーをした。

私たちの旅行は、ジンバブエ→ボツワナ→マラウイという経路で15日間の旅であった。9月26日にジンバブエのブラワヨに到着し、タクシーを雇ってグレートジンバブエに向かった。グレートジンバブエは、現地語で「石造りの王宮」という意味があり、国の名前もここからきている。東西南北1.5kmほどの規模で小高い丘に大小の岩を積み上げて築かれており、かなり高度な文化が栄えていたと言われている。ジンバブエでは私たちの友人柳川さんが前年に亡くなった。私たちは

グレートジンバブエの草原で線香を上げて客死した旧友の冥福を祈った。

ハラレ、ボツワナのチョベ国立公園、ビクリアフォールズを経由して30日にリロンゲに入った。高度を下げる飛行機から眺めるマラウイのサバンナは感慨深いものであった。空港を出るとタクシーを探す。私たちの旅行の成否はタクシーの運転手の人柄にかかっている。これから出国まで付き合ってもらわなければならないので、信頼できそうな人を選ばなければならないのだ。100%“運”のみだが、幸運なことに良い運転手に巡り合うことができたので、マラウイを去るまで安心して旅を続けることができた。

リロンゲから国道M1を南に下る。40年前と変わらない美しいサバンナの上をひた走る。2時間ほどでデザである。製材所のところで左の道を取る。しばらく行くと私の住んでいた家がある。家は部屋が三つで、断面は陸上競技のトラックの形である。マラウイの伝統家屋は断面が円形なので、その伝統的な様式を取り入れた形状になっている。庭が畑になっている以外は変わっていない。その家から100m歩くと学校だ。職員室をノックし、怪訝な顔をする先生に、私が40年前ここ



Dedza Sec Schoolに隣接する宿舎にて 現在の管理人夫妻とエリオット、筆者、石井さん

で教えていたことがあると話す、校長室に案内され、しばし歓談することになった。しかし、40年前の校長先生の消息などわかる由もない。生徒たちと記念写真を撮って先を急ぐ。

ゾンバではクチュワ・インを拠点にして、バオバブの木が美しいモンキーベイ方面を観光した。標高の高いデザとはかなり異なる植生だ。集落のあるところには市場があり、多くの人でにぎわっている。昔は食べ物屋を探すのに一苦労したものだが、いまではWi-Fiが使えるカフェがある。そういえば生徒たちも多くがスマホを持っていた。

ブランタイアでは、石井さんの勤めていたPVHO（重機車両賃貸局）や、牧子さんの勤めていたQE（クインエリザベス病院）、住んでいたアパートを探して訪ねた。40年！時の重さ、長さを感じる訪問であった。多くの変化も見て取れたが、マラウイの人たちの人懐っこいこと、人柄の優しいことが変わっていなかったのがうれしかった。

マラウイ派遣は、帰国後の私の人生に大きな影響を与えた。帰国後、縁があって大分県別府市にある障がいのある人たちの自立と社会参加を支援する社会法人に就職した。法人の設立者は、今年のパラリンピック大会でも注目を浴びた故中村裕先生である。中村先生は1964年の東京パラリンピック大会の開催に尽力された。「障害のある人たちにはスポーツは悪影響がある。」という意見もあった当時、途上国の障がい者の置かれていた状況はさらに厳しかった。中村先生は、アジア・南太平洋地域において障がい者の自立と社会参加をスポーツを通して推進しようと、極東・南太平洋障害者スポーツ大会（フェスピック大会）を開催するため奔走した。1975年に第1回大会が大分

市と別府市において開催され、以後2006年マレーシア大会まで9回の大会を開催した。

私は、協力隊派遣の経験を買われ、1992年にフェスピック連盟（アジア・南太平洋の40数か国が加盟する団体）の事務局長に任命され、2006年に同連盟が解散するまで、フェスピック北京大会（1994）、バンコク大会（1999）、韓国ブサン大会（2002）、マレーシア大会（2006）の開催にかかわることになった。

マレーシア大会の開催前には、JICA草の根パートナー事業で「車いす製造技術移転」の事業を実施することになり、マレーシアの国立障がい者職業訓練・リハビリテーションセンターにおいて、職業訓練として「車いす製造技術習得コース」を設立した。現在でも職業訓練で製造した車いすはカタログ販売をしている。

パラリンピック大会はエリートアスリートの自己実現の場である。一方、途上国では「好きな人が好きなことをする」というスポーツの根源的な恩恵を受けられない人が多く存在する。スポーツを通じて社会的マイノリティの自立と社会参加を推進する活動には大きなニーズがある。草の根レベルでのパラスポーツの普及活動は今後も一層必要とされるだろう。



Dedza Sec Schoolの生徒達と石井さん夫妻

アフリカ赴任40周年記念と柳川さん慰霊ツアー

2019年9月～10月

(※旅行メモより、マラウイ訪問の部分を抜粋)
メンバー：あっさん(麻生学)とーちゃん(石井正信)
マキコ・リラックス別名グルグル・マキコ(石井牧子)

9/30(月)リロングウェ 15:30着

マラウイの首都リロングウェに到着。日本の支援で建設された空港で、チョットいい気分。空港で両替とマラウイビザ(US75ドル)を取得する。US1ドル=745クワッチャ=110円。US300ドル両替=223,500クワッチャ一番大きなお札:2,000クワッチャなので、約300円。空港でタクシーのドライバーとあっさんが交渉して、乗り込む。ドライバーの名前はエリオット、カールおじさんにそっくりで、とっても愛嬌がある。ブラワヨのフェデリイスといい、今度のエリオットといい良いドライバーに巡り合う。あっさんの眼力と交渉力に敬服!!〈サンバードリロングウェ泊〉

10/1(火)サンバードリロングウェ発

朝食時、いきなり火災警報が鳴って、全員外の広場に避難。どうやら厨房でボヤがあったらしい。8:30にエリオットが迎えに来て、あっさんの故郷デザへ出発。M1ロードから外れ、ラフロードを走ること数十分。40年前はユーカリの森の中にあった一軒家が、ポツンと見えてきた!森は伐採されて、木こりのマラウイアンが大きな鋸を使って製材していた。昔の住居はそのまま、今はマラウイアンの先生が住んでいる様子。使用人夫婦と記念撮影して、歩いて5分位の学校に向かう。全寮制の学校で、様子を見ていたら人懐っこい生徒達が集まってきて、記念撮影。通りかかった校長先生に挨拶すると、校長室へ案内されてしばらく懇談する。学校を後にして、ンチェウで昼飯。バラカを通りゾンバ



マンゴーチに行く途中の昼食風景 ドライバーのエリオットと

へ入る。さすがに昔の首都だけあって、田舎町とはちょっと違う雰囲気が漂う。ゾンバプラトーの山道を登り切ったところが今日のお宿、クチェワイン!標高が約900mと高い為、気温16°Cと肌寒い。夜は雨模様・・・〈クチェワイン泊〉

10/2(水)クチェワイン発 8:30分

気温15°C小雨の中、モンキーベイに向けて出発。途中からバオバブの木が多くなって来る。日中は雨も止んで、気温もぐんぐんと上昇し、33°C。マラウイ湖沿いを北上し、陸軍ベース基地ゲートを抜けて、マラウイ湖畔へ到着。チキンカレーとビールで昼食。美味い! 次の目的地は、クラブ・マココラ!マラウイ有数の高級リゾートホテル。バオバブの大木の下に、大きな実が落ちていて、あっさんが目ざとくゲット!!日本で芽がでるか期待する。帰りの車中で、マキコリラックスが写真撮影中にケータイを落とし、慌ててエリオットに車を止めてもらい、車から飛び出して拾うが無残にも、画面がひび割れ・・・ 使用するには支障なくて一安心。ゾンバプラトーの山道を登り始めると、霧が深くなりヘッドライトの先が見えない。やっとの思いでホテルに到着。夕食時のレストランの暖炉には、赤い炎が燃えていた。気温16°C〈クチェワイン泊〉

10/3(木)クチェワイン発 8:30分

エリオットが迎えに来る。車(ホンダのミニバン)は、きれいに掃除されている。ゾンバからいよいよ最終目的地、ブランタイヤに向けて出発。町に入ると、車は大渋滞・・・マキコ・リラックスの昔の職場:QECH (Queen Elizabeth Central Hospital) に到着。ジャカラランタが満開で、とても美しい。病棟は昔のままらしく、ずんずんと勝手知ったる産科病棟へ突入する。マラウイアンはとてもフレンドリーで、40年前にいきなりタイムスリップ!!とても歓待されたようだ。本当に来てよかった・・・次は、とーちゃんの職場:PVHO(Plant Vehicle and Hire Organization)だ。ちょうど昼休み時間にかかってしまったが、事務のおばちゃんが責任者の所へ案内してくれ、一緒にあちらこちらと案内してもらった。40年前と建物は変わっていなかったが、工場内は閑散とした様子で活気がなかった。日本人は働いていないとの事。PVHOを後にして、今日の宿Mt. Socheにチェックインして、エリオットにお礼を言い、別れる。ホテルも40年前そのままのようで、あちこちと老朽化が目立つ・・・夕食は、久しぶりに中華と思い、近く



ジャカラランタが満開のQueen Elizabeth Central Hospital

の香港レストランへ。ビールを飲みながら、出てきた料理を見てびっくり、食べてげんなり・・・ヤキソバ、酢豚、あともう一品何だっけエ・・・ともかくまずかった。〈Mt. Soche Hotel泊〉

10/4(金)Mt. Soche Hotel発

フロントでタクシーを呼んでもらい、マラウイ屈指の歴史ある教会St. Michele見学。教会内は荘厳な雰囲気漂っていた。教会を後にして、昔のJOCV事務所のあったニャンバードウエを目指して歩く。たしかこの辺り・・・と、感の良いグルグル・マキコが目にした文字の消えかかった看板には、<JAPAN・・・OFFICE>が読み取れた!一同、感激・・・その後、サニーサイド、ダラップと探し出して写真に収める。街中で、可愛い赤ちゃんの写真を撮ろうと母親の了解を得て、カメラを向けると、周りにいたお金目当ての輩が騒ぎ出す。あっさんの「イーウエ!!」の一喝でひるんだ隙にスタコラと退散。街に住んでいるマラウイアンは、油断ならない。〈Mt. Soche Hotel泊〉

10/5(土)Mt. Soche Hotel 5:00発

昨日予約していたドライバー、アブドゥールの迎えで早朝5時に出発。夜明け前のチレカ・ロードを20分位走ると、チレカ空港に到着。まさしく40年前にマラウイに到着した空港だ。出国審査もすべて手作業の為、せっかく梱包したスーツケースも全部開けられて、中はゴチャゴチャ・・・定刻通り、エチオピア航空で一路ヨハネスブルクへ。

ブランタイヤ発 07:20

榎 道彦

昭和55年度 3次隊

職種 農業土木

任地 リロングウェ

今思うこと



1981年 ハロウインの子供達

マラウイには、1981年から2年間協力隊員として、また、JICA専門家として2011年と2017年から3年間ずつ、合計8年間に亘り同じ分野で同じ組織に関わらせてもらった。協力隊当時の灌漑局は、大統領府直属で局長はイスラエル人、副局長にマラウイ人、本省には、イギリス人、オランダ人等の外国人技術者のみ、地方に現場監督のマラウイ人という体制だった。私は若くして、局長、副局長に続く他の外国人技術者達と同じNo.3のポジションにあった。マラウイへの協力隊派遣は1971年に開始され、すでに灌漑局だけでも多くの先輩隊員たちが活躍しており、私も前任者の様に活躍することを期待されたが、英語もろくにできず、社会経験もなかったため、技術者として殆ど使い物にならなかったと思う。それでもいつかもう一度途上国で働きたいと思い、帰国後、建設コンサルタント会社に就職し、バブル景気を経て、縁あってJICA専門家となることができた。そして、協力隊から約30年後にマラウイの灌漑プロジェクトに参加することができた。

30年の間にマラウイの街並みや人々の生活水準がそれなりに変わっていた。久しぶりの灌漑局は、以前と同じ敷地内にあり、その仕事ぶりは相変わらずドナー頼りが多く、改良すべき点が山の様にあったが、マラウイ人が本省から地方局まですべてを取り仕切っており、年月の変化を感じた。

仕事柄、地方での活動が多く、専門家としての6年間に協力隊員と出会う機会も多くあった。昔と変わらぬ厳しい生活環境の中でも、彼らの仕事への情熱や語学力等に何度も感心させられた。その都度、30年以上前の電気も水道もない生活、ラテライト道路

の移動、測量中象に追いかけられた事、マラリアで苦しんだ事、いろんな人と出会った事等々、初心を思い出させてもらった。

マラウイに派遣された全ての隊員が少なからず同国の人々に影響を与え、与えられてきたと思う。これからもマラウイは発展していきだろうが、いつまでもマラウイがWarm Heart of Africaと呼ばれ続ける国でいて欲しいと思うのは私の勝手だろうか。



2014年 Machinga, Wenzide灌漑事業地での村幹部によるサインボード設置

側嶋 康博(そばしま やすひろ)

昭和55年度 4次隊

職種 理数科教師

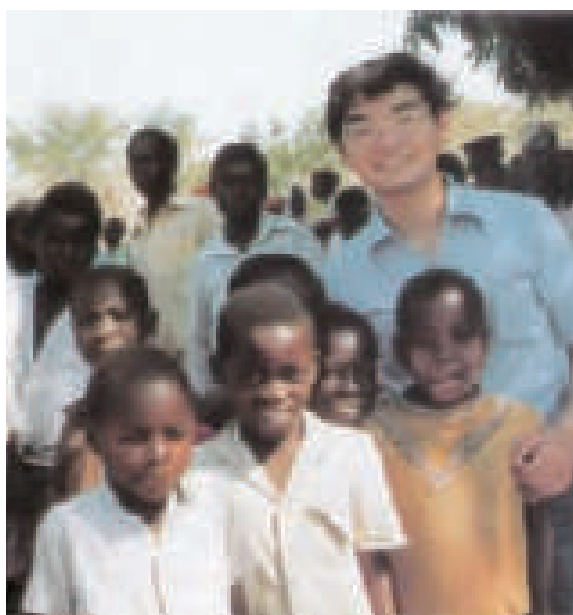
任地 カロンガ

出身地 福岡県出身

私の骨格を作った
マラウイ北部カロンガ・チャミナデでの二年間

今から約40年前(1981年4月)、私は青年海外協力隊理数科教師として、マラウイ北部マラウイ湖に接するカロンガ近くのチャミナデ・セカンダリー・スクールというミッションスクールに派遣され、2年間、学校の敷地内の一軒家で(最初は渡辺嘉三隊員と同居、後に雨宮孝志隊員と)暮らしながら、寄宿する男子校生徒たちへ数学(代数・幾何)、物理、化学を教える毎日でした。

週30時限(一日6時限×5日)の授業を行い、宿題を採点し、模擬試験問題を作り、実験をする、というあわただしい毎日でしたが、音楽クラブを創設して生徒たちと歌を歌い、チャミナデのブラザーらが上映する映画を校内で観賞したり、サッカーの試合や祭りでの踊りを楽しんだり、実に充実した日々を送ることができました。



1982年 カロンガ
祭りを見に集まってきた
子供たちと私

協力隊という国が支援する草の根の活動に参加させていただき、単なる経験の枠を超えて、自身および任地の人づくり、国造りに参加させていただきましたことは、たいへん貴重な体験であり、皆さまに心から感謝いたします。いつか、一度、戻ってみたいと思いつつも、がまんを続けてきましたが、40年を経過してしまいました。

最後に、私にとっての「アフリカ」「マラウイ」「カロンガ」を描写した詩(40年近く前に作成したもの)をお伝えします。

澄んだ空気と照りつける太陽
視界いっぱいに広がるサバンナの大地
バオバブの木、色あざやかな草花
一直線に伸びた道路の脇で少年は牛を追い
雑貨屋のラジオからは
ゆっくりしたアフリカン・ルンバが流れる
その周囲では母親の後について
女の子たちが水や薪を運んでいる
私にとってアフリカは、強い光線とあざやかな色
ルンバのメロディーと牛のにおい、そして
甘いマンゴやパパイヤの味だ

水谷 恭二

昭和56年度 1次隊

職種 森林経営

任地 デッサ

50年は長い！ 9年半の思い出

祝 派遣50周年 先輩方の活動が評価され、多くの要請に応じて、途切れることなく派遣が続き、「奮闘努力」する隊員・SVに、温かく迎えたマラウイの人々。職場の同僚のみならず、青空市場や道路際の人々まで。「人と人」が二国間の良好な関係の基礎と信じています。

30歳までに定職に就けばいいやと学卒直行で参加した協力隊、おかげさまでそのまま仕事につながることができました。協力隊事業とマラウイに感謝しかありません。マラウイへの隊員派遣が、細くなるうとも不要となる日まで長く続き、マラウイを第二の故郷とする人が増えることを願っております。3回の滞在を簡単に記しておきます。

隊員(1981.8~1984.8)

1981年7月30日成田を出発、(香港、コロンボ)セイシェル、ナイロビ経由で8月3日チレカ空港に到着。Nyambadweの事務所兼ドミトリーでの現地訓練、カバロ先生のチチュワしっかり勉強しておけばよかったです。Chikangawaへ赴任のはずがブランタイヤ勤務となり、Dharapのフラット(同期と同居)からChichiriのKamuzu

Stadium近くの営林署まで自転車通勤、ほうきで道を掃く人々を見つ、交差点で5タンバラ(12円)のマンダジヤや15タンバラのTimes紙を買い、Limbeへの道、ユーカリの木の道を走って20分、水道公社の貯水池の向こうに緑豊かなNdirandell山、ここの植林地が現場でした。30年間の伐採計画のため、林班ごと



に材積量を推計し、タイピストにお願いした表を、リロングウェの英国人上司に報告する業務。ブランタイヤでの娯楽は徒歩10分ほどのアポロシネマ、上映前に国歌演奏、起立して大統領を拝するのがお約束。ブランタイヤの後、Dedza Chongoniそしてリロングウェに転勤しました。

調整員(1984.11~1987.8)

成田発、香港、(バンコク)ボンベイ、ナイロビ、リロングウェ経由でブランタイヤに翌日到着。事務所はNyambadweの戸建(後のブランタイヤドミ)、駐在員(所長)、先輩の嘱託調整員、医療調整員、秘書隊員、現地職員3名の計8名。庶務・会計・雑用係でした。在勤中、お別れ会を3回、タンザニアバス事故、現地職員、マラリア病死隊員。沢山のみなさまにお世話になりました。 合掌

所長(2005.3~2008.10)

成田発、香港、ヨハネス経由でリロングウェに翌日到着。18年ぶりの第2の故郷、都会は大発展、村は昔のまま、格差が拡大。大量のミニバス、全国津々浦々のチプス屋、そして、隊員が地方の奥深くまで派遣されていて驚嘆。かつて、派遣中隊員130人中、電気、水道、水洗トイレ無は小生1人でした。事務所も大所帯に発展、業務もJICA全般、新米所長を支えていただいたすべての方々に感謝しかありません。隊員の任地を含め、ChitipaからNsanje、大使館への業務報告でルサカまで出張させていただき、chikandeやchikandaを賞味しました。慰霊碑清掃や剣道練習(の運転手)、引退したDedza営林署の上司をMchinji奥のLipunga村へ。そしてブランタイヤ生まれの長女(後にキルギスPT隊員)と、卒論「マラウイにおける小児分野のリハビリテーションと国際協力」の調査で、一緒にあちこちの病院を訪ねることができました。日本財団アフリカ訪問団(曾野綾子団長)、一村一品、平松元知事らに「現場」をご案内する機会に恵まれたことも感謝しかありません。 Zikomo Kwanbili!

マラウイ協力隊派遣50周年に向けて

マラウイ協力隊派遣50周年、おめでとうございます。

これまでに1,897人の隊員が派遣されたとの事ですが、私もその中の一人であったこと、光栄に思います。

私は、昭和57年度3次隊、看護師隊員としてマローサのミッション系病院、St.Luke's Hospitalで、2年間活動をしました。そして、その経験を機に、今もアフリカで健康管理員をしています。

マラウイは、私にとって、初めての海外、初めてのアフリカでした。

全てが初めての事で、現地訓練が終わって、任地に赴任する時、荷物と共に私を置いて走り去る調整員を見送った時の、なんと心細かったことか。

配属された小児病棟では唯一の正看護師として病棟管理も期待されての赴任でしたが、言葉は出来

ず、病気の殆どは見たこともなく、医師が書いたカルテは判読できず、最初は、不安と緊張と、自信喪失の毎日でした。しかし、病棟の准看護師さん達や実習と称して病棟に配置されていた看護学生達、海外から派遣されていた医師や看護師等、たくさんの人達のお陰で、無事2年間を終えることができました。

その間に、たくさんの子供達とその家族に接しましたが、日本にはない様々な厳しい医療の現実に直面し、戸惑ったこと

が何度もありました。「酸素ボンベの数が少ない病院では、自ずと患者に優先順位がつけられる事」「手でバッグを押す人工呼吸は、いつまでも続けられない事」「1日に3人も4人も亡くなる日がある事」「ベッドは30でも、床にマットを敷けば、100人の病児が収容できる事」等々、今でも忘れられません。

あの病院での協力隊員としての2年間は、ただ、求められる、いろいろな業務をこなすのに精いっぱいの日々だったのですが、これまでの私の人生の中では最高の2年間でした。

最後になりましたが、マラウイの協力隊派遣事業が、これからも発展を続けられますことと、派遣された隊員の皆さんが、健康で、実りの多い2年間を過ごされますことを、心から願って止みません。



健康管理員としてアフリカ各国で勤務。この写真はザンビア時代。

山上 慎吾

昭和60年度 2次隊

職種	自動車整備
任地	カロンガ
配属先	1985年12月～1987年11月 Karonga ADD 1987年12月～1988年11月 Air Malawi
出身地	広島県

私は昭和60年末、南回りのBA便で香港、セイシェルズ、ナイロビを経由して、駅舎のようなブランタイヤ空港に降り立ちました。

不安の中、当時はまだブランタイヤに事務所、ドミトリーがあり、チェワ語の訓練を経て、やっと配属が決まりKaronga ADDに赴任しました。

配属先では農業開発普及員が使う100ccのヤマハ製オートバイの整備指導が主な仕事で、ご多分に漏れず修理をするための交換部品が無く、故障したオートバイで工場は一杯になっていました。使えそうな部品を修理して凌いでいましたが、それも数カ月で万策尽き、次は壊さないようにするための教習コース作成に取り組みましたが、部品購入、教習コース作成共に予算が付かず断念。仕方が無いので、現地での生活を思いきりエンジョイすることにしました。

北部地域は米どころで、収穫時期には現地の友人と農家を回って籾付キロンペイロを2トン仕入れ、乾燥、籾摺り、精米が終わる頃イスズのピックアップで取りに来てもらっていました。到着時を見計らって、豚の丸焼きとバサのコロッケを作って、久々の日本人と酒を酌み交わしながら会話するのが楽しみでした。そしてあっという間に任期終了が近づき、本来の仕事では不完全燃焼だったので、事務所と相談した結果自分で配属先を探してくれば、1年間の任期延長を認めてもらえることになりました。

隊員派遣要望書のファイルから、アポ取り、要請背景調査、隊員の処遇交渉を自ら行い、Air Malawiへの新規派遣契約にこぎ着け、KIA(Kamuzu International Airport)のあるルンバジに引っ越し、3年目の隊員生活を開始しました。

Air Malawiでは、航空機地上支援機材の整備指導で、ここは国策営利企業だったので部品購入予算もあり、1年間の短い期間でしたが、初代隊員として納得

がいく仕事ができたとと思います。

帰国時の日本はバブル真っただ中で、幸いにしてヤマハ発動機に就職することが出来ました。

その後、3カ国15年間の海外駐在を経て昨年定年退職を迎えましたが、再雇用で上海にて駐在生活を送っています。



Karongaでの活動風景



ブランタイヤのドミトリーにて

STORY

16

久田 守雄

昭和61年度 1次隊

職種 上下水道設計

任地 リロングウエ

出身地 水戸市

マラウイ派遣50周年を記念して隊員時代を回想してみたい。腰痛のため出発が遅れ、2次隊より2週間ほど早く一人で日本を出発した。

現地語学訓練は2次隊と共に受け、リロングウエの水道局に赴任した。出勤第1日目、「派遣要請してから赴任するまで遅過ぎる。お前は必要ない。」と言われ、アシスタントエンジニアと同室で勤務することになった。彼は民間設計コンサルタントの勤務経験があった。隣の大部屋にはマラウイ大学を卒業したエンジニアがたくさん居た。お前は必要ないと言われた理由がわかった。

私はカスング浄水場の設計を任された。実は、日本では浄水場の水計算や構造計算の経験が無かった。東京の書店で浄水場の水計算や構造計算の本を探したが無かったので、ある程度覚悟はしていたものの困ってしまった。そこで、基本設計書を上司から見せ

てもらい勉強した。なんとか水計算や構造計算をして設計図を完成させて上司に提出した。更に困ったことが起きた。設計内容を説明しろと言うのだ。説明すると設計のゴマカンがわかってしまうので、「英語が出来ないから説明できない。私の設計図は基本設計図と変わらないから、私の設計書の数字を追っていけば理解出来るだろう」と言ったら納得してくれた。次は、工事費積算をしろと指示があった。日本で経験してきたので出来ると思った。ところが日本と違い、積算に使う資料等が無く手も足も出なかった。工事費積算が出来ない理由を述べたら、直属の上司が代りに工事費積算をしてくれた。

任期最後の半年間は、手計算による配管網の水計算を勉強して教科書を作り、希望者を募って勉強会を開催した。浄水場の設計は一労働者にすぎなかったが、配管網の勉強会でやっと協力隊になったと実感した。



職場で浄水場の設計・製図に従事、水道局、1987年4月30日撮影

田村 弘子(旧姓:田島)

昭和61年度 3次隊

職種 秘書

任地 リロングウェ

配属先 JICAマラウイ事務所

出身地 埼玉

マラウイ協力隊派遣50周年おめでとうございます。私が61年3次隊の秘書隊員としてマラウイの地を踏んだのは1987年4月のことでした。34年も経った事に改めて驚き、感慨もひとしおです。しかし臉を閉じればまるで昨日のことにように思い出せるのは、それだけ強烈な印象が多い日々を送っていたからでしょう。

私は秘書隊員としてJICAマラウイ事務所に派遣されましたが、専門の技術や知識を持ち現地の自治体に派遣される隊員と異なるため、同事務所にて隊員活動の後方支援を行っていました。目指すは「縁の下の方持ち」と意気込んでいましたが、支えるどころか常に周囲の人々に支えられ助けられていました。30年以上経った今でも普段の生活やふとした瞬間に、まるで自分がマラウイにいるかのような感覚を抱くことがあります。例えば対向車の少ない山々の間の高速道路では、マラウイのM1を走っているコーチラインに乗って

いるかのような感じです。また澄み切った真っ青な空や雨上がりにダブルレインボーが見えた時など、懐かしくマラウイが思い出されます。遙か遠いマラウイですが、心の中ではいつも身近に感じています。

二年間という隊員派遣期間はあっという間でした。多くの失敗や後悔もありますが、隊員として様々なことを経験できたことは一生の宝物となっています。マラウイで知り合った全ての方々にこの場をお借りして感謝を申し上げます。2020年初頭から世界中がコロナ禍に見舞われ非日常が当たり前の世の中になってしまいましたが、異なった視点からの考え方や行動が求められているような気がします。それこそが協力隊員の得意とすることではないでしょうか。現在派遣中及び未来の隊員の皆様、“The Warm Heart of Africa”であるマラウイを堪能し、心身ともに健康で再び日本の土を踏むことを願ってやみません。

「一国との出逢いで人生は変わる」



「ナミテテ、変わってなかった商店前」 1988年隊員時代

マラウイ協力隊派遣50周年おめでとうございます！
赴任時、私にはフィアンセがいた。2年後の帰国の時はポルシェで迎えに来ると約束した。

任地での活動が始まり不思議なもので、疑問や困難に立ち向かう度、それと同時に、フィアンセへの思いも変わっていった。新しい出逢いもあったが、気持ちが薄れていくのとは違う、考え方が変わった自分は、きっと彼にはふさわしくない人間であると思えて来た。

ナミテテの赴任先は4LDKの立派な一軒家を準備してくれていた。最初の晩から盗賊が家を襲ってくるという怖い夢を度々見た。その夢の中で叫んでいた「Who is it!」という声で起こされ寝言が英語になった時、怖い夢は格段に減った。

活動に行き詰ると、一人旅に出かけた。リロングウェイに出て、エクスプレスバスでムズズに向かう。途中、サリマ、コタコタで隊員の家に泊めてもらった。ブレイクダウンが重なり夜中チンテチェ近くのバス停に降り立ち、夜が明けるまでグンビの舞う中、バス停で一人野宿をした。朝になり「すぐそこ」と言われ、結局2時間歩いて別世界の湖畔のホテルで一泊。帰りはマトーラで途中バスに乗り換え、ムズズに向い隊員に

挨拶して、また固いバスのベンチシートに座り何時間も揺られナミテテまで帰ってきた。何日かかっただろうか、その頃には、深く考えていた悩みは何か違うものになっていた。

このマラウイの三年間で自分の価値観が変わった。そして使命を与えられた。マラウイの何がそうさせたのだろうか？病院では沢山の子ども達が生まれてくるが、葬式も毎日のようにある。最貧国の中にあるのに、彼らは多少の嘆きはあっても、明らかに我々日本人たちより遅いし、寛容で陽気である。貧困・難民・感染症・低識学率等々問題は深刻なものばかり。その原因は彼らが怠け者だから、資源がないからではない。今の自分なら分かる。それに着火してくれたのがマラウイである。

帰国の時、1人で成田空港に到着した。3年振りの日本をかみしめていた。大きな荷物を受け取り成田空港を出て、乗客の車昇降場まで行き、ポルシェが停まっていないことを確認した。最後の仁義を通したかった。アフリカの水を飲んでしまった自分、これから新しい人生が始まると、なぜか足取りは軽かった。今から30年前のことである。マラウイと出逢っていなければ今のこの人生はなかったとはっきり言える。毎日が100点満点！



「ナミテテ、変わってなかった商店前」 2007年再訪時

クイーンエリザベス中央病院：小児科医海を渡る



クイーンエリザベス中央病院 小児病棟

平成元年4月から2年間、クイーンエリザベス中央病院(QE)の小児科で活動しました。

広尾訓練所の入所式は昭和64年1月6日。最初に

言葉を交わしたのが同じQE赴任の小林くん(愛称は大将)。――大将はチュワ語訓練を受けたドーワの村でギターを爪弾きながらハスキーな声で拓郎をよく歌いました。無数の星が瞬くアフリカの夜空の下に流れる彼の歌声は故郷を後にした僕らの心にしみわたったものです。訓練中に昭和天皇の崩御に伴い年号が平成に変わりました。協力隊を支援してきた皇太子殿下が天皇になり恒例だった皇太子殿下とのご接見は中止になったのですが、翌日、新天皇陛下のたつてのご希望で拝謁が決まりました。

家族に見送られて成田を発ちロンドン、ケニア経由でアフリカ大陸を南下しマラウイ領空から見下ろした大地の豊かな緑に驚きました。チュワ語訓練、任国内旅行が終わり18人の同期は各々の職場に向かいました。QEは4人が赴任。口腔外科の原さんはバイオレンスが多くのワイヤーで手袋が破けるとため息、医療機器の大将は機材がバラバラで部品が入手できないと嘆き、助産婦の小久保さんは日本で助かる赤ちゃんが次々と亡くなると眉をひそめました。僕の小児科病棟では毎日子供が亡くなり母親の号泣を聞かない日はありませんでした。やりきれない気持ちは援助に依存する国の体質にも向かいましたが、「その国を憎んで何が生まれるのですか」事務所長の仲井義英さんの言葉は胸にしみました。マラウイでの日々は夢のように瞬く間に二年が過ぎていきました。

平成25年3月マラウイを再訪しました。後輩隊員に見送られチレカ国際空港を後にして22年です。小児科の上司だったDr.ボグステンに会って本を手渡すためでした。

同期の原さんが癌で亡くなった友人の墓参りをしたいとマラウイへ同行してくれました。リロングエでは隊員のときにお世話になった大島英子さんが健康管理員で再赴任されており彼女の車で南下しました。三人で87歳になったボグステンをプランタイヤ郊外の山腹の自宅を訪ねました。「Dr.クロイワ」小さくなった彼女は満面の笑顔で迎えてくれました。「QEでの体験を本に書きました。日本語ですがあなたとの会話にはマーカーをつけました」本の扉に英語で彼女へのメッセージを添えたのですが目を細めて嬉しそうに読んでいました。テーブルのクッキーはQEのお茶の時に彼女が作ってくれたものと同じで懐かしい味をかみしめながら話はつきませんでした。

翌日は一人でワクワクとQEの小児科に行きましたが婦長さんは退職し、かつての同僚は一人もいません。思い出の詰まった院内を歩きました。原さんの歯科、小久保さんの産科、長い廊下を東へ歩いて大将の事務室の近くのカンティーンに着きました。ここではよくコーラを飲みました。突然でした。激しい寂しさに襲われて僕は動けなくなったのです。胸がつぶれそうで来るんじゃないかとさえ思いました。-----人がいないのです。思い出とは懐かしい建物ではなく同じ時を過ごした人だったのです。

今回の寄稿にあたり「小児科医海を渡る」を読み返し隊員たちがとても素敵なきことに気づきました。若くて純粋で一生懸命で希望をもっていた。マラウイに心をこめてジコモ!!

略歴

帰国後、専門家でポリオ根絶事業に参画。2002年～2010年、東京大学国際保健計画教室の准教授、2008年「小児科医海を渡る」を執筆。2010年臨床に戻り離島医療に携わった。



2013年 ボグステン再会



著書『小児科医海を渡る』

50周年おめでとうございます。

訓練所も含めて隊員時代の思い出は、たくさんありすぎて何からお伝えしたらよいか迷います。

訓練所に入って2日目時代が昭和から平成に変わり天皇陛下に拝謁。経由地のケニア空港で「要請が無くなりました」と告げられ、マラウイに行って良いのか不安になったことを思い出しました。任地が決まるまで3か月ドミトリーで過ごし、要請内容が変わったので任地もブランタイヤからリロングウェに変わり、Central Region Athletic Coachとして放課後のクラブチームの練習を見ることになりましたが、毎日練習に来ることが無いのでそんな時は、子供たちと遊んでいました。当時は、大統領がリロングウェを通り抜けるたびに沿道での見送りに市民が駆り出されるので、仕事も強制終了。飲みに行く場所もないのでよく家飲みをしていました。陸上競技の大会があると呼ばれて地方に行くこともありました。100M走で目をつぶっているのか何なのか真っ直ぐ走れない子がいて、コースを逸脱したら失格なのにその指導者がルールを知らないことに驚き、まずは、指導者の育成が先だと思った。

赴任して1年経つ頃、リロングウェの隊員で企画して運動会を実施した。隊員の配属先対抗運動会。場所は私の職場のKamuzu Institute for Youthのグラウンドで、子供と大人が楽しめる種目を考え、優勝賞品は、もちろんシマ。今、思い出すのは、風船ふくらましゲームです。経験が無いのかとにかくくわえて膨らますことが出来ず、風船の口を広げて空気を入れようとして最後は、それが可笑しくて膨らませなかったのが一番印象に残っています。最後にありがとうって言ってもらえたことが嬉しかったです。

初めての体育隊員として何かできていたのかと報告書を読み返してみましたが、力不足の活動が見えるだけでした。でも私は、マラウイに赴任できてよかったですし、今の私にとってターニングポイントだったと思っています。

15年前、主人の仕事でマラウイに戻ることが出来た時、南アの空港でカウンターパートだったIsaac Phiriと会ったときは、奇跡の再会に喜びました。マラウイは、私の第二の故郷と言えるかもしれません。



選手!! ゼッケンはホッチキスでとめて、次の選手がこのゼッケンを使うことに。



クロスカントリースタートです。これがユニホームです。当時の政策で女性はズボン・短パン禁止です。



日本の茶会紹介、司会はMRマンガ(日本大使館に移られた方)。当時は日本大使館が無かったので、Kamuzu Institute for Youthで実施。

63-3マラウイ 外科医 その後

あれからずっとアフリカに関わっています。国際協力をライフワークとする医師たちと徳島で「さくら診療所」を開設、何でもありの体制で地域医療に貢献しつつ、TICOというNGOを運営し、縁があってザンビアとカンボジアを支援しています。事務局長は同期の福士庸二氏です。ザンビアでは、いろんなことがありました。

ルサカ救急隊創設、農村の保健活動ではJICA草の根パートナー事業を3期実施、学校建設、井戸掘り、環境保全型農業モデル事業、干ばつ緊急支援などなど。

3年前からザンビア大学病院と連携して心臓外科チーム養成を行っています。小児だけでも毎年推定6000人ほどが心臓手術を必要としています、まだ何もできていません。ザンビア人チームで初の人工心肺

を使った心臓手術を10例ほど実施するところまで漕ぎつけたところで、残念ながらコロナ禍で中断しています。

日本でのワクチン接種が一段落し、出入国の規制が緩和されたら再開するつもりです。

NGOの欠点は経済的(経営的)な戦略に乏しいことだと感じています。事業のサステナビリティを考慮してきたつもりですがいつも難しい。これからは収益を上げつつ地域で向上していける組合のような事業を展開したいと考えています。また、日本でもアフリカでも気候変動の影響を大きく受ける時代に突入しました。持続可能な農林業を基盤とする新しいライフスタイルを追求しています。手始めにカシューナッツなどの植林と養蜂を始めました。



Zombaでよく食べた果物



外科医の職場



心臓外科チーム ザンビア大学病院にて



カシューナッツの苗

協力隊派遣50周年 おめでとうございます



1992年 病院裏の空地での稽古風景

マラウイに隊員が50年もの長期に亘り派遣されている中でわずか二年間ですが、あの国で活動させて頂いたことは、私にとって生涯忘れることが出来ない体験だらけでした。

私は国内最大規模の病院に栄養士として派遣されましたが、病院裏の空き地で余暇時間に子供達と始めた剣道クラブの方が遥かに有意義な隊員活動内容となってしまいました。

当時国内で武道禁止の中、政府関係者より稽古に視察が入りましたが、その後、子供達の熱意によって剣道を政府公認のスポーツとして認めてもらえたのは「真面目に頑張れば報われる」ということを子供達と実体験出来た、本当に嬉しい思い出です。

帰国後もマラウイ剣士達と交流を絶やすことなく、日本国内から出来る協力を微力ではありますが今でも細く長く続け

ています。

当時の子供達が大人になり、昔のプランタイヤ剣道クラブはマラウイ剣道協会となり、本物の剣道隊員が派遣されず、資金・用品の無い中、彼らなりに活動を継続してくれて、2013年にはマラウイ国内初の外務大臣表彰を受賞する荣誉に恵まれました(マラウイにおける20年以上の剣道の普及が認められたようです)。これは、私が帰国した後も、彼らの活動に共感して、サポートして下さった多くの歴代JICA/JOCVの皆様のおかげだと痛感しています。彼らを支援して下さった皆様には感謝しかありません。

私自身の近況ですが、57歳の現在、病院の栄養士として勤務しており、隊員時代の経験が今日の業務にも少しは活かしているかと感じています。

JICAマラウイ事務所および協力隊員の皆様、今後とも、マラウイ剣道協会およびマラウイ剣士に対する御理解、御支援、そして御協力のほどを何卒よろしくお願い申し上げます。



2013年 外務大臣表彰授賞式典に参加

マラウィ協力隊派遣50周年を記念して

今年でマラウィに協力隊が派遣されて50年と聞き、時の流れの早さ(特にこの20数年)を痛切に感じております。また記念誌発行に際し、たまたまマラウィに戻ってしまっていた私のような者にお声掛け頂きましたこと誠にありがたく思います。

その当時日本で発生していない家畜疾病(海外悪性伝染病)を診てみたいという単なる好奇心から、日本では聞いたことも無い国マラウィに足を踏み入れることになり、Kamuzu International Airportの赤い大地に降り立ったのは今からもう25年も前になります。丁度女性のズボン着用が認められるようになり、終身大統領を豪語し長く続いたKamuzu Banda政権が終わりを迎えようとしていた時でした。赴任直後の実施となっていた総選挙の結果では国外退避も有りとのことで、当時まだ就航していたBritish AirとAir Franceの就航日から、国外退避はパリ?とか同期隊員同士ドミでちょっと期待していたことを思い出します。結局この国民性からかバキリ・ムルジ政権に国政が大きく変ることになるにもかかわらず暴動一つ発生せず、我々はちょっとがっかりしたのも今となれば苦笑の思い出です。

今回20数年ぶりに業務調整専門家として赴任してまず驚いたのは、Lilongweにバイパスが出来信号機が増えていたことでしょうか。Lilongweの街も随分と変わってショッピングモールや高層の建物も増えたように思います。もっとも当時の南部隊員にとっては、Lilongweは余程の事が無い限り行く必要性もなく、よって当時からLilongweの事はあまり知らないというのも事実です。それでも、隊員の交通事故がきっかけで設置された唯一の信号機のご事は記憶にありますから、信号機が増えたことは間違いのない事実です。

現在はマラウィの旧首都のZombaにありますが、ここも懐かしい場所の一つです。当時の南部隊員は隊員連絡所及びドミトリーがBlantyreにあったので、隊員の歓送迎会や交通安全講習会はBlantyreのドミで行われており、その度に宴会が開催されていたことは皆様のご想像の通りです。南部ではBlantyreの隊員数に次ぐ隊員数だったのがZombaで、Zomba Central Hospitalを筆頭に常に総勢10名程の隊員がおり私と仲の良い同期もいたので、赴任地であるThyoloから美味しい食事に有りつくことを目的にThyolo名産のマカダミアナッツやチョコローコーヒー、診療先のエステート



ブランタイヤ ドミ(5-3送別会 仮装女装大会)



視察の旅でやってきた親達 Lilongweへの帰路だと思われ親達を迎えた隊員は様にお疲れモード。「早く帰ってくれ」と思う後半。デッサボタリー



今も有りました
Zombaの同期
隊員が住んでた
フラット

で手に入れる美味しい生クリームを手土産によく足を運びました。現在の職場であるChancellor Collegeへの通勤路にその同期が住んでいたフラット(現在有名になられた杉下先生もそこで暮らしていたと思います)は現存し、毎日その前を懐かしく感じながら通勤しています。毎日の無線交信後のZomba隊員同士のハンディー無線機を使った情報交流はハンディー無線機の熱で無線機を持つことが出来ないくらいになるらしく、Thyoloの田舎からも楽しませてもらっていました。

Thyoloには、3代目の獣医師隊員として赴任しましたが、診療の半数以上が周辺エステートのアズングの方々の番犬やペットの診療という驚きの実態に、野戦病院さながらの設備で悪戦苦闘の日々。一方で、近隣のマラウィヤンが大切に飼っている乳牛の診療に行くと歓待され、乾燥グンビをしこたま頂いた時には、どうしたものかと悩んだ末、イナゴ同様に佃煮にしてOfficeに持って行くとスタッフからバスデポで販売することを勧められるといった日々でした。早朝からのOn Callで白人の馬の診療に行った日にあの地下鉄サリン事件が発生し、白人宅で

朝御飯をごちそうになりながらBBC Newsで報道される映像に驚愕したのも忘れられない思い出です。

当初の目的だった家畜疾病には幸か不幸か遭遇する機会はアフリカ豚熱と狂犬病くらいでしたが、それ以上に貴重な経験を積むことが出来ました。当時は有効な治療薬が無かったエイズで2年の任期中に10人程のスタッフの3人が亡くなりました。帰国後日本にカウンターパート研修に出した優秀なスタッフも、研修から帰った2年程後に亡くなりました。そんな時代だったのですね。

今こうして国際協力の道に踏み込んでいるきっかけとなったMalawiでの隊員生活は、悲喜こもごも、ポーっとしているマラウィヤン達に怒り心頭も多々でしたが、今でも隊員仲間が集まると笑い話になります。

最後にマラウィ隊員派遣50周年にあたり、記念事業および記念誌編纂にご尽力されている方々に深謝いたします。50周年おめでとうございます。



ブランタイヤドミの一番近所にあった隊員のフラット カールスバーグのGreenやBrownが常備されている場所にはハイエナのように隊員達が集まりましたね。ビールケースの角でビール瓶の王冠を抜くのはお手の物、ビールケースに腰かけてカニヤニヤで一杯は楽しみの一つでした。ドミでの宴会はカールスバーグと箱ワインが定番でした。隊員達の手作り料理と隊員宅のパンポーが作るコロックなんかも美味しかったです。

大西 寛

平成6年度 1次隊

職 種 理数科教師

任 地 ムチンジ



「私の大好きな心の風景」

目を閉じるといつも思い出す風景がある。

ゾンバからリウォンデ国立公園に向かう幹線道路。車はめったに通らない。丘を登る道の途中、赤茶けた道端にオートバイを停めて眼下に広がる地平線を眺める。シレ川の雄大な流れに傾いた陽の光が反射している。じっと耳を澄ますと、緑の絨毯の広がりの中から、少年がたたく太鼓と歌声が聞こえてくる。かすかな音であるが、大地の中から生まれる躍動感あるリズムと力強い旋律。This is Warm Heart of Africa。辛いとき、苦しいとき、目を閉じるといつもこの風景が臉に蘇る。自分にとっては一生忘れることのない風景の宝物である。

青年海外協力隊員として1995年12月から1998年3月まで過ごしたマラウイ共和国。国立ゾンバ中央病院のたった一人の外科医として、毎日オベに明け暮れる日々。おりしもHIVエイズが猛威を振るっていた最前線での臨床。腹膜炎、膿胸、カポジ肉腫、四肢切断など、2年半の赴任中に行った手術は3000例を超え、HIV末期で看取った人も1万人を超えた。手術器具も自分たちで工夫して即興制作し、量の限られた薬は大切に使い、輸血は自己血輸血を導入し、毎朝のスタッフ勉強会で臨床医学を教え、ほとんど家にも帰らず病院に寝泊まりする日々。これまでの人生で

一番忙しく、そして最も充実した時間だった。

病院から一步外に出ると、そこにはマラウイの伝統文化が色濃く残った魑魅魍魎の世界が広がっていた。週末は伝統医療師や薬草師、カルト宗教の指導者のところに通い詰めた。夕方になると仮面の舞踏が始まり、月夜の中で行われる通過儀礼は神秘的だった。現地に根を張っているからこそ見えるマラウイの「秘密の社会」。毎日が発見で、挑戦で、歓喜で、後悔であった。

自分はなぜ生まれてきたのか？マラウイで過ごした日々は、自分の人生の中で最も輝いていたと思う。ゾンバを去る日。空港に向かう車の中で涙があふれて止まらなくなった。その時、ここに来るため、この人たちに会うため、自分は生まれてきたんだと確信した。そんな二度とできないマラウイの経験が今の私を支えている。

略歴

東京女子医科大学国際環境・熱帯医学講座(教授/講座主任)
医学部(東北大学)、公衆衛生修士(ハーバード大学院)、医療人類学修士(ロンドン大学院)、地域保健博士(グレート大学キスム校大学院)。1995年青年海外協力隊員(外科医師)としてマラウイ共和国で3年間診療に携わったことを契機に、アフリカを中心に30か国以上で保健システム案件の立案や技術指導に携わる。2015年に国連で策定された「持続可能な開発目標(SDGs)」の国際委員。2014年ソーシャル・ビジネス・グランプリ大賞受賞。2016年医療功労賞受賞。



マラウイ協力隊派遣50周年に寄せて

近鉄奈良線の中づり広告で協力隊を知った。三回目の通知書類でマラウイを知った。24年前、雨季が終わったばかりの爽やかな4月初旬、リロングウェのカムズ国際空港に降り立った。2年後、この空港を発つ際に根拠なくいつかこの地に戻ってくる気がした。以来、マラウイ滞在、合わせて17年が過ぎた。その間、マラウイや日本をはじめ多くの関係者にお世話になり、御迷惑をかけ、育てられたことに感謝する。以下、言葉足らずの散文をお許しいただきたい。

首都リロングウェから車で1時間ほどのモザンビーク国境近くの村ロビ。電気水道もなく、およそ描いていた協力隊生活。赴任初日から先輩隊員と農家グループをバイクで巡回し戻った夕方、マラリア発症。飲み水だけは確保しようと井戸水を汲み沸かして寝た。夜中、高熱で大量の汗をかき目を覚ます。慣れない灯油ランプに灯をつけて外の穴トイレに向かう途中、人生で見たことのない数の星空とマラリアの出迎えにアフリカ大陸マラウイ到着を実感した。それから始まるマラウイ最初の2年間の経験が今の土台となっている。ロビで唯一のボトルストアに星明りで通ったチェワ語夜間学校?!、農家が植付けたマンゴーの枝が嫉妬で折られる事件や、純粋な日本人青年を騙す同僚らにも会った。飢饉が起きた年に、痩せていく農家さんの顔を見て、マラウイの農村の厳しさと農家さんの強さを見た。所詮自分は腰掛だと言われている気がした。同時にもし自分がこのおばちゃんの子供として生まれて



1997年、デッサ県ロビ普及所の展示圃場にて育苗のための練り床の指導を行う。

きたらと想像して、日本に生まれたことに感謝し日本のすばらしさを認識した。ロビでの生活を通してマラウイ人の“Warm heart of Africa”を実感し、許すことを学んだ。村のダイナミックスを少し学んだ。

マラウイ北部のムジンバでは、2005年から約8年、協力隊OV団体であるJOCAの農民自立支援プロジェクトに立上げ当初から携わせて頂いた。家族との初めてのマラウイ生活、息子の名を“Warm heart of Africa”から快心と名付けた。田舎町ムジンバの包容力に助けられ、子どもは5歳まですくすくと育った。マオレ村から派遣団が送られ、1歳に満たない息子に会いに鶏と畑からのたくさんの農産物を抱えて家に来てくれた。10kmの道のりをモヨバあちゃんも歩いて来てくれた。

プロジェクトの中間評価のときに、そのモヨバあちゃんは、収入も増えて生活がよくなった、でもおしゃべりする時間が減ったし、これ以上はもういい、との回答が

あった。一方、農村では南アのヨハネスブルク(通称ジョン)に出稼ぎに行く者が多い中、「自分のジョンはここにある」と自身の畑を指さし、トマト御殿を建てた農家があった。また、公私共に認める貧しい村ゾンベ村の変化は一番大きかった。2013年にマラウイを去り、その3年後に再訪したゾンベ村では、村長は車を買って、全世帯に電気を引いていた。今年は通勤用バイクも購入していた。名付け親となった村長の娘のKOKOROは13歳になっている。

日本に帰国して間もなく訃報を受けた。隊員時代からお世話になったコリアガーデンのオモニ、ムジンバ県農業事務所長チョングウェ氏、そして現地スタッフのテンバ。将来有望視していたテンバの息子は今8歳、祖母と暮らしている。村を回ると、道路を横切る葬式を示す木の枝を毎日のように見ている。携帯電話が普及して以来、“Muli bwanji?”とよく挨拶のみの電話がある。この短い電話の意味の重さを理解するようになった。

農家さんが“マシェッピ”と呼ぶ、「作る前に市場を見ましよう」というコンセプトのJICA農業プロジェクトで活動して現在5年目となった。マシェッピはマラウイ全土に広がりつつあり、農家さんの意識と生活の変化が新居や購入した家畜などに現れる。マラウイの同僚や農家さんの潜在力の高さを再認識した。地下資源はなくとも人的資源があるマラウイ。

この地で暮らすマラウイの

農家さんはどれほど大変なのか、やはり完全に知ることはない。またどれほど幸せなのか当人しかわからない。ただ、近鉄奈良線の中づり広告を見た時に漠然と浮かんだ絵が現実となっている今に、私自身は幸せを感じる。マラウイ人の幸せ感、発展の仕方を部外者が決めることはできない。常に謙虚であり、マラウイの人たちが決める道をマラウイの人たちで前に進むよう、お手伝いを続けていきたい。

マラウイの人が描く日本人像は1800人以上のJICAボランティアがベースとなっている。是非引き続き継続した派遣を願いたい。

最後に、この場をお借りして、様々な困難に直面しながらもこの地を親しみ、第2の故郷としてマラウイでの生活を共にしてくれてくれた家族にお礼を言いたい。ありがとう。今年の年末はムジンバへの国内移動届を出す予定です。



2007年、ムジンバ県カマタンゴンベ村にて、ニンニクを植付ける演習風景。貸出した10玉のニンニクが数年後に新居に変わった。

かけがえのない国マラウイとの関わりを振り返る

協力隊任期終了後も続く、 マラウイとの長いお付き合い

合格通知で派遣予定国がマラウイだと知った時、私の人生で、マラウイがここまで近く深くかけがえのない国になると想像できていただろうか。協力隊任期終了後も、世界各地で出会ったマラウイ人・マラウイ滞在経験者や、修士課程・博士課程のフィールド調査、日本マラウイ協会やA-GOALプロジェクトでの活動などを通して、常に自然と身近で特別な国であり続けたマラウイ。派遣50周年の節目でもある2021年度完結を視野に入れ、日本在住のマラウイ人研究者ルイ・ンテンダさんと共にマラウイ協力隊研究にも取り組んでいる。

そして、2021年6月。私は再びマラウイに舞い戻ってきた。今回は、SATREPS「マラウイ湖国立公園における統合自然資源管理に基づく持続可能な地域開発モデル構築(IntNRMSプロジェクト)」の長期研究員として2年間、研究と実務に携わる予定だ。チェンベ村(ケープマクレア)に滞在し、日々広大で美しいマラウイ湖を眺めながら、現地の方たちとの対話・活動を徐々に進めている。

マラウイでの隊員任期終了後には、中部アフリカ(カメルーン)、東アフリカ(エリトリア)、西アフリカ(ガーナ)にも駐在し、「多様なアフリカ」との出会い・関わりも重ねてきたが、派遣50周年の年に再び南部アフリカ・マラウイに帰ってこられたことは感慨深い。

隊員時代の回想

私が隊員として赴任したのは、マラウイが「民主化」を経て様々な変化を続けていた時期の3年間(1998年4月～2001年4月)。長い一党独裁の時代には要請が

出されなかったという「村落開発／コミュニティ開発」分野にて、マラウイ最初の派遣となった。

配属先のマゴメロ・コミュニティ開発訓練校は、コミュニティ開発と社会福祉のフィールドワーカーを育成する訓練校。「社会調査法」の授業、「フィールド調査プログラム」、リソースブック(Resource Book for Rural Development in Malawi)作成などを担当しながら、コースが開催されていない時期は、マラウイ全国の現場まわり。各地に1～2週間単位で滞在し、様々な活動に参加したりフィールドワーカーや村の方のお宅に泊まって暮らしを実体験させてもらったりしながら、各地域の文化・言語、現実・課題、そして、人々の強さ・可能性もたくさん教わった。フィールド各地では気が付いたら現地の名前でも呼ばれるようになっていき、中南部のチェワ名「ナンベウェ(Nambewe)」をはじめ、トゥンプカ名、トンガ名、ヤオ名、ポトルストア名など、数々の名前をつけてもらった。

マラウイでは、自分が「よそ者」としてではなく「コミュニティの一員」として迎え入れてもらっていることを実感することが多々あるが、これはマラウイ人の類稀なホスピタリティによるところが大きい。そんな国民性に多少は甘えつつ、私も農漁村や都市にて幅広い層のマラウイ人と関わり、現地語や現地社会にどっぷり浸かることで、いつの間にか、「マラウイの Nambewe」としてのアイデンティティが確立されていったように思う。

また、任地や職種は異なれども、運動会・駅伝大会・分科会・隊員総会・相互任地訪問などで貴重な時を共にすることができた隊員やJICA関係者、そして任地・活動を共にした他国ボランティアなどで生涯の友となった人たちも少なくない。

2021年に再び、マラウイの地にて想うこと

2020年から世界的に広がった新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、2021年現在、これまでマラウイでは当たり前だった光景にも様々な変化が生じている。ぎゅっと固く握手を交わすことも大勢で集まって気兼ねなく歓談することも推奨されないご時世だ。しかし、ある程度の「ソーシャルディスタンス」を保った先にいるマラウイ人は、いつの時代も変わらず、陽気で穏やかな人々であり続けている。マラウイの社会には、変化と不変が両存することを再認識する。

派遣開始から50年の間、マラウイにて活動を行った1,800名を超す隊員経験者、そして隊員と関わった多数のマラウイ人にとって、協力隊事業はそれぞれの人生に大なり小なり影響を及ぼしてきた。50周年はひとつの区切りではあるが、マラウイと日本の関係性、そして両国の人々の人生において、協力隊事業はこれからも様々なインパクトを与え続けていくのだろう。

そんな長い歴史の一部に自分も関わり続けながら、久々に長期で戻ることができたマラウイの地で、マラウイ湖に沈む夕陽を眺めながら、これまでマラウイを通して出会った人々をゆっくり思い出しつつ、協力隊の一員としてマラウイに関わることができた幸運への感謝と共に、冷えたグリーンを片手に、みんなと(心の中で)乾杯してお祝いしたいと思う。

Zikomo kwambiri ndi cheers, anzathu onse!



2021年、マラウイ・チェンベ村(ケープマクレア)、マラウイ湖湖岸にて。

マラウイへの忘れ物

ブランタイヤでは、ボランティアの皆さんがテニスを終え、我が家で手分けをして料理を作り、酔っ払い、ごろんと寝ていました。パニップとサニーという大きな犬がいたことを覚えていらっしゃる方もいるかもしれません。リロングウェに引っ越してからは、ボランティアの皆さん、JICAや大使館の方やそのご家族、マラウイ農業省畜産局の人たちなどにも来ていただき、お手伝いさんと妻が作った食事を楽しんでいただきました。私の協力活動の成果は怪しいのですが、妻からお手伝いさんへの技術移転は完璧で、私たちがマラウイを去ったあとも、豆腐作りなどの技術を活かして暮らしているそうです。

2003～2010年に4回の赴任で約7年お世話になりました。前半はブランタイヤに単身赴任、畜産局ミコロングウェ牧場で牛の人工授精に使う凍結精液の製造をしていました。後半は妻と2人の子供も日本から来て、リロングウェの畜産局で人工授精の普及を目指すプロジェクトのお手伝いをしました。プロジェクトでは20人ほどの家畜飼育などの隊員の方々とご一緒させていただき、とても充実した日々でした。カロンガ、ムズズ、カスング、リロングウェ、ブンブエなどを拠点に人工授精の普及や畜産技術の移転に皆さん一生懸命でした。リロングウェとミコロングウェの間を何十往復も運転したこと、ボランティアの皆さんと電気も水道もあやしいツチラ牧場での農民人工授精師養成研修で、毎日ゆで卵とミルクティーで過ごした日々、南アフリカに種雄牛を買いに行ったことなどは懐かしい思い出です。

るさかがビショップマッケンジーでアジアから来た英語の分からない子どもということではじめられたり、仲が手首を骨折したら病院で麻酔もせずに力づくで整復されたり、美保が全身をダニ(?)に咬まれ痒みで眠れない日々が続いたり、私が狂犬病のワクチンを犬に打とうとしていたのに反対に犬に咬まれてワクチンを打たれるはめになったりと、いろいろなことが

ありました。しかし、その都度おもしろいボランティアのお兄さんお姉さん、不思議な専門家や事務所の方々、そして何よりも腹立たしかったり可笑しかったりのマラウイの皆様によくしていただき大変感謝しています。某大臣が我が家のソファでうちの子どもとゴロゴロ寝そべっていたのはなんともユーモラスでした。舌が口の中に戻らなくなってしまったカメレオン、手負いのハリネズミ、道路から拾われてきた亀、生き延びたヤギ、マラウイ湖から来た魚・さかな・サカナ、朝を教えてくれるハチドリ、そしてウサギに犬と多くの生き物にも癒されました。

私はマラウイで網膜剥離になり南アフリカで手術をしました。これが原因でマラウイに再赴任することが叶わず、仕事は中途半端、犬たちも家財もそのまま、子どもたちは友達にまたね～と言ったまま、マラウイに戻れなくなってしまいました。隊員さんたちが家族4人の名前を入れて作ってくださったデッサポタリのお皿は今も我が家の本棚に鎮座ましましています。私がマゴメロで買った埴輪のような一對の人形は外のプランターの中でひっそりと雨に濡れています。私たちに遅れてマラウイから日本にやってきた犬のビタミンは一昨年亡くなりました。

私たち家族を育ててくれたマラウイの人たち、そしてマラウイに、まだ「ありがとうございました。さようなら。」と言っていないんですね。

2003～2010年：獣医師シニア隊員、フィールド調整員、企画調査員(ボランティア)、農業省畜産局ミコロングウェ牧場、農業省畜産局、平成元年度ザンビア獣医師隊員



2008年 リロングウェ、水谷所長送別会



2010年 リロングウェ、牛の人工授精師として立ち上がった農民の再研修

マラウイで学んだ「協力隊スピリッツ」を胸に

青年海外協力隊の試験に挑戦したのは30歳前でした。その頃、私はビル管理会社に勤めていて、設備の点検や警備などの仕事をしており、通勤の山手線の車中で、協力隊の募集広告を見て応募しました。協力隊の募集説明会に参加し、OV隊員から話を聞き、試験対策に取り組み、マラウイ共和国派遣予定者として合格することができました。

私は、英語が苦手で、理数科教師の職種でしたが、教師経験も有りませんでした。プレッシャーが重くのしかかりましたが、NTC(二本松訓練所)での語学訓練で学ぶ中、語学が苦手な分は、イラストなどのコミュニケーションに有効な補助ツールの活用や、授業準備に万全を尽くすこと、授業の組み立てなどを工夫することで、カバーしていくことを学びました。

マラウイでは、リロングウェから車で30分くらいの子テゼにあるコミュニティ・デイ・セカンダリー・スクールで、理科と数学の授業を担当しました。写真は、セカンダリー1年生の教室の様子。教室いっぱいに生徒が

座っており、教科書を持っている生徒はとても少ない状況でした。生徒は授業料が払えないため、学校を次々と退学していきます。このような厳しい学習環境の中でも、生徒は懸命に学んでいました。生徒の大きな笑い声、上手な歌声は忘れられません。活動には多くの困難がありましたが、同僚の協力もいただき、2年間の活動を無事に終えることができました。

2005年8月に帰国し、縁あって、新宿区議会議員に挑戦することになりました。2007年4月に初当選し、現在4期目となります。新宿区の大久保地域には、多くの外国人住民が暮らしています。この地で、マラウイで学んだ「協力隊スピリッツ」を胸に働かせていただいております。

青年海外協力隊のマラウイ派遣50周年にあたり、草創の大先輩をはじめ、マラウイの隊員OV、派遣中の隊員、マラウイに関係するすべての皆様に、心から感謝を申し上げます。



2003年9月ごろ
ジュニアセカンダリー1年生の
教室の様子

「スペイン語を喋れるようになったら将来役に立つかも」程度の浅い考えでベネズエラ隊員を希望したら、合格通知に「マラウイ」と書かれていました。何となくガーナ辺りにある国をイメージしていましたが、全く違う場所にありました。電話で合格を伝えた母は、初めて私が決めたことに反対しました。亡くなった祖父は、母に「覚悟を決めんといかん」と言ったそうです。戦地に息子を送る心境だったのかもしれませんが。母を含む家族は任期中に遥々マラウイを訪ねてくれました。

私とマラウイのお付き合いは深く長いものとなりました。マラウイ湖畔のケープマクレアにマラウイ初の青少年隊員3人の一人として派遣され、孤児院や学校で活動しました。湖の波の音が聞こえる家に住みました。私が働くはずだった組織は着任時には消滅してしまっており、途方に暮れました。自分で職場と仕事を作った2年間でした。村の権力者一家との抗争に巻き込まれそうになったり、籠に乗って空を飛ぶ魔女

の話を聞きながら満点の星空の下でシマを食べたりしながら、自分や日本が世界の中心ではないことを知りました。

協力隊に加えて、JICA事務所の企画調査員として、3年間働く機会も頂きました。事務所勤務の際は協力隊事業に直接関わることはありませんでしたが、JOCVは間違いなくJICAが誇るフラッグシップ事業であり、いつまでも若者の育成を積極的に後押しする日本であって欲しいと感じていました。

マラウイは私と妻が出会った場所でもあります。妻は先輩隊員でした。企画調査員の任期中には、当時まだ小さかった娘を連れて妻の隊員時代の任地を訪問する機会にも恵まれました。娘も、その後生まれた息子も、いつか両親がかつて協力隊に参加して、マラウイで出会ったことを知ると思います。自分たちが生きたい人生に協力隊がプラスになると考えるのであれば、背中を押すつもりです。その時は妻と二人で視察の旅に参加するつもりです。

STORY
31

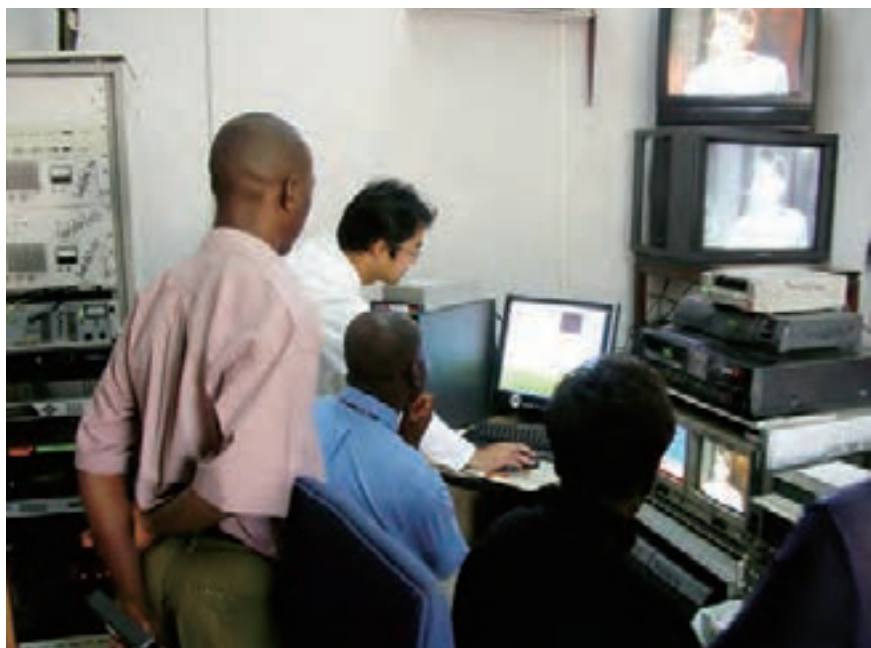
癸生川 裕(キブカワ ユタカ)

平成17年度 3次隊

職種 AV機器

任地 ブランタイア

配属先 テレビマラウイ派遣



2006年9月 職場(テレビマラウイ)での活動



2008年2月
ブランタイアで毎週土曜日に一緒に
練習していました。指導ではありません。



2008年3月

協力隊の任期を終えて丸10年後、NPO法人ISAPHの職員としてマラウイに戻りました。協力隊ではブランチタイヤの青少年更生施設で野菜栽培を指導し、誠実なカウンターパートにも恵まれ、充実した2年間を過ごしました。帰国後は国内で勤務していましたが、保健関連の団体であるISAPHが農業の技術者を探しているのを知り、自身の経験が役立つのではと、マラウイに戻り現在に至ります。

現在、ISAPHマラウイはJICA草の根技術協力事業の下、ムジンバで母子の栄養改善を行っています。食材が極めて限定される農村では、保健指導だけでは母子の栄養改善にも限界があり、多様な食材を生産することで栄養状態の改善を目指しています。このISAPHは、理事の杉下智彦先生(H7-2・医師)を始めとして、現在のプロジェクトを監修して下さっている草間かおる専門家(H9-2・栄養士)など、マラウイOVが多数関わってきました。現在に至るまでの職員を列記すると(以下、敬称略)、齋藤智子(S63-2・助産婦)、山崎裕章(H元-2・臨床検査技師)、片岡えりか(H18-2・看護師)、岡本愛(H23-1・公衆衛生)、庄田清人(H26-2・コミュニティ開発)、池邊佳織(H26-3・公衆衛生)と、多くの名前が挙がります。大学院生の研究の受け入れとして安富藍(2017-2・栄養士)、インターンとして信岡茉莉(2018-2・病院運営管理)といった、近年帰国した方々とも関わってきました。マラウイは協力隊任期後も何らかの形で戻ることが多い

任国と言われます。ISAPHの職員・関係者は協力隊経験を踏まえて業務にあたってきました。隊員としての任期が終了した後もマラウイとの関係が続いていく、その第一歩としてマラウイへの協力隊派遣が50周年を迎え、大変喜ばしく思います。COVID-19により中断されていましたが、ここムジンバでも隊員派遣が再開しました。今後も協力隊派遣がマラウイと縁を深める邦人を生み出すきっかけとなることを願って止みません。

NPO法人ISAPHについて

Health for All自分の健康を自分で、家族で、地域の人々で守る世界を目指してISAPHは、福岡県久留米市の社会医療法人・雪の聖母会聖マリア病院を中心とする聖マリアグループの豊富な国際保健医療協力活動の経験をもとに、草の根レベルによる国際協力をさらに推進させるため、2004年に設立された特定非営利活動(NPO)法人です。マラウイの子どもたちは、やせ細って飢餓で苦しんでいる状況ではないものの、5歳未満の39%が発育障害(慢性的な栄養不良)に陥っています。お腹が満たせる程度に食事を摂ることはできるのですが、自給自足の生活のため入手できる食品に限られており、それが栄養不良の原因になっていると言われています。



技術指導を受けたことで、初めて育てる作物でも、失敗せずに収穫できました。



農業の技術指導によって、これまで作っていなかった作物を栽培します。



育てたことがない作物は、食べ方もわからないため、調理実習でレシピも伝えます。



子どもが喜んで食べる姿を見ることで、親は活動を継続するようになります。

マラウイ協力隊事業50周年おめでとうございます！

私は2007年1月から2年間、日本のODAで設立したDomasi Demonstration Secondary Schoolで、初代のComputer Studies担当教員として活動しました。そこで日本と異なる1秒の価値を知り、それが今でも自身の生き方の基軸になっています。

配属当初は約3カ月間電気が使えず、黒板1つでコンピュータをどのように教えるか!? から始まった隊員生活でした。セカンダリースクールに教員配属されたマラウイ初のコンピュータ技術隊員として南東部のコンピュータ科目導入校へ一校ずつ足を運び情報収集した日々、活動に垣根は無く、近隣の隊員と協力してZombaで清掃活動・環境教育を行ったり、運動会や剣道大会の開催など、1秒を大切にしながら全身でマラウイの風を感じていました。その中でも、マラウイで2番目に大きい湖でありながら全く観光地化されていないチルワ湖(Chisi島)の探検は大切な思い出の1ページです。突然のアズング(※外国人)来訪でも温かくシマでおもてなししてくれた島の人びと、好奇の眼差しで島一周についてきた子どもたち、木船が沈没しないことを祈り続けた片道1時間の島への船旅..。

また、教員として様々な社会課題に直面しましたが、同僚や生徒、マラウイの人びとの笑顔から「幸せの意味」について多くを学びました。

国際協力に正解は無く、後で評価することはできてもその時は自分を信じて活動するしかありません。活動を終え帰国した直後に、全てを託したカウンターパートの訃報が届き後悔の念に駆られました。葛藤の末に自分の意志で後任をつけなかったこと、マラウイの現実と向かい合っていたのか?もっと別のやり方があったのではないかと等々..SNS時代へ入り、今でも教え子や同僚と交流ができていることは1897分の1の足跡であり、私の貴重な財産です。いつの日か、再び赤土の大地に立ち、恩返しできることを夢んでいます。

現在、私はハワイにある非営利教育法人の責任者です(日本の企業が国際社会貢献活動の一環で設立・運営支援)。奇しくもマラウイ協力隊事業と同じ50歳の事業で、1つの事業を半世紀続けることの意義・難しさ..その重みを痛感する日々です。マラウイの人とともに国づくりする上で協力隊の価値は無限大であり、これからも「マラウイの人びとの1秒に輝きを与える」、そんなマラウイ協力隊事業が続くことを願っています。



コンピュータクラス



Sports Festival

マラウイ協力隊派遣50周年おめでとうございます。

50年間の隊員活動の歴史に、少しではありますが自分の足跡を残させていただけたことをとても光栄に思います。

マラウイで活動した2年を振り返ると、数えきれないくらいの思い出が蘇ってきます。着任直後、言葉が通じないということはこんなにも自分自身を表現できないのかと絶望したり、カウンターパートはいつも自宅にいて職場にすら来てくれず、私はこのまま何も活動せず2年が終

わってしまうのかと悲観したり。決して辛い経験ばかりではなく、村でごちそうになったフワッフワのシマヤ、大好きだったグンビ(羽アリ)の香ばしさも忘れていません。実は帰国直後の私は「確かに経験値は増えたけど、自分の価値観がひっくり返るほどの衝撃ではない」とマラウイでの2年を総評していました。あれから10年以上が経過します。仕事では幾度も困難にぶち当たりました。ライフステージもどんどん変化し、あんな私が今では子供を育てています。以前のように自分のことばかりに200%の時間を注ぐことはできず、限られた中でビジネスマンとして、妻として、母として成果を求められる毎日です。人間関係で悩むときは、あとき人脈も活動もゼロから作り上げてきたではないか、と思いついてみます。子供のことで困るとき、物がなくなったら廃材で上手に遊ぶ村の子供たちの笑顔を思い出します。帰国直後の自分には想像できなかったけど、20代終盤で経験させてもらったあの2年があるからこそ、自分の当たり前を人の当たり前だと



撮影日:2008/12/1 場所:デッサ村ではちみつを絞った後に捨てられていた蜜蜂を活用し、ろうそくの作り方を指導している様子です。

押し付けてはいけないとか、多様性を認めなければとか、もっと寛容に受け入れなくてはと立ち止まれるようになったのかなと思っています。価値観の幅が広がったと思っています。何よりも協力隊に参加して得た宝物は、出会いお世話になり支えていただいた、いやいただいている皆様とのご縁です。現地で知り合ったマラウイアンはもちろん、訓練所で共に過ごした仲間、マラウイで一緒にいたボランティアのみなさん、ボランティア調整員さん、職員のみなさん、ご家族、関係者、帰国後知り合ったOVのみなさん、数え切れません。ふとSNSに目をやれば全国各地に、いや世界各地で活躍されている皆様方。以前ほど直接連絡をとることは少なくなりましたが、それでも自分にはいつでも相談できる多種多様なアドバイザーがたくさんいます。いつまで経っても続くこのご縁に感謝するばかりです。マラウイでのたった2年の活動だけでなく、協力隊に参加したことで得たこのご縁は私の一生の宝物です。みなさん、いつもありがとうございます!!

「pachoko pachoko 信州で生きる」

帰国後10年以上経ちますが、今でも日々トゥンブカ語に触れる生活をしています。というのも、現在長野県小川村で営んでいる飲食店の名前が「だいち食堂パチョコ」というものだからです。北部隊員なら良くご存じであろう、pachoko pachoko(トゥンブカ語で少しづつ、ゆっくり等の意)のパチョコです。村の人には「パチョコさん」と日常的に呼ばれるので、不思議な感覚です。

2009年の帰国後、英国の大学院で農村開発学を学び、東日本大震災の被災地にて復興支援に従事しました。そして、2016年より地域おこし協力隊員として信州・小川村に移住しました。来村して初めて、当村が大豆の名産地と知り、「これは運命では」と強烈に感じました。かつて自分はエイズ対策隊員として、マラウイでHIV陽性者の栄養改善を目的に、大豆料理の普及に取り組んでいたからです。ご存じの通り、マラウイでは、肉や魚など動物性タンパクに富む食材が

高価だったので、代替食として、栽培が簡単で、植物性タンパク質豊富な大豆に白羽の矢を立てたのです。大豆をハンバーグ状に焼くNyama ya soya(大豆の肉)という料理を開発し、北部ムジンバ県の村落部で、料理講習会を開催して回りました。隊員仲間で作る「劇団ペパーニ」というグループで、大豆料理の普及啓発演劇を住民に披露したこともあります。

約10年の時を経て、信州で再び、大豆に関わることになるとは夢にも思いませんでした。現在は、地元産大豆の普及をテーマに、地域活性に取り組んでいます。大豆フードの飲食店経営のほか、食育プログラム「だいちの楽校」を運営しており、100%大豆中心の人生です。マラウイに派遣されていなければ有り得なかったことで、まさに奇縁です。当面は、小川村で大豆事業の発展を目指しますが、将来の夢は、大豆の専門家として再びマラウイに帰り、住民の栄養改善に取り組むことです。その日を今から心待ちにしています。



当時24歳だった私は会社を辞めて、小さい頃から憧れていたアフリカへ、今行かなかったら死にきれない気持ちで、誰にも相談せずに協力隊に応募しました。ずっと夢だったアフリカの赤土を踏んで、広い空の下に立った時の感動を今でもはっきり思い出せます。

マラウイについて最初に気がつくことは舗装された道を真新しい車が走ると、8割が国連などの援助機関のロゴがついた車だということです。現地の人々は大抵徒歩です。大きなスーパーや日用品は南アフリカ、中国、インドが資本のもので、植民地化は終わっていないと驚きました。

マラウイの人々は貧しい中でも明るく、よく笑い、男女ともおしゃべり好きで、歌や音楽に合わせて歌い踊ります。親戚や近所の人に不幸があれば、夜通し彼らのために歌い、共に泣き、祈り、助け合って生きています。

子どもたちは小さいころから家の手伝いを良くし、4歳くらいから薪を割り、誰でも当たり前のように畑を耕し、上手に畝をつくることができます。食事の際にはあつという間に火を熾し、少ない水で上手にお皿を洗います。大人は自分の子どもも近所の子どもも同じように食事を与え面倒をみます。「カリブー(ごはんを食べていかない)?」と民家を通ると見ず知らずの人たちから声をかけられることもよくありました。「富は

奪い合えば足りず、分け与えれば余る」とはこのことだと感じ、豊かさとは何かを考えさせられました。

援助漬けにされた任国の人々は最初、外国人の私から色んなものを期待しましたが、協力隊として来た私は、お金も物も、私に関しては技術も持っていませんでした。しかし、彼らと利害関係を持たず、同じ目線で、できるだけ同じものを食べ、同じ物を身に付け、同じ言葉で話し、同じ歌を歌い踊ることで彼らに少しでも近づき、彼らの考えを理解しながら、できるだけ彼らの力で問題を解決していけたと思います。そしてそれはまさに私の思い描いていた仕事でした。私の唯一出来た仕事はそんな彼らの想いを少しでも形に出来るような枠組み、ネットワークを作ることでした。

2年間で身勝手に任国を去ってしまう自己満足の協力隊を批判していた私ですが、実際に行くと、その2年間で今後もずっと後に残るように日々奮闘しているとても優秀な先輩隊員の姿がありました。そんな先輩たちを見て私も彼らのように活動しようと思うことが出来ました。1人でやれば数百倍早い仕事も、任国の人を巻き込んでやる。彼らがやれば、これからも彼らだけでやれます。

今後も、JICAや協力隊事業を通して彼らが自立できる支援を続けて欲しいです。

STORY
37

清家 央樹

平成20年度 4次隊

職種 村落開発普及員

任地 デッサ



2011年に任地のデッサを離れる時に友人たちが送別会を開いてくれた時のもの



2010年に撮った近所の子供たち



2010年に活動で支援していたンパラレ村の観光協会主催の観光客を招いてのグレワムクールの催し



10年前の2011年1月、私は青年海外協力隊員としてマラウイに初めて赴任しました。飛行機から見下ろすマラウイの大地は、どこまでも続く茶色の土地と深緑の木々。同期隊員とこんなところに降りて大丈夫なのかと言いながら着陸したことが懐かしいです。そんな心配をよそに、日々の隊員活動や生活は非常に充実したもので、マラウイの人々の屈託のない笑顔とおせっかいなまでの優しさに癒される日々でした。アフリカの水を飲んだものはまたアフリカに帰る、先輩隊員の方がそう口にしていても、あの時は自分の事ではないと思っていました。病院での隊員活動では、日本では見ない感染症と日本人とは全く異なるマラウイの人々の行動を学ぶことになりました。死ななくてもいい疾患で命を落とす人々の生活、またその裏にある文化的背景。それらが不思議でたまらなかった私は、隊員活動終了後に大学院へ進学し、公衆衛生を学びました。

大学院では自分の隊員活動の軸であったHIV母子感染予防対策に関連した研究計画を作成し、再度マラウイの地を踏みました。そして、研究により、

再度マラウイ文化の奥深さにすっかりハマってしまいました。その後NGOでの活動を経て、やはり現地の人々と一緒に試行錯誤をする隊員事業に再度関わりたいとボランティア調整員に志願したところ、まさかのマラウイ派遣!アフリカの水、、、ではなく、マラウイの水なのではないだろうかと非常に驚きました。

マラウイの調整員となり、隊員が悩み、試行錯誤しながら現地の状況を打破しようとするのを間近で見つつ、隊員の底力に感心をしていると、

2020年3月の新型コロナウイルス感染拡大による全隊員避難。。その時現地にいた隊員らには非常に苦しい思いをさせてしまいました。しかし、それから1年。この50周年の節目で茶色と緑色の土地に隊員らが戻って来れて本当に良かったです。まだ予断は許しませんが、今後も隊員とマラウイの人々が一緒に切磋琢磨する姿が見れることを楽しみにしております。



「6年目のマラウイ」

現在、私はJICAマラウイ事務所で企画調査員として勤務をしており、マラウイでの駐在業務はこれで3回目、6年目を迎えます。これは自分で希望して叶えた結果というよりは、これまでの様々な出会いやタイミングが重なって与えてもらった結果であると感じています。

私は青年海外協力隊に参加する以前は日本の民間団体の経理部で勤務し、国際協力とは関係のない仕事をしていました。協力隊への応募動機も、国際ボランティアには興味はあったものの、実のところは海外に長期で生活してみたい、せつかくならば自分で行くことのなさそうなアフリカがいいな、という軽い気持ちからでした。

しかし、実際にマラウイで現地の人たちと共に生活し、配属先での活動(県農業事務所での農業組合のビジネス支援)を進めて行くうちに、自分がいかに世界の現状を知らずに日本の環境を当たり前の様に思っていたのかを実感すると共に、途上国で生活する人々の力強さに惹かれ、彼らの生活を少しでもより良いものにしたいと活動に力を注ぐようになりました。

2年の活動を終える頃には、寝具や自転車を手に入れた農家さんたち、「子供の学費を誰にも借りずに払うことができるようになった」と自慢げに話す働き者のお母さんの笑顔を見て、彼らの生活が確実に発展していく様子を実感すると共に、国際協力の魅力にどっぷりとハマってしまいました。

帰国後の進路として、JICAの国内事業部で勤務する傍ら、開発学をきちんと学びたいと大学院に入学しました。そして、論文のための研究調査でマラウイを訪れた際に、マラウイで新たに事業展開を計画しているNPOと出会い、そのご縁が繋がって転職し、3年間プロジェクト管理を担当しました。その後、JICAの企画調査員を目指し、元々は別の国で内定をもらっていたのですが、諸事情が重なり、止む無く辞退したところで現職の募集が始まり、無事に合格を貰って、今この原稿をマラウイで書いています。ここまで来ると、さすがにこの国との縁は深いなと感じざるを得ません。これからもこのご縁を大切に、マラウイの発展のために微力ながら尽力していきたいと思います。



マーケティング支援をしたパーム椰子石鹸



支援組合でのトレーニングの様子



支援組合とのミーティングの様子

職種 村落開発普及員

任地 チャンピラ

配属先 チャンピラEPA

5年前に地元である静岡県藤枝市に帰郷して、現在、体験業「むかし田舎体験 水車むら」を運営しています。食事作りや遊びを通じて、自然が身近な田舎の暮らしを五感で体験いただく。薪を割り、かまどで火を起しご飯を炊く、ヤマメを掴み取り捌いて串焼きにする、囲炉裏で囲らんする。ファミリーや外国人に人気の体験事業や、最近始めたテント宿泊など好評をいただいています。

マラウイ派遣中は化学メーカーに籍を置いた現職参加でした。電気・ガス・水道がない任地チャンピラでの田舎暮らし。職場の同僚と協力しながら、現地住民の生活向上を目指す活動。チャレンジできる環境、喜怒哀楽を素直に表現でき、それを寛容に受け止めてくれた彼らとの関わり方、その全てが大きな価値観の変化へ繋がりました。田舎ならではの「ないない」から「あるある」と今ある資源を見つめ直し、新たな価値を創造する姿勢はマラウイで学んだことでした。

事業を推進する一方で、有志によるボランティア活動

も並行して行っています。元々は老朽化した水車の復活を目指した取り組みで、資金調達のためのクラウドファンディングに挑戦し、昨年約10年ぶりに水車を復活させることができました。今年は茅葺屋根の葺き替えなど、現在80名以上の仲間達と楽しみながら活動を継続しています。最近「自己実現の場」として水車むらおよびメンバーの人的資源を活用する、という方針で主体的に参画いただくようなサポートを行っています。ここでもマラウイでの地域住民との関わり方が活きています。

これまで、マラウイ隊をはじめとした協力隊OV複数名が毎年来てくださり交流しています。と同時に、脱サラしてからの帰郷と起業、どのように地域の課題と向き合い解決に尽力していくか、自身の強みや経験を活かして生業を生み出していくかなど、帰国した隊員が思い悩む社会還元の一助になれるようサポートできたら幸いです。より多くの協力隊OVの皆様にお会いできるのを楽しみにしております。



STORY
41

寺崎 一生
平成25年度 3次隊

職種 品質管理・生産性向上
任地 リロングウェ

私は、2019年11月に調整員としてマラウイに赴任しました。間もなく任期は終了しますが、振り返ると激動の2年間だったとつくづく感じます。中でも印象深いのは、2021年6月12日の2019年度3次隊3名の到着の時です。2020年3月24日に当時29名いた隊員が日本へ避難帰国して、445日ぶりに隊員がマラウイに戻って来るワクワク感は、調整員をやっていて一番嬉しい瞬間でした。

2020年3月、隊員29名が避難帰国した当時、マラウイではコロナウイルス感染者は見つかっておらず、帰国は先だろうと思っていたら、周りの国が次々とロックダウンし、一步遅れたらマラウイから出国できなくなる状態にまで追い込まれ、フライトスケジュールを何度も組み直したのは、映画の1シーンのように。ただ、残り任期が少なく、戻ってこれないと分かっていた隊員がお世話になった人たちに挨拶する猶予さえ与えられなかったのは、こちらも見ていて辛い思いがしました。

そして、覚悟を決めて残務処理を頑張ろうと思っていた矢先、調整員も3月31日に帰国となりました。今でも、帰国を伝えた時のナショナルスタッフの驚きの表情は忘れられません。「結局、お前らも俺らを見捨てるのか?」と語っているようで、マラウイで50年間積み上げてきたものを失ったような敗北感でマラウイをあとにしました。

日本での在宅勤務を経て、2020年10月16日、199日ぶりにマラウイに戻ることができました。マラウイに戻れた喜びの一方、隊員の渡航再開は見通しがなく、隊員がいないボランティア調整員として、専ら隊員帰国の残務処理にあたるなか、何をしにマラウイに来たのか自問自答の日々でした。反面、以前は煩わしく



渡航再開後、初めてのボランティア総会での集合写真

感じていた隊員と事務所の板挟みの数々が、愛おしく感じられ、それをプラスに昇華させることが、調整員の醍醐味だと考えられるようになりました。

6月12日から3カ月が過ぎ、現在、マラウイ隊員は12名になりました。派遣地域は首都から4時間の移動圏内に限られ、北はムジンバ、南はバラカ、リウォンデ、移動はミニバスが使えず、隊員連絡所も使用できず、かつてのマラウイ隊を知る人から見ればもの足りなさを感じるかもしれません。

それでも、隊員たちは、その中で出来る事を前向きに取り組んでいます。ただ、先輩隊員がいないゼロからの活動に隊員は苦勞しているようです。とは言え、最近、気づいたのですが、どの地域にも、過去の隊員と過ごしたマラウイ人がいて、元の同僚でなくても、かつての大家や隣人、ウォッチマンなどが彼らをサポートしてくれていて、50年続いたマラウイのボランティア事業のレジリエンスの高さに改めて驚かされています。50年目に再スタートを切った隊員たちが、私が失ったと感じたものを取り戻し、マラウイ海外協力隊の新たな1ページをマラウイ人とともに刻んでくれることを信じています。

1897分の1のマラウイとの関係。



どこまでもツンデレ。しかも、“デレ”が現れるタイミングは予測不可能で、いつも拍子抜け。だからこそ、私は翻弄され、魅了され続けているのかもしれない。

“ツン”については、話し始めると恐ろしい数になるので、割愛。活動終盤でカウンターパート（CP）がぼろっと言った言葉は、いまだ記憶に新しい。「僕たちが指示をしてコミュニティの人たちを動かすのではなく、彼らが自ら考えて行動できることが大事だよね。」

普段あーでもないこーでもない議論を交わしていたCP。思えば、CPに対して言語化して上記のことを伝えたことはなかった。私の最も伝えたかったことを吸収してくれたのだと、自意識過剰にも実感した、最大の言葉のプレゼント、かつ“デレ”であった。

任期が終わり2年後、マラウイと任地を再訪。空白期間がまるでなかったかのような感覚から、自分の中でぼんやりしていたものがはっきりとし、マラウイは第2の故郷だと強く実感した。この短期滞在時でも同様にツンデレに翻弄されたが、それらについても省略。

奇しくも任期終了後に滞在した他国でもマラウイアンとの親交を深める機会が複数あった。恐らくどこまで行ってもマラウイは付いてくるのだと、不思議な縁に心が躍る。

今まで1897通りのストーリーが作られてきたWarm Heartな国、マラウイ。今後も多くの素敵なストーリーが作られ、さらに輪が広がっていくことを願っています。



『任地の風景に思いをはせて』

協力隊に参加することで、長期的にマラウイの人々の暮らしを観ることができた。それがとても有難い経験で、マラウイでよかったなと思っている。任地を歩くとみんなが「タケ、ポッポー？」と私の名前を呼んでくれた。昼食時なんかは「カリブ」と誘ってくれた。おかずは葉物野菜とトマト&オニオンを塩と油で煮たソースがちょっとあるだけだけど、食べきれないくらいのシマでもてなしてくれる。そんな陽気さがとってもまぶしい。

赴任前の情報でマラウイといえば「世界最貧国」。実際に住んでみたマラウイには確かに高価そうな物はなかった。村では子どもが毎日ボロボロになった同じ服を着て元気に遊んでいる。学校でもあるのは黒板とチョーク。「お金も道具も何もない」とは、よく同僚が言っていた。パソコンを活動先にもっていけば、先生たちがとっても喜んで見に来た。現地の人にとって文明の利器はまぶしく映ったのだろう。パソコンやカメラよりも魅力的な活動ができればよかったなと自身の力不足を悔やむ。

一方、私にとってはマラウイの人々の暮らしぶりが遅く、かっこよかった。同僚は鍬一本で大地を耕し、自給していた。お金の余裕はなくても、仕事での身なりはしっかり整えていたし、家では親戚の子どもと一緒に住まわせていたりする。心に余裕があるのはこういうことなのかなと感じた。

マラウイには人々の優しさが光っている。この輝きは文明の利器が放つ光とは強さも方向性も違うと思う。私が任期の間に首都には国立競技場と大型モールが出現した。そこだけを切り取れば先進国にあるものと同じ。強い光を放っている。マラウイアンにとって近代化への希望の光かもしれない。でもその光はどこを、何を照らすのだろうか。

マラウイアンの暮らしの中にたくさんの人々の営みがあり、活動期間中、共に暮らすことで彼らが輝いて見えてきた。マラウイの日常の風景がとても好きになった。JICAの援助、協力隊の活動とともにマラウイの人々の暮らしが良くなってほしいと思う。と同時に私が見た風景がずっと続いてほしいとも思っている。



2017年、『カボチャの新芽を天日干しするアマイ(お母さん)』



小学校での授業風景

2015年7月からカスング県立病院の栄養士隊員として活動をしていました。派遣中は病院だけでなく近隣の公立小学校へも活動を広げていました。近隣の小学校では、6年生の「Science and technology」という科目の中にある、調理や栄養に関連する授業を実習形式で行っていました。授業内容は、「Boiling」「Steaming」といった調理科学から、生き物の身体の仕組みのトピックでは鶏の解剖、食料保存のトピックではジャム作りなど色々な実習を現地の小学校の先生と協力し実施しました。

できることには挑戦をしましたが、「まだまだ何か他にできることがあったのでは?」という心残りがあるまま、隊員期間を終えました。そのため、マラウイを離れる時には「次は旅行などではなく、仕事でマラウイに戻ってこよう」と心に決めていました。

帰国後は、栄養士養成校で勤務した後に、公衆衛生学大学院へ進学しました。

卒業と同時に、2020年4月からNPO法人ISAPHマラウイ事務所で働き始めました。現在は、ムジンバ県南部のマニャムラ地域で、栄養改善プロジェクトに従事しています。

その中で、最も協力隊の経験が活かされているのが、プロジェクトで新規導入した農作物やマラウイで手に入るけどあまり食べられていない食材を利用した



隊員時代調理実習

レシピ紹介です。日本にあるレシピをそのまま教えるのではなく、どうしたらマラウイの村にある食材・器具で調理ができるのかを考え、レシピ教材を作成しています。

当初、コロナ禍ということもあり、約1年間は日本—マラウイと遠隔で業務を行っていました。そんな状況でも、この業務ができたのは、協力隊時代のマラウイでの生活・活動経験があったからだと思っています。

そして、2021年4月に約4年ぶりにマラウイへ戻って来ることができました。

スマートフォンの普及に伴い、インターネット環境など大幅に変化を感じるころもありましたが、相変わらず不定期におこる断水と停電があると、変わらないところもあるんだなと思いつつ、2度目のマラウイ生活を過ごしています。

最後に、マラウイ協力隊派遣50周年記念おめでとうございます。

マラウイ隊員派遣の魅力はなんといってもマラウイそのものの魅力もあると思いますが、隊員同士の交流もその一つだと思っています。

協力隊派遣前から現在に至るまで、数多くのマラウイ隊員の方々と交流をしてきました。派遣前にはマラウイの情報を教えていただき、派遣中は共に嬉しいこと・楽しいこと・辛いことなどを共有し合い、帰国後はこれから派遣される人たちにマラウイの様子を伝える側になりました。

協力隊事業と共に隊員同士の交流が今後とも続くことを願っています。

隊員時代教材



現在の教材(動画編集)



※隊員当時は、試行錯誤しながら教材を作成していました。黒板にイラストや文章を書き、模造紙などを教材として使っていました。今現在は、私の担当している教育教材は、主に動画になります。その中にはフードグループのイラストが入っていたり、料理や食材のイラストを自ら描いたものを動画に差し入れたりしています。協力隊時代の教材と見比べてみると、形態は変わりましたが、本質的なところはあまり変わっていないのかもしれませんが。

受かると思ってもみなかったJICAボランティア一次審査を通過し、東京での二次審査。まさか二次審査は受かると思っていなかったのが、悔いの無いようにと、会場の下見後に皇居一周マラソンを行いました。そのためか翌日の本番は特に緊張もなく、笑い声が絶えない面接試験となりました。度胸と行動力は私の強みです。

英会話に大苦戦した訓練所生活を終え、いよいよマラウイへ。

JICAボランティアとして派遣先となったマラウイ。実はどこにある国か知らなかったのですが、実際に行ってみて、住んでみて「Warm Heart of Africa」と誇るマラウイの素晴らしさを知ることができました。日本の映画「三丁目の夕陽」みたいな日常でした。私が実際に取り組みさせていただいた活動内容は、

5S活動

看護師隊員として5S活動に介入し見える在庫管理を伝え、みんなで一緒に整理整頓に取り組みました。レクチャーの前後でテストを行い、レクチャー自体の有効性も検証しました。また、専門家の方の各病院の巡回指導に同行させていただき、学びを深めることができ、他病院での出張5S活動もさせていただきました。



専門家の方からの依頼でOVOP(一村一品プロジェクト)での5S活動

レクチャー後に工場での整理整頓を行い、抜き打ちで定期的な訪問指導を行いました。今でも時折連絡を取り合っています。



少年の更生の為のサッカーチームの援助と道徳教育のレクチャー

地元愛媛で働いていた病院のサッカーチームに属していたことから、友人たちに呼びかけ不要になったサッカーのユニフォームやボールなどを集めて寄付させていただきました。また、日本が戦争で大打撃を受けてから復興を遂げるに至った基礎にある道徳教育をレクチャーし、子供たちと一緒にゴミ拾い活動を行いました。今でも時折連絡がきます。



**看護師としての経験を活かし他病院で口腔ケアについての
レクチャーを実施**

他隊員のHIV予防指導の村落巡回に同行、AIDS患者さんを
訪問し看護師としてアドバイスを実施
現地にあるものを使ってアロマ精油の抽出を試みました。



車いすの寄贈

ムズズ中央病院で使われている車いすは、全てタイヤが無く
ブレーキが故障しているものしかありませんでした。大切に使っ
て欲しい一心から車いすチェックシートを作成し、車いす配布
部署へ説明し、寄贈して下さった車いす一台一台にチェック
シートを付けさせていただきました。



先輩隊員の活動「就職活動の為のブックレット作成」に協力し、
完成したブックレットを2校の知り合いの高校の先生方へ配布
し、学生たちの就職活動の参考に使っていただきました。



大変な事も沢山ありましたが、JICA事務所の方々や現場で関わらせていただいた方々の温かな支えがありやり
遂げることができたと感じています。まだまだやり残したことはありますが、沢山の方々の優しさに触れ、沢山の方々
に出会えたことに深く感謝しております。

2015年にマラウイで出会って以来使い続けているバオバブオイルに魅せられ、また沢山のご縁もあり、OEM商品
として世に送り出す準備をしております。

自分にできることでマラウイに少しでも還元できればと考えております。マラウイの地を踏んだ人は再び帰ってくる
と言われるくらい魅力的なマラウイ、私も早くマラウイに帰りたいです。

マラウイで起業をして

2016年7月から2年間、私はマラウイ中部に位置するムチンジ県で、コミュニティ開発隊員として、小規模ビジネスグループを対象に、ビジネスや貯蓄に係るアドバイスやワークショップを実施し、住民の所得向上のために尽力しました。

2年間の任期満了後、マラウイに戻り、印刷とグラフィックデザインの会社を起業しました。協力隊としての任期中、マラウイ人の温かさや陽気さに魅了され、マラウイに関わり続けたいという思いが強くなったからです。印刷とグラフィックデザインの店をやることに決めたのは、お世話になった一村一品プロジェクトの専門家の方に、マラウイでデザイン隊員をされていた方をご紹介頂いたのがきっかけでした。

マラウイで起業をして、マラウイ人を雇用するという事は、毎月しっかりと売り上げをあげて、彼らに給料を支払わなければなりません。新型コロナウイルスの感染拡大に伴う影響もあり、必ずしも順風満帆ではありませんが、与えられた状況の中で、自分たちでできることを考え、行動し、刺激的で楽しい毎日を送っています。昨年より、旅行誌とビジネス誌を季刊誌として出版開始しました。取材から、デザイン、印刷まで、全て自分たちで行っています。



ヒマワリ油生産グループのメンバーと

起業をして一番やりがいを感じるのは、雇用しているマラウイ人スタッフの成長を肌で感じることです。現在雇用しているデザイナーは全員、マラウイ国内のデザインコンペティションで賞を取ることができました。まだまだマラウイでは、ビジネスにおけるデザインの重要性、デザインによって集客効果や売り上げが変わることが理解されていません。デザインは無料で提供されるべきものという考えも根強くあります。時間はかかりますが、デザインと印刷を通して、マラウイの経済に貢献するため、これからも私にできることを一歩ずつ積み重ねていきたいと考えています。



豆乳生産グループに対するビジネスワークショップ



印刷屋のスタッフと

私の配属先は首都郊外にあるリロングウェTTC（教員養成大学）で、算数科教育法と表現芸術科教育法の講義を受け持つことになった。日本での小学校教員9年間の経験を大いに生かせると思っていたが、それは間違いだったことに小学校現場を見学して気づいた。そこで目にしたのは、200人を超える子供たちがひしめき合う教室。ノートやペンも全員が持っているわけではない。日本と土台が違い過ぎたのだ。

小学校、TDC（教師開発センター）、TTC（教員養成大学）の隊員が集まって情報交換を行う小学校教育分科会でのこと。私は課外活動として始めた縄跳びクラブで学生と作った『縄跳びソング』のビデオを披露した。それを聴いた隊員からこんな声が上がった。「かけ算の歌作れない？みんなかけ算九九でつまづいているから、高学年でかけ算がからむ問題が出ると全然授業が進まない。」この一言から『かけ算ソング』は生まれた。我々隊員は作詞を担当し、作曲はマラウイの学生たちにお願ひした。ミュージックビデオ

には公立・私立合わせて小学校11校、リロングウェTTC、在マラウイ日本大使館、そしてマラウイ教育科学省に撮影に協力していただいた。停電が頻発する中、奇跡的にも任期中に完成した。『かけ算ソング』を活用した隊員の学校では、成果も現れた。小学7年生のかけ算テストの平均点が1か月で45点から71点に上がったのだ。音楽が好きなマラウイの子供たちにはノリノリのリズムがぴったりだった。一人でも多くのマラウイ人に『かけ算ソング』を届けたい。テレビ、ラジオ、新聞、インターネットなどのメディアに飛び込み営業し、広報した。「昔、学校で理科を教わったんだ」「仕事終わりによく食事に行ったのはいい思い出だよ」などと、今までの協力隊員との良き思い出を語ってくれた関係者が多くいて、テレビ・ラジオで繰り返し流してくれた。多くのマラウイ人に『かけ算ソング』が届いたのは、先輩方が積み上げてきた信頼という財産があったからなのには言うまでもない。



かけ算ソングメンバーとかけ算ポーズで。
写真左：栗田隊員（2017-1）
写真右：平松隊員（2017-1）
2人のマラウイ人：リロングウェTTCの学生
（左：ラップ担当のVIC、
右：メロディ作り担当のHamjee）
撮影場所：リロングウェTTC附属小学校グラウンド
撮影日時：2019年2月





マラウイ側から寄せられた 思い出&メッセージ

Mr. Blessings Chilabade, Office of the President and Cabinet (OPC)	070
Mr. Francis Kasaila, Malawi Electoral Commission ...	071
Dr. Humphreys Nsona, Ministry of Health	072
Ms. Jacinta Chipendo, OVOP	073
Mr. Austin Somba, KENDO Association of Malawi ...	074
Mr. Mighty Kayoyo, Mzimba South District Education Office	075
Ms. Rose Mithi Majonanga, Monkey Bay Teachers Development Centre	076
Mr. Dasiano Mapanje, Mkwichi Secondary School...	078
Mr. Mwangi Mwamkenenge Msukwa, Accounting & Business Consultant	079
Mr. Moses Chavula, Kasungu District Hospital	080
Mr. Sangwani Khosa, Dedza District Irrigation Office	082
Ms. Vanessa Chidyanga, Lilongwe Water Board ...	083
Mr. Austin Assan, JICA Volunteers Language Trainer	084
Mr. Joseph Francesco, JOCV dormitory	085

Blessings Chilabade

Speech Delivered by the Secretary for Human Resource Management and Development At the Japan Overseas Cooperation Volunteers (JOCV) 50th Anniversary Celebrations on 19th November, 2021

Your Excellency, Mr. Satoshi Iwakiri, Ambassador of Japan
to Malawi and Madam Etsuko Iwakiri

Mr. Kazuhiro Tambara, Chief Resident Representative,
JICA Malawi

Your Excellencies

Senior Government Officials

Ladies and Gentlemen

On behalf of the Secretary to the President and Cabinet, Mr.
Zanga – Zanga Chikhosi, I am delighted to be with you this
evening to celebrate the Japan Overseas Cooperation Volun-
teers (JOCV) 50th Anniversary.

Your Excellency, Ladies and Gentlemen, the Government of
Malawi acknowledges the dedication and hard work of
Japanese volunteers to this country and does not take their
work for granted. These volunteers leave their comfortable
homes in Japan to work in very remote areas of Malawi.
This is indeed a noble task and a great honor to us.

Your Excellency, Ladies and Gentlemen, the work of
JOCV's can never go unnoticed. Their work is not only
appreciated by the Government of Malawi, but also by the
communities they serve and individuals they work with.
Our communities and schools are great examples of how
innovative and creative the Japanese volunteers can be
resulting in more learners being attracted to school since the
volunteers make the learning process fun and enjoyable.

Your Excellency, Ladies and Gentlemen, apart from their
exceptional skills and abilities, JOCV's in Malawi are also
well-known for their eagerness to integrate with the local
communities and learning our local languages so quickly.
Some are even given local names in the course of their work.
Examples of such names include "Nya Jere" or "Abiti
Jailosi". This shows how sociable and dedicated JOCV's are.

Your Excellency, Ladies and Gentlemen, JOCV's are
usually in the country for a maximum of two years. It is
however interesting to note that some volunteers who left
the country still follow up on the various projects and

programs that they initiated. Others even sacrifice their
personal resources just to ensure that the programs they
were implementing are being sustained. This is an indica-
tion that JOCV's do not only serve but create long lasting
bonds and relationships with the people they work with.
Like one French Journalist and poet one said "... no friend-
ship can cross the path of our destiny without leaving some
mark on it forever"

Your Excellency, Distinguished Guests, Ladies and Gentle-
men, it is a great privilege to be part of this significant
milestone of service to Malawi. It is evident that JOCV's 50
years of service have not been in vain as it has greatly
impacted our communities and the Nation at large. The
JOCV's are indeed our partners in development.

Finally, Your Excellency, Ladies and Gentlemen, let me
assure you that the Government of Malawi will continue to
provide the necessary support to the Japanese volunteers
and we are looking forward to a continued good working
relationship. Also we are grateful for the training
programmes that the Japanese Government offers to
Malawians in various areas. The Malawi Government looks
forward to continued cooperations.

With these few remarks, Your Excellency, Ladies and
Gentlemen, let me wish you all wonderful celebrations.
Thank you.



STORY
02

Commissioner, Malawi Electoral Commission
(Former Minister of Foreign Affairs and International Cooperation)

Francis Kasaila

I had an opportunity to be taught by two JICA volunteer teachers in 1984 and in 1985 when I was studying at Nsanje Secondary School. I joined Form 1 at the secondary school in 1984 and that time, there were two JICA volunteer teachers who were teaching Mathematics and Physical Science.

I have good memories having been taught by these two Japanese teachers who came to Malawi from very far away in Japan and English was not their mother language but they were so determined to share their mathematics and science knowledge to us. These teachers developed ways and means of passing their knowledge in English, which was a foreign language to them. This gave me an impression that these people had interest and passion to share knowledge to others.

The two JICA volunteer teachers who taught me in secondary school greatly impacted my life. Coming from a rural background, growing up in Tengani, Nsanje and attending a day secondary school in the same area, mathematics and science were not the subjects that one would opt for since these were regarded to be very difficult subjects. Therefore, somebody had to develop my interest in those subjects. I developed that interest from the two Japanese volunteer teachers who taught the subject in an interesting manner that made the subjects to appear easier. The interest that I developed had an impact in the results of my Malawi Schools Certificate of Education (MSCE) in which I passed well in these subjects and later on studied engineering at the university. It is mandatory to pass well in Mathematics and Science in order to study engineering. It was not easy to study in a day secondary school and taking a challenge to study engineering. All this happened because I was determined to pass well in these subjects resulting from the interest I developed from these two JICA volunteer teachers.

My hope is that the Japan Overseas Cooperation Volunteers (JOCV) program will continue to grow in Malawi and more volunteers will be sent to the country, particularly targeting rural communities that have limited services that are provided by the Government of Malawi. During my days at the secondary school, Malawi had a few qualified teachers and JICA volunteers came to bridge the gap. It is my hope that going forward, the JOCV program will continue targeting services in the rural communities. Now that we have a good number of educated young Malawians who have attained Malawi Schools Certificate of Education (MSCE) and at the same time, Japan, being a country with a lot of technical skills, my wish is that this program will bring in qualified and skilled technicians who will assist in teaching high skilled expertise that include welding, metal fabrication, building and carpentry of higher quality. These are the skills that Malawi requires to allow the educated youth to stand on their own, for them to create opportunities for other youth and deal with high unemployment rate in the country. As JICA Malawi is celebrating 50 years of the JOCV program, it is high time that we thank all those that came to Malawi to volunteer their time and skills for the betterment of Malawians and its economy. For those that are planning to come to Malawi, welcome to the “Warm heart of Africa”. Please come and enjoy your stay and interaction with Malawians. Finally, I would like to congratulate JICA Malawi Office for the work they have been doing in the country for the past 50 years. I wish them well and hope that they will do more towards the betterment of the country. Mr. Kasaila who was the Minister of Foreign Affairs and International Cooperation met his two former JOCV teachers in Japan for the first time after almost 40 years in 2019.



Left: Mr. Nishioka,
former Ambassador
of Japan to Malawi



STORY
03

Program Manager IMCI Unit, Ministry of Health

Humphreys Nsona



“Simply put, the volunteer support program has been very useful due to among other factors the following reasons, which I have observed while working with some of the in the health sector; On productivity; they demonstrated superior technical ability and produced exceptional quality work. They took time to fully understand the scope of their assignment and displayed a keen attention to detail which was accompanied with effective time management.

On communication, the volunteers displayed improved communication skills over the period of working with local members of staff and community, It was interesting to see exchange of knowledge using local language of Tumbuka and Chichewa.

On engagement: Having worked together in aspects of Health I have been impressed on how the volunteer program and especially those I closely worked with their level of demonstrated experience and displays of high level of institutional knowledge.

About the quality of work, the volunteers committed to producing work that met Ministry of Health expectations and high standards. They always aimed at improving the quality of deliverables and often reaching out to staff members in the facilities and community members for advice and guidance. They frequently went above and beyond in their efforts to ensure consistency and generate appropriate outcomes according to Ministry of Health expectations. They also actively sought feedback and used it to enhance performance in their assignments.

There was very minimal requirement of supervision because the volunteers built and maintained their duties in-addition to a show of a good working relationship with members of health facility and community.

This has been a success, I look forward to continuous performance support and collaboration and cooperation from the Volunteer program”

STORY
04

National Coordinator, OVOP

Jacinta Chipendo

The year 2021 has been so memorable to the Malawi Government, the Japanese Government, especially JICA and more so to the Value Addition section of the Ministry of Industry which was then called the One Village One Product (OVOP) Programme Secretariat. The OVOP Programme took off in 2003 in Malawi and made strides in all corners of the country economically empowering the rural communities through Value adding technologies that the Government of Malawi in collaboration with JICA provided.

The programme's impact and huge strides cannot be celebrated without mentioning the many selfless Japanese Overseas Cooperation Volunteers (JOCVs) who helped to pass-on the much needed expertise and skills to local Malawians in order for the OVOP movement to take shape. Since the Programme's inception in 2003 and the subsequent rolling out of the JICA-OVOP Projects, the OVOP secretariat has seen a number of JOCVs working under it. Some of the notable faces that have graced the Secretariat are; Namiko Shiroma (Design), Takumi Higashi (Design), Masahiro Hayama (Design), Kiyomi Ito (Design), Sho Iwashita (design), Wakako Sato (Marketing), Rie Nagashima (Marketing), Terasaki Kazuo (QC), and Miki Kasano (Food Processing).

Although it is practically impossible to quantify the numerous works and expertise that the aforesaid JOVCs rendered to the OVOP Programme, the JOCVs that worked in the Marketing Section and specifically those in Designing, still have a soft spot in the hearts of most OVOP Cooperative members. They have always been regarded as simply amazing and so professional in their work. The uniqueness in the designing section was easy to notice as this was then still a relatively new industry in Malawi and more so for local entrepreneurs. It was traditional for most Cooperative members and groups to pack their final products without proper labels and poor packaging containers. However, with the coming in and engagement of the JOCVs, there was a complete mindset change and Cooperatives now embraced packaging as a major component in their Marketing Strategies. The JOCV Designers' precision in cutting labels and fitting them on packaging containers is one major skill that has been imparted to local entrepreneurs especially Cooperative members who were closely working with them.

Previously, most Cooperatives did not pay attention to detail on how labels were fit on the packaging containers rendering them an eye sore to consumers and consequently losing out on sales. However, with the precision that was being underscored by the JOCVs, product presentation was greatly enhanced and subsequent sales peaked.

The skills and knowledge sharing was not in any way a one-way thing as the JOCVs also learnt a thing or two from their Malawian counterparts with whom they closely worked with. Most of the volunteers who worked under the OVOP Programme had to adapt to the work conditions in Malawi which are relatively not as good compared to Japan. Malawi is a country not so blessed with unlimited financial resources. It then follows that working with limited financial resources is one of the many challenges the JOCVs had to overcome while working in Malawi. It is our sincere hope that those that did their JOCV work in Malawi should be able to work in almost any difficult working environment. Secondly, most JOCVs mastered the local languages of Chichewa and Tumbuka which enabled them to blend in well with Cooperative members. It is again our hope that they will be the country's Ambassadors as they continue speaking our dear languages so that our country is recognised globally.

It is the Malawi Government's expectation that the JOCV programme will continue as it has greatly benefited many Malawians in numerous ways. May God Bless Japan, May God Bless Malawi!

LONG LIVE JOCV



Some of the JOCV that have helped mould OVOP Cooperatives.

STORY
05

President, KENDO Association of Malawi

Austin Somba

I would like to congratulate JICA for the 50th anniversary of the JOCV program in Malawi. As a Malawian, I am so happy to be associated with the activities that the Japanese Government has been implementing in Malawi through JICA. I have fond memories and experience living with the Japanese community in Malawi, particularly those who serve in the country as volunteers. I am also very happy that during the volunteer's stay in Malawi, I have been able to learn new things that they have introduced to the country. These include cultural exchange programs and in particular, the Japanese traditional martial arts called Kendo which originated by the Samurai warriors. In Malawi, Kendo was introduced almost 30 years ago. As a country, this is a good development and a positive contribution as we share one world since people are able to exchange different cultures and in that way Malawians assimilate and appreciate Japanese sports.

Through JICA, we have been able to receive technical support resulting from the fruits of the good relationship between Japan and Malawi. In particular, Malawian Kendo players have participated in international competitions and events such as trade fairs. We have been able to demonstrate Kendo at an international trade bazar in Lilongwe and at cultural ceremonies around Blantyre and a lot of Malawians have appreciated to see what actually happens in Japan. This has been made possible because of the good relationship between the Malawian boys and girls who play Kendo and the Japanese volunteers who served in Malawi for a few years but left a mark amongst the Malawians.

Kendo is not just a sport as we consider it in Malawi but it is



something that encourages the spirit of discipline. Malawian Kendo players are well disciplined, which is a positive contribution to Malawian societies. I am happy to notice that the Japanese brought a new culture to Malawi. As a new sport, Kendo is becoming popular in Africa. Malawi is one of a few countries that are practicing Kendo in Africa and is one of the best performers of Kendo in the continent. Every year, Malawi participates in international Kendo tournaments. On the international scene, Malawi has been able to participate in some international Kendo seminars that were held in Japan. This has been made possible through the support of the Japanese friends, Embassy of Japan in Malawi and JICA.

As JICA is commemorating the 50th anniversary of the JOCV program, I am happy to recognise their support for the development of Kendo in Malawi and linking Malawians and the Japanese. As a sporting activity that is just developing, we are easily able to get support from the people of Japan and all the time, Japan has been there to support us. As a leader of Kendo Association of Malawi, I am happy that most Japanese that left to Japan have been able to get in touch with Malawians through social media and they have been able to sustain their friendships. As we celebrate the 50th anniversary of the JOCV program in Malawi, I wish JICA the very best in their operations as they continue supporting the needy countries around the world.

STORY
06

Mzimba South District Education Office

Mighty Kayoyo

I am writing this article every happy and delighted to be one identified by JICA Malawi to have worked with JICA Volunteers for a long time. I am writing this as an attribute of services of JICA volunteers in Malawi.

First of all let me register my first experience with JICA which is dated way back in 1983/84 at Mzimba Secondary School with my JICA Mathematics teacher by the name Goro Tanaka. Goro Tanaka taught me Mathematics and my fellow classmates at that time to the stage were are now. By the way, I am a teacher trainer now a career which I emulated from him. Goro Tanaka came to Mzimba Secondary schools with his fellow volunteer by the name Michiwo Kudo. Kudo was a Physical Science teacher. Goro Tanaka was a good and experienced Mathematics teacher from 1983 to 1984. I still pay him an attribute because he produce a teacher trainer like me. Praise is to him.

The second experience with a JICA Volunteer was the one I worked with as a fellow teacher at Emfeni CDSS by the name Murase. This one came to the school while I was a Headteacher from Euthini Secondary School where he first worked for one year. He was another a good Mathematics teacher. He was teaching form one and three in

2005/2006. He is remembered for organizing a gathering of all JICA Volunteers in Malawi who converged at Emfeni for sporting activities in 2006.

Another experience with a JICA Volunteer was with Mrs Nelvin a wife of British Ambassador who was working with Japan International Cooperation Agency in 2016 to 2019. She introduced the feeding programme to learners at Kazomba F.P. School. In this programme learners of the school were fed with brown rice from Japan. I was working with her as a coordinator of the programme for the district. In carrying all the above activities she could bring in JICA volunteers who were working in nutrition activities.

Two years down the line I have been working with some JICA volunteers at Kaphuta F.P. School in our district. One of such teachers is on the photo. This one is still teaching at Kaphuta F.P. School up to now

All in all I could proudly say these JICA volunteers have done tremendous work in Malawi and other African countries in Education sector especially in the teaching of Science subjects in Malawi. I and her at Education Office Mzimba South.



Rose Mithi Majonanga

Monkey Bay Teachers Development Centre is one of the recipient organizations of the Japan Overseas Cooperation Volunteers program in the field of Primary Education and Youth Activities Planning and Management. Since the first volunteer, Yui Sato, was dispatched, the institution staff, zonal teachers, learners, and the surrounding community members have been benefiting a lot.

Before the extension of the program to Monkey Bay, some teachers were having problems in imparting knowledge to learners during Expressive Arts lessons. Some topics in Expressive Arts were being skipped due to limited skills. As such performance of learners in Expressive Arts during national exams was not impressive. Some youth activities after classes were poorly planned and implemented as such children's interest in out-school-activities was declining. When JICA started dispatching volunteers through the JOCV program, things have improved as far as planning and managing youth activities is concerned. Teachers are assisted and can teach topics that were previously being skipped such as Music, Sewing, Knitting, and Drawing. The learners performance in national exams has improved from 48% in 2014 to 79% in 2020. This is achieved through team teaching where volunteers teach together with class teachers.

Yui Sato was the first JOCV at Monkey Bay TDC (2015-2017) and she conducted several activities in almost all the schools across the zone including equipping staff at the TDC with office management skills. In the following pictures, Yui Sato is carrying out different assignments with teachers and learners.



Yui Sato, posing with learners at Marine Demonstration school after an Expressive Arts lesson

One of the most important things which JOCVs encourage is that early childhood skills development is vital for individuals to live a successful life. Using the local environment skillfully makes the community develop and members benefit a lot.



Yui Sato, explaining to teachers their roles during Undokai



1



2



3



4

- 1 Ayaka Hashimoto succeeded Yui Sato in 2018 and she also conducted a series of activities aiming at equipping teachers and learners with various skills and producing various items that may be important in daily life using the resources that are readily available in their communities. One of the items that she, together with learners at Zambo Primary School produced, are mosaic boards as shown below. The JOCV (Ayaka Hashimoto) posing with TDC staff in the TDC hall behind mosaic boards
- 2 Takane Terakado is new volunteer at Monkey Bay TDC and she arrived in August 2021. Takane has also embarked on the projects which were initiated by Ayaka.
- 3 The very same trash we see in our environment every day can be used to make different useful items that can transform our lives. Door mats is just one of those items that can be made from old plastic bags as shown in the picture.
- 4 A teacher from Zambo School, Monkey Bay zone demonstrating how to sew during Wakuwaku festival at Dedza TDC
Unfortunately, due to Corona Virus Disease, Ayaka left for Japan before the end of her stated time and some of her projects were not completed.

Japan and Malawi – maintaining a good relationship through JOCV program.

We would like to congratulate the Japan Overseas Corporation Volunteers (JOCV) Program in Malawi on its 50th anniversary. Our school has benefitted a lot on this program.

To begin with some of the buildings at Mkwichi Secondary School were built with Official Development Assistance from Japan, which include administration block (head teacher's office, Deputy Head teacher's office, Bursar's office, Reception, Library, stores) classroom blocks (forms 2,3 and 4) and assembly hall etc. Thanks to this, the school is now able to accept a large number of students and conduct a number of assemblies, meetings and school based Insets in the hall.

A part from that, our school welcomed its first Japanese volunteer in 2016 by the name Yui Araki. The picture below show Yui Araki working together with Kusinyala during a physics class.

Then after Yui, Kodai Ishikawa came but left before finishing his two years due to Covid-19 pandemic, and then we now have Mari Takeuchi, who is now a third volunteer to come to our school.

Mari teaches computer studies and we are expecting to be with her for two years. The picture below shows Mari and Mapanje working together in helping students in a computer laboratory..

All volunteers have been working with the Science department teachers.

They are hardworking, cooperative and exemplary in helping students and even work with fellow teachers as shown in both pictures.

Our expectations is that Japan will continue sending volunteers to our school as they have been doing which in turn will help to maintain a good relationship between Japan and Malawi.

We wish them all the best.



Vote of thanks for 50 years of service by the JOCV program in Malawi

I wish to profoundly thank the Japanese Government through the Japan Overseas Cooperation Volunteers (JOVC) Program as we celebrate 50 years anniversary of a very successful progress in Malawi. This celebration could not come at a better time than this one. I have always been looking for a way how I can show my gratitude to the JOCV but didn't know. The public display today at the Lilongwe Game Shopping Complex did it!

I am one of the beneficiaries of the JOCV Program as a student. When I was selected to Chitipa Secondary School in 1981, we had 2 Japanese male teachers. These were Y. OTAKE and TSUYOSHI ODASHIMA. Y. Otake was from Yamagata. They came in the same year when I started form 1 up to 1983, the year I sat for Junior Certificate of Education examinations. Both were Mathematics and Science teachers. They taught in all the classes, forms 1 to 4. We also had 2 British and 1 Scottish under the VSO umbrella who were equally good. This rekindles my fond memories with the Japanese, 40 years ago!

What struck me most about those 2 teachers was their humbleness and dedication to work. Honestly, it is a big sacrifice to work in the deep remote areas when you are from a city. Chitipa is the last district, far north of Malawi. During that time, traveling to Chitipa was a big problem due to lack of public transport, compounded by the hilly, winding and dusty roads. Your children went all the way. They lived a poor man's life, ate with us, slept with us and played with us! It is now that I am a grown up person when I realize that those teachers had a calling to serve the poor communities. I do not take it for granted.

It is because of Y. Otake and Tsuyoshi Odashima that I mastered Mathematics and Physical Science. No wonder along my career path I became a very good Accountant and Business Computing Professional. Currently I am self-employed as an Accounting and Business Consultant after working in the Public Service, Non-Governmental Organi-



zations, Certified Public Accountants, Consultancy Companies and Colleges in various capacities relating to Computing, Administration and Finance Management.

In the same vein, I wish to thank all Japanese Volunteers in their different programs. JICA – JOVC impact in Malawi is highly felt and no one can pretend to be ignorant about it. If there's a way I can contribute for the betterment of Japan activities in Malawi, I offer myself for the cause. I have travelled all over Malawi and can speak all languages of Malawi except Lhomwe. Besides Accounting and Computing qualifications, I have the Training of Trainers Certificate (TOT) which enables me to train others General Accounting, Computerized Accounting and Corporate Management/Governance.

Through this article, please consider me to be part of the main event day during the 50th Anniversary Celebrations. I plan to visit JICA Malawi Office to learn more on your programs. If you want to experience true love and compassion, work with the Japanese.

Thank you very much for your attention. May God bless you and your country Japan.

Working with Japan Overseas Cooperation Volunteers (JOCV) program

Introduction

The author of this article worked in Mzimba South, one of the 6 districts in the northern region of Malawi between November 2014 and December 2015. He is currently working in Kasungu a district in the central region of Malawi. Kasungu and Mzimba districts share boundaries. During this time, the JOCV Program had deployed a number of volunteers in Mzimba District both at the district hospital and in some peripheral health facilities, like Luwerezhi, Edingeni, Manyamula and Jenda.

In the process of their work, the volunteers identified health information documentation as one of the big problems among health workers safe keeping of health data at home. The volunteers then teamed up and engaged this author to come up with a project aimed at improving documentation and proper keeping of maternal and child health data. The

team came up with an improved growth monitoring chart to replace the one in use currently. The improved chart was piloted in Mzimba South and results of the pilot finally presented to the Ministry of Health through the Ministry's technical working group.

Experience with the Volunteers

The most memorable experience with the volunteers was the attendance of 2 international conferences on maternal and child health handbook. The conferences were held in Yaoundé, Cameroon (September 2015) and Tokyo, Japan (November 2016). The aim of these conferences was to share experience on how countries were progressing on the introduction, use and management of the MCH Handbook. Successes, challenges as well as plans for scaling up were also shared and discussed. This author made a poster presentation during both conferences.



From left to right; Kiyohito Kimura (Mr Jere) JOCV, Moses Chavula and Asami Satoh (Nyaphiri) JOCV at the conference at Yaoundé International Conference Centre in Yaoundé, Cameroon



From left to right; Kaori Ikebe (Nyagondwe) JOCV, Humphreys Nsona National IMCI Program Manager MOH, Moses Chavula and Izumi Kasai (Nyakasai) JOCV at the conference at United Nations University in Tokyo, Japan

Changes Observed while Working with the Volunteers

Working with the community requires considerable commitment from the community itself. To ensure community commitment extension workers work with community volunteers who are selected from the general community by community leaders like traditional leaders. It is important to keep these selected individuals active for a community programme to yield positive results. These community volunteers are used to be given monetary incentives to keep them active. However, the JOCV Program discouraged the monetary incentives. During community volunteers meetings or orientations, they were provided with actual food for lunch, rather than lunch allowances.

Lessons Learnt from Working with JOC Volunteers

The major lesson the author of this article learnt while working with the Japanese volunteers was the way they build rapport between themselves and the community they are working in. The volunteers both male and female related very well with community members to the extent of acquiring local names by which they were called by the community. There were names like Nyagonwe, Nyaphiri, Nyamithi (for females) and Jere (for males). The community members became so excited and free to call a foreigner by the local name. Some volunteers could modify their actual name to sound local like Nyakasai.

The volunteers also easily partook in preparation and eating of local foods especially the common staple food for Malawians, nsima. The volunteers also tried their best to dress like the local community particularly the ladies who donned a wrapper (chitenje) onto their dress or skirt just like the local woman.

The Japanese volunteers too learnt something from the author. The author is from one of the tribes of the northern Malawi and was very instrumental in assisting the volunteers understand some of the cultural beliefs which would affect the performance of their job. One of such is the way you show respect to those in authority in the community.

Expectation on JOCV Program

The Japan Overseas Cooperation Volunteers (JOCV) Program is supporting a lot of initiatives through the expertise of the Japanese volunteers. It is expected that the program should have a strategy of ensuring that whatever is initiated by the volunteers is not only supported when the volunteers are present in Malawi, but also followed up to its expected conclusion. The case in point is the improved growth monitoring chart in the child health passport. An improved chart was introduced in Mzimba as a pilot with an aim of possible extension of its use to the rest of the districts. It has not yet been rolled out.

Strong Heart, Open Mind, Great Ambition: Masahisa Sugano

If you were asked, who is Masahisa Sugano what would you say?

Arriving in Malawi in 2010, he was posted straight to Dedza District Irrigation Office under Lilongwe Irrigation Services Division (LISD) in the Department of Irrigation (DoI) - Masahisa Sugano! Dedza is one of the districts in the Central Region of Malawi. He worked in the district for three years.

Strong heart? When Masahisa started working in Dedza District he, probably, had to adjust to the new environment and culture. Masahisa happily shared office space of 4m by 4m with six irrigation officers and used a motorcycle to travel long distances to the remote irrigation sites. He did quite a lot in engineering surveys, construction supervision and organising irrigation farmers. He was not afraid to eat any local foods provided by the farmers and at local restaurants. He enjoyed the staple food nsima with dried small fish (usipa), okra, dried vegetables (mfutso). After eating, he could wash the food down his throat with the local maize drink called thobwa. No wonder he earned the name – Ambewe from the locals!. Masahisa also enjoyed watching the traditional dance gule wa mkulu which he encountered on the way to the field and in villages surrounding the irrigation schemes.

An open mind? Yes! Dedza Irrigation Officers taught Masahisa how to ride a motorcycle which was an effective mode of transport at the time. The officers also shared their skills in community mobilization and how to develop small scale irrigation schemes. Likewise, Masahisa shared skills in designing irrigation schemes; monitoring scheme operation and maintenance of schemes and flood control using fascine mattresses. His personal attributes of time management and hard work were induced in the workmates.

Great ambition? After working for some time in Dedza, Masahisa noticed that the office had three major challenges - limited survey equipment, unavailability of motor vehicle and some technical capacity gaps in the irrigation officers. With no survey equipment, the district had to borrow from LISD and the equipment was also shared with two other districts; Lilongwe and Ntcheu. This made planning difficult and also resulted in a backlog of work. Due to lack

of a motor vehicle, it was challenging for the office to conduct irrigation activities for instance; working in teams, travelling during the rainy season and transportation of construction materials. He, therefore, facilitated donations from JICA through Miyagi Prefectural Government to the Malawi Government. The donations included several survey equipment for the three districts irrigation offices; Dedza, Lilongwe, Ntcheu and at the LISD office and a donation of a motor vehicle to Dedza irrigation office. To build the capacity of LISD staff, Masahisa facilitated the construction of irrigation infrastructure irrigating 20 hectares of Nyangawira irrigation scheme, construction of the fascine mattress in Golomoti and staff training programs in Japan through JICA and Miyagi Prefecture. He also facilitated provision of survey equipment to the Lilongwe University of Agriculture and Natural Resources. Masahisa is all of the above. He is a strong heart, this helped him to quickly adjust to the new environment. Working with Masahisa was easy and pleasant because he is an open mind. Masahisa delivered; his ambitions were great. Eversince he left Malawi, he has been the strongest bridge of partnership between the Department of Irrigation in Malawi, on one hand; and, the Miyagi Prefectural Government and Miyagi University, of the other hand. This is just a fraction of what we could say if asked – Who is Masahisa Sugano?





50th Anniversary of the Japan Overseas Cooperation Volunteers commemoration – Memorable Moments with Saki San a Volunteer who worked with Lilongwe Water Board

What was your memorable experience with the volunteer?

To say that I have one memorable moment with Saki Yoshinaga will not be enough. I have a lot of amazing memories with Saki, both socially and professionally. One of my favorites was when she learnt the Chichewa word for Insect (Tizilombo). She tried to use it even when she didn't need to and that was very funny to watch.

I remember our excitement and relief when we successfully organized the bamboo planting along Kamuzu Dam 1, with the community, LWB young water professionals, students from Bishop Mackenzie and Likuni Boys

What Changes did you observe as a result of working with the volunteer?

I tend to use Japanese mannerism, for example bowing.

More open minded

More passion driven and commitment to work

What have you learned from the volunteer, what have you taught to the volunteer?

I would like to believe that we both benefited from working with each other. I recently was asked to make a ribbon for an event the Minister was to attend. I made 2 of them and thanks to Saki, she is the one that taught me how to make one. We used to make a lot for the Madzi club. She believed it was easy to compel children through our artistic side. Saki taught me to be dedicated and love what I do. She

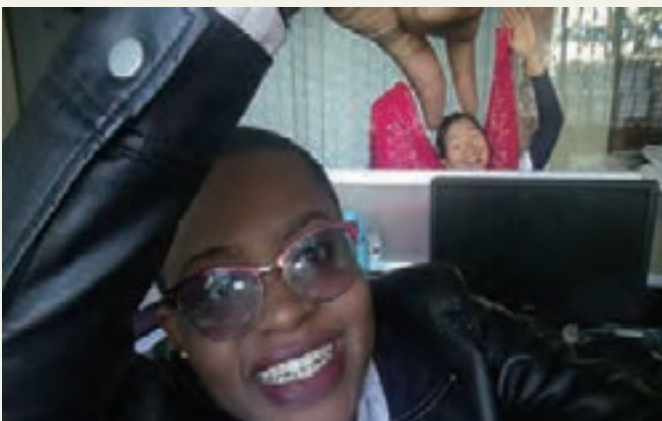


always reminded me how the job we were doing was not to benefit us, but the future generation and therefore had to do it as if the whole of Lilongwe Water Board was relying on us to save the future.

I primarily taught Saki the Malawian culture through experience. I felt it was important for her to experience it firsthand therefore, I went with her to the local market for groceries, Kaunjika for clothes, Malawian wedding and parties.

Comment and expectation on the JOCV program if any.

The JOCV program is a great initiative, as both the host and the volunteer get to learn from each other. It expands both individuals' worldview and they become more open minded. A follow up and a reunion for the host and the volunteer.



Saki San and Vanessa Public Relations Office

JICA Volunteers Language Trainer
Austin Assan

I profoundly and sincerely congratulate JICA, as it commemorates 50th Anniversary of its JOCV Program in Malawi.

As a Language Trainer, I have closely worked with JICA Malawi for many years. During this period, I have interacted with many Volunteers, and senior staff, extensively. I have also passionately shared cultural, educational, social and developmental experiences with the volunteers.

Every time I conduct language trainings with volunteers, it lives to be a memorable time in my life and an experience to cherish. I work with them closely, we learn and laugh together, and we move together.

It is pleasing to note that the volunteers and I, have both learnt a lot from each other. One most memorable aspect I have personally learnt, is the hardworking spirit of the Japanese people. I will live to remember this. The volunteers too, on the other hand, have come, and gone back to Japan having experienced that Malawians are kind and cheerful.



I know JICA plays a key role in the development and delivery of our Education systems in Malawi. As a teacher, I look forward to seeing continued working relationship between JICA and Malawi.



Francesco Joseph (Joseph San)

My name is Joseph Francesco, commonly called “Joseph san”, I work at the JOCV dormitory at Area 3 in Lilongwe City as a House Keeper/Gardener, and I am also responsible for spot-checking day and night security guards at the dormitory. I joined JICA Malawi Office in December, 2003. I have a lot of good memories from my interaction with JICA Volunteers within the years I have been working at the JOCV dormitory. Generally, I have noted that the volunteers who have been coming to Malawi and who had been staying at the dormitory are loving people and polite. When there is an issue to discuss with them, they approach me in a polite manner and since 2003, I have never had a hot argument with them. During the course of my employment with JICA Malawi Office, I have learnt much from these volunteers. For example, volunteers who work as science teachers taught me a lot through the experiments they conducted, using locally available resources by teaching me that if I mix this specific product with the other one, I would be able to produce another specific product. Volunteers from the health field have always been giving me advice on how I can take good care of my health including good diet. Some volunteers have been offering me family planning tips, asking me not to have a lot of children so that I manage to take good care of the ones that I had.

I also remember the panic volunteers had when there was water supply interruption and an electricity outage at night since they come from a developed country where they have not had these experiences in their homes in Japan. I remember them panicking and calling me from my nearby house for help and I could quickly get out and switch the backup generator on. I also remember some of the volunteers who would scream after seeing a small insect like a cockroach inside the dormitory, asking for my help.

The job I enjoy doing when I am working at the dormitory is to assist the sick volunteers by preparing the bed at Red Cross Room in the dormitory as I prepare for the sick volunteer to arrive from his or her work station, washing their beddings and clothes as the volunteer is sick. The good feeling comes about when the volunteer is later healed and I could feel that I contributed towards taking care of the sick volunteer until he or she gets well.

Some of the volunteers, particularly when they are returning to Japan after their term in Malawi expires would give me souvenirs that include clothes. That is why sometimes, you see me wearing safety gear written Japanese companies at the back. Some other souvenirs include Ochazuke and Onigiri. Other good memories I have, having interacted with volunteers, is when the newly arrived volunteers start attending chichewa lessons at JICA Malawi Office and in the evening

when they go back to the dormitory, they start talking to me in chichewa as a way of practicing to speak the language. At the same time, some volunteers would teach me Japanese language, that is why I have managed to catch a lot of Japanese phrases. Another good memory that comes to my mind is when I was taught how to eat using chopsticks even though I could take a long time to finish my food while eating with chopsticks. Sometimes, as volunteers were about to be dispatched to their work stations, they could ask me to teach them how to make fire using firewood and how to cook nsima.

I must admit that my family, especially my children have a good influence towards the Japanese people and are so fond of them. I remember my eldest daughter when she was young, she could cry after seeing a Japanese but now she is used to seeing and interacting with them. The Japanese volunteers sometimes interact with my wife and children, cooking and eating Malawian and Japanese food together.

The challenges I have experienced during my experience at the dormitory, interacting with volunteers is that sometimes there could be delays in fixing faults at the dormitory for example a faulty shower in the bathroom due to procedures taken by JICA Malawi Office and the volunteers would give me pressure to have the job done. Another challenge that I used to experience in the early years of my employment is difficulties to communicate with the volunteers. Most of the volunteers in the early years of my employment were not conversant in spoken English since that generation had been learning English at high school and they could not fluently speak English. The volunteers that are currently being dispatched to Malawi can now fluently speak English since in Malawi, the language is now being taught from elementary school.

I would like to congratulate JOCV program for clocking 50 years of existence in Malawi. I personally appreciate the positive contributions the program has brought towards different sectors of Malawian societies that include health and education. I expect JICA to continue operations of the JOCV program in Malawi and provide assistance to the citizens of the country in different areas of development.



SYMPOSIUM

座談会

JICA マラウイ事務所現地職員が語る

マラウイ 協力隊の軌跡

FACILITATOR : Mr. Nathan MWAFULIRWA

Mr. George
KANDULU,
Secretary

Mr. Godfrey
KAPALAMULA,
Senior Program Officer
(SPO)

Mr. Reinford
MANDA,
Program Officer
(PO)

Mr. Michael
MALEWEZI,
Program Officer
(PO)



How do you rate JOCV in JICA Malawi Office?

[**Mmanga-san**] JOCV was a very much recognized entity just because it started operating in Malawi before JICA. As such, it was paramount.

[**Kapalamula-san**] The volunteers were the flag of Japan and people knew Japan through interaction with volunteers.

[**Manda-san**] Around 2000 to 2006 we used to have a lot of volunteers ranging from 80s to 100s. Blantyre Sub Office was offering much needed support just because majority of volunteers

were in the Southern region, however, JOCV as a program has been very significant in various ways.

[**Simon-san**] I want to emphasize the value that volunteers bring to host institutions and communities where they are based. They serve as face of JICA through living with people and interacting with them. The local population know more about Japan through such interactions.

Community participation:

[**Mmanga-san**] Through the community participation by volunteers, people have known volun-

teers as government workers and have been working in various sectors like health, engineering, agriculture etc. However, wherever they worked, they blended very well with local communities.

Challenges:

[**Manda-san**] Regarding the issues of accommodation, as per Exchange of Notes signed between Governments of Malawi and Japan, Malawi Government is supposed to be providing decent accommodation to volunteers. However, over the years, Government of Malawi has failed to honour this pledge of providing

**Mr. Nathan
MWAFULIRWA,**

Senior Program Officer
(SPO)

**Mr. Simon
SIMKOKO,**

former Program Officer
(PO)

**Mr. Derick
MMANGA,**

Retired Manager,
General Affairs (MG)



マラウイ 協力隊の軌跡



accommodation. The situation is so critical that even Malawians under public service are also affected by failure to have accommodation from Government.

Trends in 70s, 80s and 90s:

[**Mwafu-san**] Around 1970's, 1980's and 1990's volunteers felt very free to live and stay in rural areas despite availability of social amenities like organized markets, banks and mobile phones. We had volunteers as far as Chitipa. However, in 2020s, the office is limiting where to sent volunteers. As Malawians, we are thankful to those volunteers who worked in rural areas and contributed to the social and economic development of this country.

Memories of JOCVs:

[**Mwafu-san**] I cited an example of a volunteer with PVHO in Karon-ga, Mr. Arima. While still a young boy, knew Mr. Arima as a hardworking person and what ever he was doing had an impact to Malawians. This also extends to many Malawians that have benefited from

the service of Japanese volunteers. Two weeks ago, someone told me "I was taught by Japanese mathematics teacher." Many people still remember Japanese teachers. I think JOCV is wonderful program.

[**Kapalamula-san**] Around 2002 when Malawi Government recognized the JOCV program in a special way. It started with a phone call from one presidential assistant who informed him that the State President wanted to meet all the volunteers. Arrangements were made and on an appointed date, volunteers had an appointment with the State President at Mtunthama State Lodge. It was during this meeting that the State President applauded the role rendered by JOCVs to leave their comfort in Japan and sacrifice to work in Malawi.

[**Kandulu-san**] One of my good memories is Mr. Kohei Yamada who composed a HIV / AIDS prevention song "Ndimakukonda" which had an impact in Malawi.

[**Malewezi-san**] I have exciting experience from my wife. While

growing up as a young lady in Chiradzulu, befriended a volunteer by the name of Ms. Yoshiko Sato who was working at St. Joseph Hospital - Nguludi. Ms. Sato could interact with the young girls at a personal level despite her work demands.

[**Simon-san**] I want to mention its uniqueness of the volunteer program in the way they collaborate. Around 2012 to 2017, volunteers in Mzimba South (Emfeni, Luwerezzi, Embangweni, Champhira) were implementing HIV/AIDS programs in the area. There was collaboration with counterparts and local communities.

[**Mwafu-san**] As national staff, we have a Japanese culture in us in the way we conduct ourselves. As such we just say "BRAVO!!" to all volunteers.

[**Manda-san**] The volunteers worked with the local community by assisting them to get in touch with Japanese Embassy in Nsanama in Machinga. Through grass roots projects, they managed to get support of construction of school blocks and desks. As a result, majority of schools in Machinga wanted to have services of the volunteers.

[**Mmanga-san**] I am very proud to have been associated with the program and this extends to all national staffs that participates in logistics to enable volunteers work in Malawi. On a sad note, as an office, we have witnessed twelve deaths of volunteers while in service in Malawi and majority are from road accidents.

>>> Mr. Derick MMANGA

Joined JOCV in June 1986 in Blantyre and in 1988, JOCV was -upgraded to JICA Office. He has worked for JICA Malawi for 22 years and finally retired in 2008.

>>> Mr. Nathan MWAFULIRWA

Joined JICA in 1997 in the JOCV Section. He has worked in the JOCV Section for 11 years and in 2008 transferred to Water Sector. Currently, he is managing the General Affairs Section. He has memorable times of working with volunteers during the 11 years.

>>> Mr. Godfrey KAPALAMULA

Joined JICA in April 2000 and was assigned to General Affairs Section. However, barely after three months, he was moved to JOCV where he worked for 4 years, then transferred to General Affairs Section, then moved back to JOCV Section for another two years before finally moving to Programs Division.

>>> Mr. Reinford MANDLA

Joined JICA in December 2000 and was based in Blantyre Sub Office. In September 2002, Blantyre Office was closed and meant being transferred to main office in Lilongwe. Through the years, he has worked in the General Affairs Section, Technical Cooperation Section and since 2014, he has been working in JOCV Section.

>>> Mr. Michael MALEWEZI

Joined JICA in February 2011 and through the years, he has worked for Infrastructure Section, later transferred to Training, later to Public Relations and in 2018, transferred to JOCV Section.

>>> Mr. George KANDULU

Joined JICA in 1996 and was stationed in Blantyre Sub Office. Following the closure of Blantyre Sub Office, transferred to Lilongwe where he has served in different sections. In 2017, transferred to JOCV Section where he is enjoying working with coordinators and volunteers.

>>> Mr. Simon SIMKOKO

Joined JICA in March 2010. He worked in the JOCV Section for six years - up to 2017 before resigning from JICA. He has fond memories of working with volunteers during his time.



有名になった 隊員の活動



HIV/AIDS 予防啓発ソング

山田耕平隊員 (H15年度2次隊 村落開発普及員、カロンガ)

2005年、山田耕平隊員は、現地語で若者たちに自発的なエイズ検査 (VCT) を呼びかけるため、HIV/AIDS 予防啓発ソングをマラウイ人歌手と制作しました。ミュージック・ビデオとポスター制作にあたっては、新田秀幸隊員 (H16年度3次隊 AV機器、ドマシ) と石田純子隊員 (H16年度3次隊 コンピュータ技術、サリマ) が協力しました。隊員同士の熱心なコラボレーションが山田隊員のデビュー曲を成功へと導いたのです。

『Ndimakukonda』(ディマクコンダ) チェワ語で「愛している」の意味は、国民的ヒットとなり、今でもこの歌を覚えているマラウイ人が多くいます。



1 新田隊員が作成したミュージック・ビデオ
2 石田隊員がデザインしたポスター

かけ算ソング

田仲永和隊員(2017年度1次隊 小学校教育、リロングウェ)



※田仲隊員の投稿記事も併せてお読みください。▶P.067
https://youtube.com/watch?v=TMUi-s3f_hk&feature=share



田仲永和隊員は、かけ算九九の苦手な子供たちに歌を通してかけ算をおぼえてもらおうと、同期隊員や学生と協力してかけ算ソングを制作しました。隊員が作詞をし、作曲はマラウイの学生たちが担当しました。かけ算ソングの普及のため、教育省と連携して実験校を設定し、各校の子供たちが出演するミュージック・ビデオを制作しました。このミュージック・ビデオは国営テレビでも放送されました。また、実践授業を行って事前事後テストの点数の伸びをデータ化したりするなど、教育現場への導入を図りました。音楽の大好きな子供たちに歌はぴったりで、かけ算ソングを活用した隊員の学校では、かけ算テストの平均点が大幅に上がり成果が現れました。

サイエンスマン

長谷宏司シニア隊員

(H17年度0次隊 プログラムオフィサー、
配属先:ドマシ中等教員養成大学)

長谷宏司シニア隊員は、国営放送(テレビマラウイ)の人気テレビ番組「サイエンスマン」を制作しました。2006年1月スタート、毎週日曜、同番組にサイエンスマンである長谷隊員がレギュラー出演し、「飛行機はどうして飛ぶの」といった疑問や科学の原理を分かりやすく解明したり、身近にある材料を使って楽しめる実験や生活に役立つものを紹介したり、マラウイでは新しいタイプの楽しい教育番組に、子どもから大人まで多くの視聴者が夢中になりました。収録はテレビマラウイ派遣の癸生川裕隊員(H17年度3次隊 AV機器、ブランタイヤ)のサポートのもと、マラウイ人スタッフが撮影、編集を行ないました。

PICO Factory

理数科教師隊員たち



2010年代には、理数科教師隊員たちが学校の長期休暇期間を利用し、協力して「PICO Factory」と称するサイエンスショーを開催しました。サイエンスショーでは、現地で容易に入手できる材料を上手く活用しいろいろな実験をして見せ、科学の不思議や面白さを伝えました。PICO Factoryは、各地の学校や難民キャンプを回り、好評を博しました。

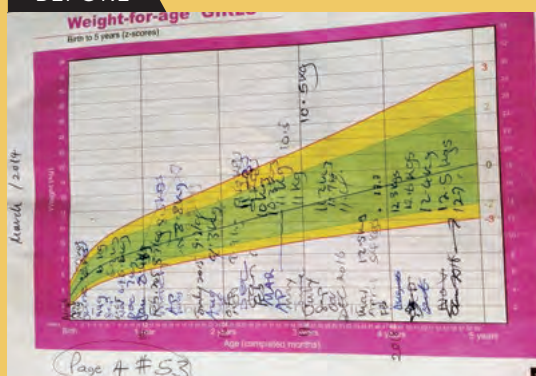


ヘルスパスポートの改善についてヘルスワーカーと協議

グループ型派遣 ヘルスパスポートの改訂

2010年代には、ムジンバ県において保健分野で2つのグループ型派遣、
【HIV/AIDSサービス強化(感染症・エイズ対策)】及び【地域保健強化(公衆衛生)】が実施されました。
ここでは、2015年～2017年にかけての公衆衛生グループ隊員によるグループ活動を紹介します。

BEFORE



改訂前のヘルスパスポート

AFTER



改訂後のヘルスパスポート

グループ
メンバー

H26年度1次隊 公衆衛生(ルウェレジ)、H26年度1次隊 感染症・エイズ対策(ルウェレジ)、H26年度2次隊 コミュニティ開発(エディンゲニ)、H26年度2次隊 コミュニティ開発(ジェンダ)、H26年度3次隊 公衆衛生(マニャムラ)、H27年度2次隊 公衆衛生(ムジンバ)、H28年度1次隊 コミュニティ開発(エンフェニ)、2016年度3次隊 公衆衛生(ムズ)



マラウイのヘルスパポート(子ども健康手帳。マラウイには母子手帳がなく、母親用、子ども用とに分かれている)には様々な問題が指摘されていました。

各隊員はそれぞれの任地でアンダー5クリニック(5歳未満児健診)をサポートしていましたが、マラウイでは5歳未満児に対して専用のヘルスパポートが配布されており、健診では各自持参したヘルスパポートに成長記録、予防接種歴、その他必要事項を記入しています。しかし、成長記録記入欄の不備のため記入時にミスが多く、低体重児のスクリーニングができていない、適切な時期に予防接種が受けられていない等の問題がありました。

そのため、グループ全員が協力してヘルスパポートそのものの質の改善に取り組むことになり、関係者とのミーティング、ベースライン調査を通し、成長曲線の改訂版を作成しました。

ヘルスパポートは、手帳そのものの不備の他に、母親による管理にも問題があり、水や油、子供の落書き、虫食い等によるヘルスパポートの破損、汚損が多く見られました。そのため、母親対象の保持管理啓発ポスターを作成し、それぞれの配属先でポスターを活用して保管時の注意喚起を行なうことで、ヘルスパポートに記載されていた必要なメディカルインフォメーションの紛失防止を図りました。

成長曲線改訂版の作成後、健診に携わるヘルスワーカーへのトレーニング、保健省への説明・了解を経て、2016年5月よりムジンバ県南部地域で改訂版の試行を開始しました。

保健省TWGでのプレゼンテーション 同年7月に保健省IMCI(Integrated Management of Childhood Illnesses小児疾患統合管理)のTWG(Technical Working Group)会議で隊員2名とカウンターパートがプレゼンテーションを行ないました。また、8月には保健省の担当オフィサーをムジンバ県の活動現場に迎えスーパービジョンを実施、11月の中間評価(レビューミーティング)を経て、2017年3月に最終調査を行ないました。そして、1年間の取り組みを最終報告書にまとめ、2017年7月に保健省に提出。また、保健省TWG(Technical Working Group)会議にて改訂版試行結果のプレゼンテーションを行ない、保健省関係者始め国際機関等の関係者にも改訂版の有効性を広く周知しました。

2019年、改訂版ヘルスパポート50,000部(男・女児用各25,000部)を印刷、ムジンバ県に配布。当時活動中の公衆衛生グループ型派遣の隊員たちが、ムジンバ県南部病院及びムジンバ県北部保健局と連携して配布支援を行ないました。今後、改訂版のマラウイ全土への普及が期待されます。

※公衆衛生グループの活躍については、グループ型派遣のカウンターパートであった、当時ムジンバ県南部病院の保健オフィサー Moses Chavula氏の投稿記事も併せてお読みください。▶P.080



自治体連携

宮城県、横浜市水道局

2010年から2020年にかけて、宮城県と横浜市による2件の自治体連携が実施されました。

宮城県

「みやぎ国際協カプロジェクト」として、2010年～2016年の6年に亘り、宮城県の技術職員3名をデッサ県灌漑事務所へ派遣しました。

2010年度1次隊 (2010年6月～2013年3月) 農業土木1名

2013年度1次隊 (2013年7月～2014年9月) 農業土木1名

2014年度2次隊 (2014年9月～2016年3月) 農業土木1名



初代隊員は、デッサ県内における灌漑施設の適正な設置と管理を目標に、①ブワンジェバレー頭首工(※日本のODAによって建設された国内最大の農業用取水施設)の施設管理帳票の作成、②灌漑施設の改修工事、及び補完プログラムの実施、③デッサ県灌漑施設データベースの作成を支援しました。

2代目隊員は、配属先の通常業務である測量作業や資料作成等のサポート、灌漑施設モデルサイトの整備、また、灌漑効果を検証するため整備済み地区における作物収量調査を実施しました。他に、配属先が受け入れている研修生に対し、測量機器の使用方法等の指導を行ないました。

3代目隊員は、豪雨により堰が破傷した地区の取水堰の復旧工事、及び農作物の収量向上・維持管理の負担軽減を目的に水路の延伸工事を支援しました。また、初代隊員に引き続き、ブワンジェバレー頭首工の維持管理を支援し、管理・点検表の作成、農民に対する営農指導も継続して行ないました。他に、雨季における河床の洗掘を防ぐため、粗朶沈床を設置。対象地区の住民たちとワークショップを開催し、粗朶の普及を行ないました。

※初代隊員の活躍については、Dedza District Irrigation OfficeのSangwani Khosa氏の投稿記事も併せてお読みください。▶P.082

横浜市水道局

「マラウイ国上水道支援への横浜市水道局職員派遣事業」は、TICAD IVのフォローアップとして、アフリカ地域の上水道分野への継続的な協力の一環で、2014年～2020年までの6年に亘り実施されました。この間、横浜市水道局の職員計20名が、約1か月の短期隊員としてブランタイヤ水公社へ派遣されました。

2014年度9次隊(2014年9月～2014年10月) 上水道3名(JV1, SV2)

2015年度9次隊(2015年9月～2015年10月) 上水道3名(JV1, SV2)

2016年度9次隊(2016年10月～2016年11月) 上水道3名(JV1, SV2)

2017年度9次隊(2017年9月～2017年10月) 上水道4名(JV2, SV2)

2018年度9次隊(2018年9月～2018年11月) 上水道4名(JV3, SV1)

2019年度9次隊(2020年1月～2020年2月) 土木3名(JV3)

2014年～2016年の3年は、料金徴収改善への提案、出前水道教室の開催、漏水調査の指導を中心に活動を行ないました。また、後半の2017年～2020年の3年は、無収水(漏水など水道料金として徴収できない水)対策、施工管理、水質検査、広報活動を中心に活動を展開しました。



ブランタイヤ水公社では、水道管を埋める位置や深さが不適切であることが多く、また工事手法も自己流で雑なため、市民に届く前に水道管から水漏れする事例が後を絶ちません。そのため、土木工事と料金に関するマニュアルを作成し、無収水対策を支援しました。

出前水道教室では、水公社職員が市内の小学校に出向き、浄水処理実験を通じてブランタイヤ水公社の水道事業を紹介し、水道料金を支払う重要性を啓発してきました。2018年には、水源林を守る大切さを教えるため、横浜市が実施している森林保全実験の導入支援を行ないました。この実験は、草木を植えた箱と土だけを入れた箱のそれぞれに水を加えると、草木を植えた箱からの方が流れ出てくる水の量が少なく、またその水の濁りも小さくなるという「森林の涵養機能」を説明する内容で、派遣前から実験装置の作成や準備を進め、現地で実際に小学生を対象に実験を行ないました。



2020年は、ブランタイヤ水公社職員を対象に、料金管理・施工管理に関するワークショップを開催し、水公社が抱える問題と解決方法に関する議論を行ないました。また、技術分野では、工事後の記録を残すため、状況ごとに写真を撮影して管理・保存を行なうことを提案しました。

他にも、2018年には、派遣者4名が協力して日本文化紹介イベントを開催。相撲大会、二人羽織、折り紙やけん玉の紹介を行ない、現地の人々との交流を深めました。また、2020年には、日本食を振舞うイベントを開催し好評でした。

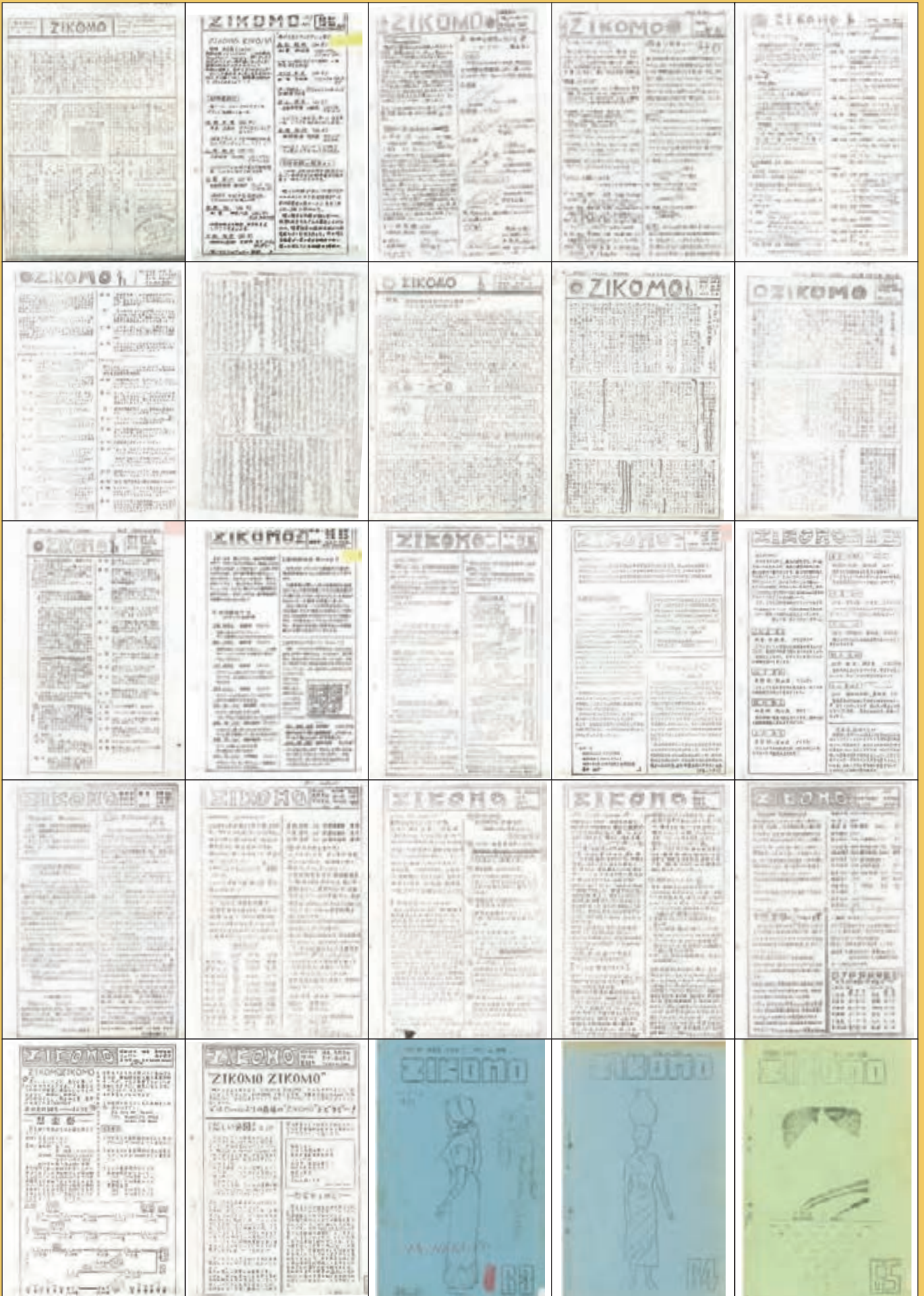
隊員機関誌 『ZIKOMO』

隊員間の情報共有・交換、親睦を目的として、隊員の編集による隊員機関誌『ZIKOMO』を発行していました。残念ながらJICAマラウイ事務所内には全号揃っておらず、わかる範囲となってしまいましたが、簡単に歴史を辿ってみました。

1973年5月にA4用紙1枚に手書き、縦書きで発行。「Kasungu地方編集局、編集長1名、記者1名、出版局1名、すべて家内制手工業のささやかな編集局」として設立されたとあります。1976年4月25号辺りからページ数が10ページ程に増加。52号以降 1980年辺りから、カラー厚紙への印刷に。70号代辺りからページ数50ページ前後に増加。1984年11月 81号より、一部、ワープロ打ちの原稿となる。1990年5月、第100号発行。100号

台になってから雑誌の体裁となり、ページ数も100ページを超えるように。140ページの号もあり。JICAマラウイ事務所内にあるのは、2004年9月発行の137号までです。その後、2010年代に電子版のE-ZIKOMOとなり、ネット上での情報共有・交換の場となっていましたが、現在はE-ZIKOMOも発行されておらず、SNSなどを通じた情報交換が主流となっているようです。









HISTORY

協力隊マラウイ派遣の

歴史

マラウイへの協力隊派遣は、1965年の青年海外協力隊発足・初派遣から6年後、世界で13番目であり、サブサハラ・アフリカ地域では、ケニア、タンザニア、ザンビアに次ぐ4番目の派遣国です。

初代隊員がマラウイに降り立ったのは1971年8月、昭和46年度1次隊、漁業統計2名、ラジオ製作2名、測量3名の7名でした。以来、マラウイには2021年11月現在、1,897名（男性1,091名、女性806名）の隊員が派遣され、累計派遣数は世界一となっています。中でも、保健・医療、教育、農業分野に多くの隊員を派遣し、職種別では、理科教育・数学教育、看護師・助産師・保健師、村落開発・コミュニティ開発が上位を占めています。

マラウイへの隊員派遣の特徴として、教育分野では特に理数科分野の派遣が多いことが挙げられます。また、世界でも珍しい事例として、配属先に国際機関のWFP(国連世界食糧計画)があり、これまで10名の隊員が派遣されています。さらに、1984年～1998年にかけて医師が計7名派遣されたのも特筆すべき実績となっています。

年代的な特徴としては、1980年代までは、土木建築、保健衛生、教育文化分野への派遣が多く、中央部、南部への派遣が多数を占めていましたが、1990年代から北部への派遣が増加しました。

マラウイでは活動地域や分野が幅広く、複数名の隊員によるプロジェクトやグループ型派遣も多く実施されてきました。古くは1974年からのオニテナガエビ養殖プロジェクトに始まり、マゴメロ農場プロジェクト、ロビ地区適正園芸技術普及計画(※マラウイ唯一の「チーム派遣」)など、隊員同士による連携活動が相乗効果をあげました。

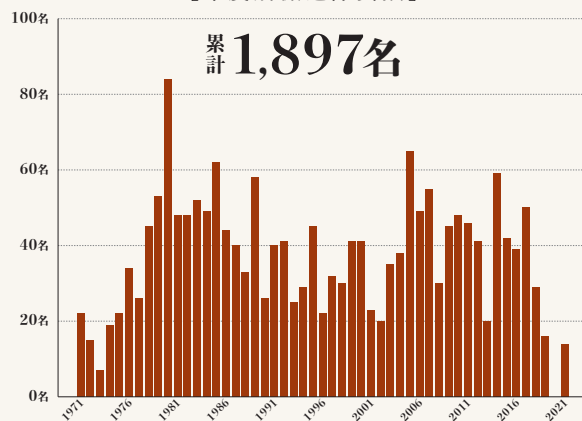
また、JICA技術協力プロジェクトと協力隊の連携も積極的に推進されてきました。OVOP(一村一品)プロジェクト支援では、隊員

がマラウイ各地に派遣され、コミュニティの小規模ビジネスグループと共に、パオパブオイル製品、食用油、石鹸などの商品作りや販売に携わり、現地住民の収入向上に貢献しました。また、病院運営改善(5S-KAIZEN-TQM普及)プロジェクトでは、2009年より対象医療機関への隊員派遣が開始され、首都の中央病院を始め、県病院及び傘下のヘルスセンターへ順次、隊員を派遣し、5S-KAIZENの普及を支援し成果をあげてきました。

分科会活動も活発で、保健・医療、教育、農業など定期的に各分科会を開催し、分野毎の情報共有・交換を通して、問題解決や活動の活性化を図ってきました。

任期終了後もマラウイと関わり続けている元協力隊員(以下「OV」と表記)が非常に多いのも大きな特徴です。マラウイに戻ってくる人も多く、JICA専門家、NPOやNGOの専門家、コンサルタント等としてプロジェクトで活躍された／活躍中のOVが多数います。他にも、マラウイで起業されたOVの方々、マラウイで保育園を立ち上げたOV等、枚挙に暇がありません。JICAマラウイ事務所に事務所長、医療調整員(現健康管理員)、ボランティア調整員、企画調査員として派遣されたOVもおられます。また、東京2020オリンピック・パラリンピックでは、群馬県太田市がマラウイのホストタウンとなりましたが、同市で学校の先生として勤務するOV2名(内1名は当時、マラウイ派遣中)が、太田市とマラウイで連絡を取り合い、共に奔走し実現したものです。また、日本や世界各地にいながらも、配属先カウンターパートやスタッフ、生徒たちと連絡を取り続けているOVの方々も多数います。マラウイ産コーヒー、チャレンジ製品の販売などのビジネスを

[年度別派遣隊員数]



通してマラウイ支援を続けたり、アフリカンベーカリーカフェを起業し定期的に開発教育の場を創出・提供したりと、OVの活躍は多彩です。1983年に、帰国隊員のOV会(ムリブワンジ会)を発展解消させる形で日本マラウイ協会が設立されており、日本とマラウイ両国間の理解を深め、文化、スポーツ、経済、科学技術等の協力を通じ、相互の繁栄に寄与することを目的として、幅広い年代のOVが活動に参加しています。

また、歴代の隊員OVは、世界中、各方面で目覚ましい活躍をしています。専門分野で国際協力に尽力しJICA理事長賞を受賞された方が複数名いらっしゃいます。世界各国で、数多くのOVが、大使館、国連・国際機関(UNHCR、WFP、UNDP、UNV、OECD等)、NPOやNGO等で勤務されています。国際的な企業での海外駐在や国外での起業で活躍しているOVも少なくありません。日本国内でも、大学の先生になられたOVの方々、区議会議員、地域おこし協力隊等々、数え上げたらきりがないほどです。成田空港でコロナ対応をされている厚生労働技官、検疫官の中にもマラウイOVがおられます。

他に、親と子、大学の先生と教え子の両方がマラウイ隊員という事例もあり、1,897とおりのエピソードです。

こうして初代隊員派遣以来、中断することなく協力隊が派遣されてきたマラウイでしたが、2020年3月、新型コロナウイルスの感染拡大により、派遣中隊員は避難帰国を余儀なくされました。その後、1年余りの中断を経て、2021年6月に派遣再開に至りました。

協力隊員がマラウイ各地において様々な分野で地域の人々と共に社会の発展に尽くしてきた功績と、両国の友好に果たしてきた役割は高く評価されています。協力隊マラウイ派遣は、50年の歴史の上に、今年、新たなスタートを切りました。

マラウイ協力隊年表

マラウイの主な出来事	協力隊の主な出来事
英国保護領	1891
ローデシア・ニヤサランド連邦	1953
7月6日 マラウイ 英国より独立 元首 英国女王 カムズ・バンダ首相 同時に日本政府承認 (在ケニア大使館兼轄)	1964
	1965 ● 青年海外協力隊事業派遣開始 【協力隊事業全般】
共和制に移行 カムズ・バンダ大統領 マラウイ議会党による一党制	1966
南アフリカ、台湾と国交樹立	1967
カムズ・バンダ終身大統領に	1971 ● 7月 協力隊調整員事務所 ブランタイヤに開設 8月 マラウイへの協力隊派遣開始 S46-1(漁業統計2、ラジオ製作2、測量3)派遣/S46-2(建築設計2、道路設計1、電気工事1、水道工事2、建設機械2、車両整備4)派遣
	1972 ● 6月25日「建築設計」隊員が交通事故によりご逝去(Design Dept. Lilongwe) S46-3(土質検査2、電気工事1)派遣/S47-1(道路設計4、測量1、建築設計3)派遣/S47-2(看護婦6、測量1)派遣
	1973 ● S48-1後(測量2)派遣
	1974 ● オニテナガエビ養殖プロジェクト 教師隊員派遣開始 S48-2前(車両ディーゼル4、自動車整備1)派遣/S49-1前(看護婦2、野菜栽培1、淡水養魚1)派遣/S49-1後(高校教師1、農地利用技師1、養鶏1、映画編集1、看護婦1、土木技師1)派遣
首都移転 ゾンバからリロングウェに	1975 ● 青年海外協力隊 発足10周年 【協力隊事業全般】 S49-2前(土木技術者2、自動車整備2、無線通信2、高校教師2、看護婦1)派遣/S49-2後(測量1、機械整備2、都市計画1、看護婦2)派遣/S50-1前(高校教師2、自動車整備1、自動車電装1)派遣/S50-1後(構造設計1、自動車整備1、溶接1、道路設計1、ラジオ・テレビ修理1、桑栽培1、秘書1)派遣/S50-2前(看護婦2、高校教師2、土質検査1、建設機械1)派遣
	1976 ● 7月11日「助産婦」隊員が交通事故により ご逝去(Mua Mission Hospital) 農業隊員派遣開始 S50-2後(測量2、看護婦2、構造設計1、高校教師3)派遣/S51-1前(高校教育2、養殖1、野菜園芸1、桑栽培1、測量1、助産婦1、建設機械1)派遣/S51-1後(高校教育1、建設設計1、搬送・無線1、助産婦5、映画編集1、テレックス1)派遣
	1977 ● S51-2前(冷凍機器・空調2、測量1、土木2、自動車整備1、理数科教師2)派遣/S51-2後(看護婦2、統計1、家畜飼育1、理数科教師2、自動車整備1)派遣/S52-1前(養鶏1、看護婦2、土木1、農業土木2)派遣/S52-1後(上下水道1、建築1、化学製品1、自動車整備1)派遣
	1978 ● S52-2前(自動車整備3、土木設計1、測量2、配管1、家政1、理数科教師1)派遣/S52-2後(冷凍機器1、建設機械1、船舶機関1、土木設計1、看護婦4、理数科教師2、木工1)派遣/S53-1前(園芸作物1、農業土木1、測量1、看護婦3、秘書1、理数科教師2)派遣/S53-1後(農業土木1、冷凍機器・空調1、自動車整備1、テレックス1、測量1、建築1、看護婦5、理数科教師3)派遣
	1979 ● 臨床検査技師、システムエンジニア隊員 派遣開始 7月1日「建設機械」隊員がマラリアにより ご逝去(P.V.H.O. Mangochi) 鯉養殖、ニジマス養殖プロジェクト開始 S53-2前(養鶏1、電子機器1、自動車整備1、建築1、看護婦3、薬剤師1、映画1、理数科教師2)派遣/S53-2後(冷凍機器1、建設機械2、自動車整備3、無線通信機1、土木設計2、建築2、助産婦2、臨床検査技師1、薬剤師1)派遣/S54-1(冷凍機器1、看護婦2、統計1、理数科教師3)派遣/S54-2(家畜飼育1、電子機器1、自動車整備2、無線通信機1、土木設計1、看護婦1、臨床検査技師2、薬剤師2、プログラマー1、理数科教師2)派遣/シニア隊員(溶接1)派遣
	1980 ● S54-3(自動車整備3、船舶機関1、養鶏1、助産婦1、栄養士1、建築1、測量1、土質検査1、養殖1、理数科教師4、婦人子供服1)派遣/S54-4(土木設計1、建設機械1、冷凍機器1、電気機器1、保健婦2、看護婦2、配管2、測量1、理数科教師2、秘書1、司書1、作業療法士1、診療放射線技師1)派遣/S55-1(理数科教師5、建設機械1、紳士服1、建築1、測量1、助産婦1)派遣/S55-2(塗装1、診療放射線技師1、測量1、テレックス1、自動車整備2、冷凍機器1、助産婦3、看護婦1、理数科教師1)派遣
	1981 ● 森林経営隊員派遣開始 S55-3(野菜1、農業土木1、自動車整備2、無線通信機1、土木設計1、測量1、建築1、理数科教師2、看護婦1)派遣/S55-4(建設機械1、自動車整備5、測量1、建築2、理数科教師11、臨床検査技師3、看護婦2、助産婦2、保健婦3)派遣/S56-1(薬剤師2、電子計算機1、臨床検査技師1、理数科教師3、自動車整備1、電気機器1、建設機械1、建築1、森林経営2)派遣/S56-2(理数科教師7、森林統計1、電気工事1、土木施工1、助産婦2、プログラマー1)派遣
	1982 ● 歯科医師隊員派遣開始 S56-3(測量2、農業土木3、工作機械1、自動車整備3、無線通信機2、家畜飼育1、電気工事2、建築3、農業土木1、電話交換機1、土木設計1、秘書1、家政1)派遣/S56-4(土質検査1、配管1、建築1、歯科医師1、診療放射線技師1、理数科教師4、臨床検査技師2、栄養士1、看護婦1、司書1)派遣/S57-1(電気機器2、自動車整備2、製材1、養鶏1、土木設計1、電気工事1、理数科教師2、船舶機関1、森林経営1、測量1、保健婦2、図学1、栄養士1)派遣/S57-2(上下水道設計1、理数科教師2、製材1、助産婦2、看護婦1)派遣

マラウイ協力隊年表

マラウイの主な出来事		協力隊の主な出来事
リロングウェ カムズ国際空港開港 (円借款)	1983	<p>隊員派遣人数3か年倍増計画開始 【協力隊事業全般】</p> <p>S57-3(理数科教師3、図学1、自動車整備2、歯科医師1、助産婦1、看護婦2、薬剤師1)派遣/S57-4(歯科医師1、診療放射線技師2、土木設計1、自動車整備1、理数科教師1、看護婦2、保健婦1、臨床検査技師2)派遣/S58-1(測量1、理数科教師12、看護婦1、保健婦1、助産婦1)派遣/S58-2(建設機械1、塗装1、自動車整備2、テレックス1、プログラマー1、薬剤師1、助産婦1)派遣</p>
マラウイ湖国立公園が ユネスコ世界遺産に	1984	<p>医師隊員派遣開始</p> <p>S58-3(自動車整備3、測量1、無線通信機1、農林統計1、電気工事1、電話交換機1、臨床検査技師2、看護婦1、秘書1、栄養士1)派遣/S58-4(医師1、測量1、工作機械1、冷凍機器1、電気工事1)派遣/S59-1(理数科教師5、電子計算機1、自動車整備1、家畜飼育1、森林経営1、養鶏1、建築1、建設機械1、農業土木1、診療放射線技師1、保健婦1、助産婦1、司書1)派遣/S59-2(溶接1、無線通信機1、自動車整備1、建築1、臨床検査技師1、診療放射線技師1、家政1)派遣</p>
	1985	<p>青年海外協力隊 発足20周年 【協力隊事業全般】</p> <p>11月21日 タンザニアにてバス事故により隊員6名(内、マラウイ隊員5名、ザンビア隊員1名)ご逝去</p> <p>「電子計算機」(Testing Board Zomba) 「保健婦」(Zomba General Hospital Zomba) 「溶接」(Zomba Training Center Zomba) 「建築」(M.o.W.S. Lilongwe) 「臨床検査技師」(Bilharzia Control Project Salima)</p> <p>S59-3(歯科医師1、土木設計1、航海術1、自動車整備1、測量2、森林経営1、助産婦8、薬剤師2、臨床検査技師2)派遣/S60-1(野菜1、医療器械1、自動車整備4、測量2、電気工事2、森林経営1、無線通信機1、診療放射線技師2、助産婦5、臨床検査技師1、秘書1、栄養士1、薬剤師1)派遣/S60-2(土木設計1、工作機械1、塗装2、家畜飼育1、システムエンジニア1、自動車整備4、船舶機関1、テレックス1、無線通信機1、歯科医師1、冷凍機器1、養鶏1、土木設計1、電話交換機1、臨床検査技師1、栄養士1、助産婦2)派遣</p>
	1986	<p>3月1日 「塗装」隊員がマラリアによりご逝去 (P.V.H.O. Blantyre)</p> <p>4月1日 協力隊駐在員事務所が JICA事務所に</p> <p>S60-2(歯科医師1)派遣/S60-3(建設機械1、自動車整備2、診療放射線技師1、土質検査1、電子計算機1、電気工事2、無線通信機1、建築1、保健婦2、助産婦2、家畜飼育1、司書1)派遣/S61-1(溶接1、森林経営1、電気工事1、診療放射線技師1、建築1、医師1、果樹1、農業土木2、上下水道設計1、無線通信機2、養鶏1)派遣/S61-2(自動車整備1、測量1、搬送1、無線通信機1、臨床検査技師2、森林経営1、助産婦2、家政1、写真1、薬剤師2、鉱業1、農林統計1、建設設計1)派遣</p>
	1987	<p>マゴメロ農場プロジェクト ミコロングウェ養鶏、家畜飼育プロジェクト</p> <p>S61-3(医師1、薬剤師2、野菜1、臨床検査技師2、助産婦2、冷凍機器1、システムエンジニア1、自動車整備1、秘書1、測量1、皮革工芸1)派遣/S62-1(獣医師1、栄養士1、土質検査1、自動車整備1、測量1、建築製図1、経済1、無線通信機1、婦人子供服1、助産婦1)派遣/S62-2(自動車整備3、ポンプ1、電子工学1、獣医師1、システムエンジニア1、家畜飼育2、理学療法士1、工作機械1、測量1、建築1、臨床検査技師1、電子機器1)派遣</p>
モザンビークから大量の難民流入	1988	<p>S62-3(保健婦1、電話交換機1、助産婦2、司書1、家畜飼育1、視聴覚機器1、臨床検査技師1、栄養士1、診療放射線技師1、建築1、自動車整備2、システムエンジニア1)派遣/S63-1(助産婦7、建築設計1、薬剤師2、電気機器1、無線通信機1、自動車整備1)派遣</p>
9月 在ザンビア大使館兼轄に変更	1989	<p>2月 JICA事務所首都リロングウェに移転</p> <p>5月4日 「電気機器」隊員が交通事故によりご逝去 (Water Dept. Lilongwe) 体育隊員派遣開始</p> <p>S63-2(助産婦3、電子計算機1、秘書1、映画1、浄水場機械1、印刷1、無線通信機1、電気工事1、塗装1、写真1、森林経営1、測量1、自動車整備2、養鶏1、電子機器1、電気機器1、溶接1)派遣/S63-3(在庫管理1、森林経営1、臨床検査技師2、土木施工1、栄養士1、システムエンジニア1、薬剤師1、助産婦2、医師2、医療機器1、保健婦1、歯科医師1、自動車整備1、体育1、鉱業1)派遣/H元-1(薬剤師1、土木設計1、保健婦1、臨床検査技師1、助産婦5、写真1、航海術1、婦人子供服1、無線通信機1、薬剤師1、歯科医師1)派遣/H元-2(土木施工1、電子機器1、農業土木1、助産婦1、システムエンジニア1、工作機械1、水質検査1、自動車整備1、栄養士1、測量1、無線通信機1、臨床検査技師1)派遣</p>
	1990	<p>青年海外協力隊 発足25周年 【協力隊事業全般】</p> <p>7月9日 「助産婦」隊員が飛行機事故によりご逝去 (St.Martins Hospital, Malindi)</p> <p>H元-3(建築1、電話交換機1、土質検査1、船舶機関1、経済1、野菜1、建築製図1、システムエンジニア1、測量1、栄養士1、助産婦1)派遣/H2-1(経済1、建築設計1、電気機器1、農業土木1、システムエンジニア2、自動車整備2、理学療法士1、薬剤師1、家畜飼育1)派遣/H2-2(印刷1、冷凍機器1、電気工事1、ポンプ1、木工1、電子機器1、薬剤師1、獣医師1、作業療法士1、臨床検査技師1)派遣</p>
	1991	<p>11月 JICA事務所現地職員Ms.Verity Jere 帰国隊員招待で訪日</p> <p>H2-2(建築1)派遣/H2-3(鉱業1、臨床検査技師2、印刷1、家畜飼育2、自動車整備1、溶接1)派遣/シニア(歯科医師1)派遣/H3-1(農林統計1、薬剤師3、森林経営1、野菜2、歯科医師1、獣医師1、無線通信機1、手工芸1、婦人子供服1)派遣/H3-2(写真1、自動車整備1、建築1、映像1、果樹1、電子機器1、医療機器1、臨床検査技師1、測量2、浄水場機械1、電気工事1、栄養士1、森林経営1、保健婦1、医師1)派遣</p>
2月 駐日マラウイ大使館開設	1992	<p>9月 チェロ語講師カパロ氏 総務省「外国青少年指導者招聘事業」で訪日</p> <p>H3-3(養鶏1、歯科医師1、自動車整備2、栄養士1、航海術1、電話交換機1、無線通信機1、工作機械1、生態調査1、臨床検査技師2、薬剤師2、システムエンジニア1、建築1、理学療法士1、水質検査1)派遣/H4-1(電気機器1、鉱業1、地質調査1、看護婦1、システムエンジニア1)派遣/H4-2(船舶機関1、視聴覚機器1、理数科教師1、土木施工1、養鶏1、自動車整備1、栄養士1、薬剤師5、システムエンジニア1、看護婦2、臨床検査技師1)派遣</p>
6月 国民投票により 複数政党制へ移行 終身大統領終了 10月 チマンゴ大蔵相訪日 (TICAD I出席)	1993	<p>H4-3(溶接1、印刷1、土木設計1、作業療法士1、自動車整備1、土木施工1、工作機械1、システムエンジニア1、臨床検査技師1)派遣/H5-1(建築設計1、都市計画1、森林経営1、獣医師1、木工1、婦人子供服1)派遣/H5-2(自動車板金1、電子機器1、生態調査1、薬剤師4、婦人子供服1、システムエンジニア1)派遣</p>

マラウイ協力隊年表

マラウイの主な出来事		協力隊の主な出来事
5月 大統領・国会議員選挙 バキリ・ムルジ大統領誕生 小学校学費無料化	1994	<p>H5-3(野菜1、自動車整備1、家畜飼育1、システムエンジニア1、生態調査1、理学療法士1、栄養士2、獣医師1)派遣/H6-1(電話交換機1、理学療法士1、理数科教師1、農業土木1、薬剤師2、家畜飼育1、写真1、建築1、保健婦1)派遣/H6-2(自動車整備1、航海術1、工作機械1、理数科教師1、生態調査1、医療機器1、土壌肥料1、理学療法士1、薬剤師1)派遣</p>
	1995	<p>1月 二本松青年海外協力隊訓練所始動 【協力隊事業全般】</p> <p>青年海外協力隊 発足30周年 【協力隊事業全般】</p> <p>H6-3(システムエンジニア2、電気工事1、土木設計1、無線通信機1、薬剤師2、溶接1、自動車整備2、印刷1、臨床検査技師1、歯科医師1、手工芸1)派遣/H7-1(理数科教師2、養鶏1、自動車整備3、森林経営1、建築1、臨床検査技師1、体育1、電気機器1、養鶏1、薬剤師1、栄養士1、地質調査1、看護婦1)派遣/H7-2(獣医師1、薬剤師1、栄養士1、地質調査1、生態調査1、自動車整備1、工作機械1、医師1、果樹1、電気機器1、理数科教師1)派遣</p>
	1996	<p>H7-3(生態調査1、栄養士2、作業療法士1、システムエンジニア1、司書1、臨床検査技師2、薬剤師1、婦人子供服1、獣医師1)/H8-1(薬剤師2、測量1、自動車整備1、写真1)派遣/H8-2(建築1、理学療法士1、土木施工1)派遣</p>
	1997	<p>シニア短期緊急派遣(無線通信機1、理学療法士1)派遣/H8-3(野菜2、無線通信機1、コンピューター技術1、自動車整備1、歯科医師1、農業土木1、溶接1、薬剤師2、家畜飼育1、婦人子供服1)派遣/H9-1(理数科教師2、獣医師1、建築1、養殖1、自動車整備1、電話交換機1、理学療法士1、土壌肥料1、森林経営1)派遣/H9-2(電気工事1、獣医師1、理数科教師1、薬剤師4、栄養士1、バスケットボール1)派遣</p>
10月 チルンバ大蔵相訪日 (TICAD II出席)	1998	<p>村落開発普及員派遣開始</p> <p>ロビ地区適正園芸技術普及計画開始 (1998年～2006年)</p> <p>H9-3(作業療法士1、自動車整備1、薬剤師2、婦人子供服1、村落開発普及員1、臨床検査技師1、理学療法士1、獣医師1)派遣/H10-1(無線通信機1、自動車整備1、電気機器1、生態調査1、理数科教師1、司書1、果樹1、栄養士1)派遣/H10-2(薬剤師2、システムエンジニア2、生態調査1、理数科教師1、地質調査1、獣医師1、家畜飼育1、保健婦(士)1、村落開発普及員1)</p>
6月 大統領・国会議員選挙 バキリ・ムルジ大統領再選	1999	<p>5月19日 リロングウェ在住OVがマラリアにより逝去(62-2 自動車整備)</p> <p>H10-3(薬剤師3、電気機器1、自動車整備1、測量1、臨床検査技師1、サッカー1、理学療法士2、家畜飼育1、システムエンジニア1、手工芸1、航海術1)派遣/H11-1(病虫害1、獣医師2、果樹1、土壌肥料1、建築1、野菜2、理数科教師2、文化人類学1)派遣/H11-2(システムエンジニア1、野菜1、養殖1、臨床検査技師2、薬剤師1、サッカー1、理数科教師3、理学療法士1、森林経営1、観光業1、自動車整備1)派遣</p>
	2000	<p>1月28日 「理学療法士」隊員が交通事故により逝去(Q.E.C.H. Blantyre)</p> <p>H11-3(自動車整備2、理学療法士1、野菜1、薬剤師4、臨床検査技師2、工作機械1、建築1、農業土木2)派遣/H12-1(映像1、作業療法士1、薬剤師3、自動車整備1)派遣/H12-2(理数科教師3、染色1、自動車整備1、建築2、手工芸1、養殖1、システムエンジニア2、保健婦1)派遣</p>
	2001	<p>H12-3(バスケットボール1、数学教師1、薬剤師1、鉱業1、稲作1、生態調査1、理学療法士1、社会学1)派遣/H13-1(野菜2、家畜飼育1、自動車整備1、システムエンジニア1、理数科教師1、生態調査1、土壌肥料1、果樹1、病虫害1)派遣/H13-2(家畜飼育1、理数科教師2)派遣</p>
	2002	<p>シニア海外ボランティア(SV)マラウイへの派遣開始(2018年までに累計50名)</p> <p>全マラウイ隊員 バキリ・ムルジ大統領にMtunthama State Lodgeにて拝謁</p> <p>シニア(プログラムオフィサー1)派遣/H13-3(自動車整備1、理数科教師1)派遣/H14-1(理数科教師2、農業土木1、体育1、獣医師1、生態調査1、野菜1、家畜飼育1)派遣/SV(船舶行政・訓練機材保守1、理数科教育アドバイザー1)派遣/H14-2(作業療法士1、薬剤師1、養殖1、婦人子供服1、理数科教師1)派遣</p>
9月 バキリ・ムルジ大統領訪日 (TICAD III出席)	2003	<p>1月 小泉首相、施政方針演説で「マラウイ理数科隊員」に言及</p> <p>シニア短期緊急派遣(プログラムオフィサー1)派遣/H14-3(家畜飼育2、建築1、公衆衛生1、コンピューター技術2、村落開発普及員1、自動車整備1、理数科教師3、薬剤師1)派遣/H15-1(理数科教師5、看護婦1、果樹1、コンピューター技術1)派遣/SV(太陽光発電システム管理1)派遣/H15-2(村落開発普及員4、コンピューター技術2、理数科教師3、果樹1、自動車整備1、看護婦1)派遣</p>
5月 大統領・国会議員選挙 ピング・ワ・ムタリカ大統領就任	2004	<p>1月 JICA事務所移転、現在の建物にエイズ対策隊員派遣開始</p> <p>H15-3(看護婦3、養鶏1、村落開発普及員5、薬剤師1、コンピューター技術2、野菜1、自動車整備1、理数科教師1、エイズ対策1)派遣/H16-1(プログラムオフィサー2)派遣/H16-2(体育2、稲作1、エイズ対策1、看護婦3、臨床検査技師1)派遣/一般短期(理数科教師1)派遣/H16-3(稲作1、自動車整備1、家畜飼育1、臨床検査技師1、コンピューター技術1、理数科教師2)派遣</p>
	2003	<p>青年海外協力隊 発足40周年 【協力隊事業全般】</p> <p>JOCA ムジンバ農民自立支援プロジェクト開始(2005年～2017年)</p> <p>10月 JICA「一村一品技術協力プロジェクト」開始、JICA専門家に加え、協力隊員(デザイン、村落開発普及員、食品加工)も派遣</p> <p>シニア短期(プログラムオフィサー1)派遣/一般短期(理数科教師1)派遣/バックアップ4名派遣/H16-3(コンピューター技術3、家畜飼育1、理数科教師2、AV機器1、栄養士1、観光業1、公衆衛生1)派遣/一般短期(柔道1、プログラムオフィサー1)派遣/H17-1(体育1、エイズ対策1、看護婦3、臨床検査技師1)派遣/一般短期(理数科教師1)派遣/H17-2(稲作1、野菜1、果樹1、稲作1)派遣/一般短期(婦人子供服1、家畜飼育1)派遣/SV(太陽光発電1、木工1)派遣/H17-3(理数科教師5、栄養士1、村落開発普及員3、青少年活動3、野菜2、幼稚園教諭1、プログラムオフィサー1、コンピューター技術1、婦人子供服1)派遣</p>

マラウイ協力隊年表

マラウイの主な出来事		協力隊の主な出来事
<p>チゴンゴニ石画世界遺産登録 3月 ビング・ワ・ムタリカ大統領訪日</p>	<p>2006</p>	<p>TVマラウイで長谷シニア隊員『サイエンスマン』放映 山田隊員、HIV-AIDS予防啓発ソング『Ndimakukonda』ヒット ※詳細は特集1をご参照ください。▶P.90</p> <p>SV短期(視学官1)派遣/SV短期(モニタリング評価1)派遣/H17-3(コンピューター技術1、AV機器1、家畜飼育1、デザイン1、青少年活動1、野菜2、薬剤師1、自動車整備1、村落開発普及員1、果樹1)派遣/一般短期(村落開発普及員1)派遣/SV(コンピューター技術1、建設機械2、農産品加工機械1)派遣/SV短期(非金属鉱物資源1)派遣/H18-1(村落開発普及員1、エイズ対策2、植林1、理数科教師1、果樹1)派遣/一般短期(家畜飼育2、自動車整備1)派遣/H18-0(体育3、看護師1、エイズ対策2、村落開発普及員4、理数科教師1、コンピューター技術2、薬剤師1、青少年活動1、家政1、保健師1)派遣/SV(コンピュータネットワーク1)派遣</p>
	<p>2007</p>	<p>H18-2(コンピューター技術2、食用作物・稲作1、エイズ対策1、看護師2、青少年活動1)派遣/一般短期(臨床検査技師1、村落開発普及員1)派遣/SV短期(農産物加工1)派遣/H18-3(コンピューター技術2、村落開発普及員3、理数科教師1、栄養士1、木工1)派遣/SV(品質管理1、医療機器保守1)派遣/SV短期(非金属鉱物資源1)派遣/H19-1(小学校教諭1、理数科教師3、公衆衛生1、野菜1、村落開発普及員1、果樹1、コンピューター技術1、エイズ対策3)派遣/一般短期(プログラムオフィサー1、柔道1)派遣/SV短期(建設機械運転指導1)派遣/H19-2(理数科教師3、青少年活動1、エイズ対策1、栄養士1、食用作物・稲作1、村落開発普及員2、幼児教育1、家畜飼育1、PCインストラクター1)派遣/一般短期(プログラムオフィサー1)派遣</p>
<p>在マラウイ日本国大使館開設 1月 台湾と国交断絶、中華人民共和国に移行 5月 ビング・ワ・ムタリカ大統領、チャボンダ外相訪日(TICAD IV出席) 12月 ジョイス・バンダ外相訪日</p>	<p>2008</p>	<p>12月 バンダ外相から協力隊初代隊員らに感謝状</p> <p>H19-2・3(義肢装具士・製作者1、衛生工学1、野菜2、家畜飼育2、薬剤師1、青少年活動1、体育1)派遣/SV(品質検査1)派遣/H19-3・4(プログラムオフィサー1、家畜飼育2、理数科教師3、青少年活動1、エイズ対策1、デザイン1、村落開発普及員1、自動車整備1、食品加工1)派遣/一般短期(エイズ対策2)派遣/SV短期(VCTアドバイザー2、地質調査1)派遣/H20-1(野菜1、農業土木1、コンピューター技術1、家畜飼育1、理数科教師1、建築1)派遣/一般短期(プログラムオフィサー1)派遣/H20-2(村落開発普及員1、陶磁器1、エイズ対策1、村落開発普及員2、エイズ対策1)派遣/SV(農産品加工機械1)派遣/一般短期(プログラムオフィサー1)派遣</p>
<p>5月 大統領・国会議員選挙 ビング・ワ・ムタリカ大統領再選</p>	<p>2009</p>	<p>ムジンバ南部HIVプロジェクト</p> <p>H20-3(家畜飼育1、小学校教諭1、村落開発普及員1、理数科教師1、放送技術設備1)派遣/SV(太陽光発電1)派遣/H20-4(青少年活動1、木工1、果樹1、村落開発普及員2、理数科教師1)/SV(建設機械整備1)派遣/H21-1(村落開発普及員1、小学校教諭1、理数科教師1、柔道1)派遣/一般短期(プログラムオフィサー1、看護婦1)派遣/SV短期(農産物加工1)派遣/H21-2(家政1、エイズ対策2、理数科教師1、栄養士1、青少年活動1)派遣/SV(医療機器保守整備1)派遣</p>
<p>7月 国旗デザイン変更</p>	<p>2010</p>	<p>自治体連携 宮城県職員をデッサ県灌漑事務所に派遣(2016年までに農業土木隊員 累計3名)</p> <p>H21-3(村落開発普及員2、エイズ対策2、家畜飼育1、青少年活動1、デザイン1、幼児教育1、理数科教師1)派遣/SV短期(水質汚染防止1)派遣/一般短期(理数科教師1、コンピューター技術1、村落開発普及員1)派遣/H21-4(青少年活動3、エイズ対策1、村落開発普及員3、看護師1、陶磁器1、家畜飼育1、木工1、自動車整備1、PCインストラクター1)派遣/SV(地質調査1、自動車整備1、自動車電装1、建設機械整備1、コンピューター技術1)派遣/一般短期(看護師1、薬剤師1、公衆衛生1)派遣/H22-1(環境教育1、薬剤師1、野菜2、青少年活動3、理数科教師3、村落開発普及員1、養護1、栄養士1、観光業1、PCインストラクター1、エイズ対策1、農業土木1、行政サービス1)/H22-2(プログラムオフィサー1、コンピューター技術1、PCインストラクター1、理数科教師2、村落開発普及員1、看護師1、言語聴覚士1)派遣/一般短期(家畜飼育1、公衆衛生1)派遣</p>
<p>4月 ビング・ワ・ムタリカ大統領急逝 ジョイス・バンダ副大統領が大統領に就任 5月 国旗デザイン元に戻る</p>	<p>2011</p>	<p>マラウイ協力隊派遣40周年 8月24日 大統領官邸にて 大統領主催40周年祝賀会</p> <p>H22-3(エイズ対策2、食用作物・稲作1、理数科教師1、コンピューター技術1、家畜飼育2、村落開発普及員2、服飾1)派遣/SV(建設機械1)派遣/H22-4(建築1、栄養士2、コンピューター技術1、村落開発普及員1)派遣/一般短期(薬剤師1)派遣/H23-8・1(公衆衛生2、理数科教師3、エイズ対策1、村落開発普及員2、家畜飼育1、小学校教諭1)派遣/一般短期(村落開発普及員2)派遣/H23-2・8(体育1、青少年活動1、公衆衛生2、エイズ対策2、村落開発普及員1、コンピューター技術1、家畜飼育1、理数科教師1、映像1、栄養士2、果樹栽培1、理学療法士1、プログラムオフィサー1)派遣</p>
<p>5月 ジョイス・バンダ大統領訪日(TICAD V出席)</p>	<p>2012</p>	<p>H23-3(村落開発普及員5、エイズ対策2、野菜栽培1、理数科教師1、青少年活動1、家畜飼育1、デザイン1)派遣/一般短期(看護師1)派遣/H23-4(野菜栽培1、青少年活動1、自動車整備1、薬剤師1、家畜飼育1)派遣/H24-1(薬剤師1、野菜栽培2、理数科教師1、村落開発普及員4、青少年活動3、行政サービス1、言語聴覚士1、PCインストラクター1、エイズ対策1、観光業1、環境教育1、栄養士1、放送技術設備1)派遣/H24-2(理数科教師3、行政サービス1、理学療法士1、コンピューター技術1、家畜飼育1、PCインストラクター1、栄養士1)派遣</p>
<p>5月 ジョイス・バンダ大統領訪日(TICAD V出席)</p>	<p>2013</p>	<p>5月31日 TICADで訪日したジョイス・バンダ大統領のマラウイ協会歓迎会で山田OVが『Ndimakukonda』歌を披露</p> <p>H24-3(言語聴覚士1、村落開発普及員1、プログラムオフィサー1、看護師2、青少年活動1、理学療法士1、理数科教師2)派遣/SV短期(自動車電気装置整備1)派遣/H24-4(青少年活動1、栄養士2)派遣/H25-1(看護師3、農業土木1、コンピューター技術1、理数科教師1)派遣/H25-2(コミュニティ開発2、理科教育1、公衆衛生1、行政サービス1、家畜飼育1、感染症・エイズ対策1、マーケティング1)派遣/一般短期(コミュニティ開発1、公衆衛生1)派遣</p>

マラウイ協力隊年表

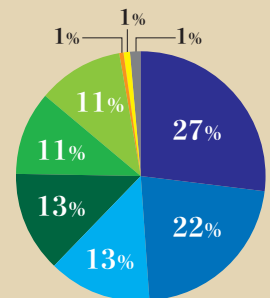
マラウイの主な出来事		協力隊の主な出来事
5月 大統領・国会議員選挙 ピーター・ムタリカ大統領選出	2014	<p>自治体連携 横浜市水道局職員を プランタイヤ水公社に派遣 (2020年までに上水道及び土木の短期隊員 累計20名)</p> <p>H25-3(デザイン1、数学教育1)派遣/一般短期(家政・生活改善1)派遣/SV(品質管理・生産性向上1)派遣/H26-1(青少年活動2、公衆衛生1、コミュニティ開発3、感染症・エイズ対策3、障害児・者支援1)派遣/SV(家畜飼育1)派遣/SV短期(コミュニティ開発1)派遣/一般短期(柔道1、公衆衛生1)派遣/H26-2(コミュニティ開発6、青少年活動8、林業・森林保全1、農業土木1、野菜栽培1、薬剤師1、栄養士1)派遣/一般短期(上水道1、コンピューター技術1)派遣/SV(放送技術・設備1、コンピューター技術1、土木1)派遣/SV短期(上水道2)派遣</p>
	2015	<p>青年海外協力隊 発足50周年 【協力隊事業全般】 12月 青年海外協力隊発足50周年記念行事 リロングウェにて開催</p> <p>H26-3(理学療法士2、コミュニティ開発9、青少年活動1、公衆衛生2、理科教育1、数学教育2、コンピューター技術1、看護師1)派遣/H27-1(看護師1、青少年活動5、コミュニティ開発4、林業・森林保全1、栄養士2)派遣/H27-2(コンピューター技術1、薬剤師2、理学療法士1、コミュニティ開発2、看護師1、公衆衛生1、理科教育1、青少年活動1)派遣/一般短期(上水道1)派遣/SV短期(上水道2)派遣</p>
8月 TICAD VI ナイロビにて開催 ゴンドウェ財務相出席	2016	<p>H27-3(理科教育2、言語聴覚士1、障害児・者支援1、コミュニティ開発2、看護師1、理学療法士1)派遣/H27-8(感染症・エイズ対策3、コミュニティ開発1、水質検査1、PCインストラクター1)派遣/一般短期(柔道1、感染症・エイズ対策1、PCインストラクター1)派遣/一般短期(柔道1、マーケティング1、看護師2、薬剤師1、小学校教諭1)派遣/一般短期(柔道1)派遣/2016-2(看護師2、青少年活動2、栄養士1、コミュニティ開発1、言語聴覚士1、障害児・者支援1、野菜栽培1)派遣/一般短期(上水道1)派遣/SV短期(上水道2)派遣</p>
	2017	<p>2016-3(理学療法士2、コミュニティ開発6、公衆衛生1、小学校教育1、看護師2、青少年活動1)派遣/一般短期(上水道2)派遣/SV短期(上水道2)派遣/2017-1(コミュニティ開発5、栄養士1、理科教育2、公衆衛生3、小学校教育8、感染症・エイズ対策3、青少年活動4)派遣/2017-2(行政サービス1、理科教育1、栄養士1、公衆衛生1、小学校教育1、看護師1、青少年活動2、感染症・エイズ対策1、コミュニティ開発1)派遣/一般短期(柔道1)派遣</p>
	2018	<p>ボランティア事業が改編され、 「JICA海外協力隊」と総称 【協力隊事業全般】</p> <p>2017-3(障害児・者支援1、柔道1、薬剤師1、PCインストラクター2、青少年活動1、小学校教育1、コミュニティ開発2)派遣/一般短期(言語聴覚士1)派遣/2018-1(理学療法士1、小学校教育2、薬剤師1、コミュニティ開発2、看護師2、PCインストラクター1、栄養士1、環境教育1、公衆衛生1、感染症・エイズ対策1、言語聴覚士1)派遣/一般短期(上水道3)派遣/SV短期(上水道1)派遣/2018-2(小学校教育3、理科教育2、PCインストラクター1、コンピューター技術2、病院運営管理1)派遣</p>
5月 大統領・国会議員選挙 ピーター・ムタリカ大統領 再選 8月 エヴァートン・チムリレンジ 副大統領以下大臣3名訪日 (TICAD VII出席)	2019	<p>8月 TICADで訪日したカサイラ外務・国際 協力相と理数科教師隊員2名が約40年 ぶりの再会。貝塚初代隊員にマラウイ 政府より感謝状</p> <p>2018-3(小学校教育1)派遣/2019-1(小学校教育1、コンピューター技術1、障害児・者支援1)派遣/2019-8(環境教育2、小学校教育2、理学療法士1)派遣</p>
憲裁判判決 「2019年大統領選挙結果無効」 6月 再選挙 ラザルス・チャクウェラ 大統領就任	2020	<p>3月 全隊員コロナ退避帰国</p> <p>2019-2(コミュニティ開発1、小学校教育2、コンピューター技術1、言語聴覚士1)派遣/一般短期(土木3)派遣</p>
	2021	<p>マラウイ協力隊派遣50周年 6月 隊員派遣再開 11月 50周年記念写真パネル展開催 大使館主催協力隊派遣50周年記念 レセプション</p> <p>2019-3(PCインストラクター1、公衆衛生1、薬剤師1)派遣/2021-1(小学校教育6、理科教育1、環境教育1)派遣/2021-7(言語聴覚士1)派遣/2021-2(理学療法士1、小学校教育1)派遣</p>

※主にマラウイ協力隊について記載。協力隊事業全体の出来事については【協力隊事業全般】とした。※マラウイ及び協力隊関連資料を参照、情報収集したものを年表編集者であるマラウイOVの視点でまとめました。※SV=シニア海外ボランティアの略

分野別派遣人数

合計 1,897名

■ 保健・医療	513名	■ 公共・公益事業	244名	■ 社会福祉	14名
■ 人的資源(教育)	415名	■ 計画・行政	209名	■ 商業・観光	13名
■ 鉱工業	257名	■ 農林水産	207名	■ その他	25名



2021年11月現在

50周年 関連行事

50周年イヤーの2021年、JICAマラウイ事務所では関連行事を実施しました。



ショッピングセンターの屋外スペースが会場



写真パネル展



オープニングの様子 写真中央：丹原所長、右隣：マレタ副局長



01 50周年記念 写真パネル展

11月12日～16日の5日間、首都の大型ショッピングセンターにて50周年を記念して写真パネル展を開催しました。オープニングでは、丹原所長の挨拶に続き、大統領・内閣府 人事管理・開発局のローズマリー・マレタ副局長から祝辞と50年にわたる協力隊の貢献に対する謝辞をいただきました。また、隊員4名も参加、コロナ禍で一時中断となった隊員派遣の再開をアピールしました。

パネル展では、1970年代～2020年までの約30点の写真を展示。保健、教育、コミュニティ開発、スポーツ（柔道、剣道）など各分野での活動の他、日本のお茶会や運動会等のグループ活動の紹介も行ないました。ショッピングセンターに買い物に来た多くの一般の

方々が展示に足を止め、様々な職種の隊員活動の様子に興味深そうに熱心に見入っていました。来場者から、JICA volunteers done great job. You are doing good job. We appreciate very much. など、感謝の言葉をたくさんいただきました。また、20年前、30年前に、理科や算数・数学を日本人（協力隊員）に教わったと、隊員の名前をフルネームで覚えていて思い出を語ってくれた国連機関の現地職員や会計士の方もいました。

写真パネル展には5日間で1,000名近くの来場者があり、普段は接点の少ないマラウイの一般の方々に広く協力隊の活動を知ってもらおう大変よい機会となりました。

02 協力隊派遣50周年記念レセプション(在マラウイ日本国大使館主催)

11月19日、大使館主催のレセプションが大使公邸にて開催されました。当日は、大統領・内閣府からチラバデ人事管理・開発局長官と経済局クウィンダニ副局長、メディア(新聞、テレビ、ラジオ)5社から11名、JICAマラウイ事務所からは丹原所長とボランティア調整員4名が参加しました。

チラバデ長官は、マラウイ政府は協力隊の献身と尽力を認識しており、協力隊員が活動したコミュニティや共に働いた人々によっても感謝されていると述べられました。また、レセプションでは、写真パネルの展示を行ない、参加者に協力隊の幅広い活動をご覧いただきました。



[左]談笑する(左から)岩切大使、丹原所長、チラバデ長官
[上]写真パネルに見入るメディアの方々

03 協力隊マラウイ派遣50周年 オンラインの集い (日本マラウイ協会主催、JICAマラウイ事務所共催)

11月13日、日本マラウイ協会と共催で、オンラインの集いを開催しました。

マラウイからは、JICAマラウイ事務所長挨拶、現地職員による座談会、派遣中隊員3名からの活動報告を行ないました。また、マラウイ剣道協会長からの祝賀メッセージ、写真パネル展の様子を録画し動画配信しました。





[上]9月、隊員連絡所での慰霊祭
[左]9月、新隊員9名による隊員慰霊碑の掃除

04 物故隊員12名の慰霊碑訪問と慰霊祭

- 5月19日 ムーア、マンゴチ、マリンディ ……参加者：和田所長、VC2名、NS
- 6月 1日 リロングウェ、ムチンジ……………参加者：左近充次長、VC2名、NS
- 6月22日 隊員連絡所での慰霊祭 ……参加者：丹原新所長、和田前所長、左近充次長、
2019-3 新隊員3名、VC 3名、NS 3名
- 7月12日 ムーア、マンゴチ、マリンディ ……参加者：2019-3 新隊員3名、VC、NS
- 9月 9日 リロングウェ、ムチンジ……………参加者：2021-1 & 7 新隊員9名、VC、NS
- 9月15日 隊員連絡所での慰霊祭 ……参加者：2019-3 隊員3名、2021-1 & 7 隊員9名、VC 4名
- 10月25日 ムーア……………参加者：2021-2 新隊員2名、VC2名、NS

※VC=Volunteer Coordinator、NS=National Staff



05 米国平和部隊(Peace Corps) オンラインイベントへの参加

5月27日、米国平和部隊が実施したオンラインイベントに参加し、マラウイにおけるJICA事業及び協力隊派遣事業についてプレゼンテーションを行ない、協力隊50周年をアピールしました。

06 JICAマラウイHP 50周年企画『思い出の一枚』

OVの皆様にリレー方式で隊次を廻りながらマラウイでの思い出を投稿していただき、4月から1年にわたって掲載していく企画です。以下のHPに掲載していますので、是非ご覧ください。

https://www.jica.go.jp/malawi/office/others/volunteer_50th/index.html >>>



マラウイ 隊員の今

2019年度3次隊の3名は、2021年6月に派遣、派遣再開後第1号の隊員です。

2021年度1次隊の8名は、2021年8月に派遣。2021年度7次隊の1名は、退避経験のある唯一の隊員です。2020年1月に派遣、同年3月にコロナ禍により退避帰国。日本での1年以上の待機を経て、2021年8月に再派遣となりました。

2021年度2次隊の2名は、2021年10月に派遣。

2021年11月現在、計14名の隊員が活動中です。



「現役隊員」

01

竹内 真理

2019年度 3次隊

PCインストラクター/リロングウェ/ムクウィチ中等学校



配属先に赴任後3か月がたちました。私の配属先は首都のリロングウェにあります。JICAの支援によって建てられた校舎が複数あり、隊員の受入れも私が3人目と、JICAと縁の深い学校です。配属先では、サイエンスパートの教員の一人として、現在は1年生のコンピュータの授業を受け持っています。

配属先の第一印象は、きれいな学校で教員・生徒数に共に多くにぎやかな学校だと感じました。コンピュータ室は想定していたよりもPCが稼働しており、現在設置されている31台のPCの多くは稼働しています。そのため、同僚のコンピュータの先生は1年生の授業からPCを使用した授業を展開されています。また、職員会議や職員同士の連絡網がしっかりしており、同僚の多くは教育に対して熱心な印象を受けます。一方で、コンピュータ室の管理についてはまだまだ課題があるのが現状です。建物が簡素なつくりのため、常に土埃が天井から降っており、また室内も雑然と様々なものが置かれているため、清掃が行き届かないのが現状です。その他にも、生徒による備品の破損や盗難等があるため、授業に必要なマウスなどの備品が不足することも珍しくありません。課題は山積しているものの、同僚と一緒に少しずつ環境の改善に取り組んでいきたいと考えております。

「現役隊員」

02

中根 菜生美

2019年度 3次隊

公衆衛生/ムジンバ/ムジンバ県南部病院



マラウイに到着してから約5ヶ月が経ち、毎日がとても早くて、日本との違いに日々驚かされ、良い経験をさせて頂いていると感じています。実際に赴任してからは、生活に慣れないことが多過ぎて、暮らしていけるか不安が大きかったのですが、現地の人達がいつも気にかけてくれて充実した日々を送ることができています。また、広大な自然の中で暮らしていると風景や夕陽、星がいつも綺麗でとても感動しています。配属先では主に乳幼児健診やコロナの予防接種のお手伝い等をさせて頂いており、5歳以下の子どもとその家族に関わりが多く、私みたいな知らない外国人がいても協力的で、職員の方々にはいつも助けられて学ぶことが多いです。

配属先や生活していく中でも、ほとんど現地語が使われているため苦戦していますが、わからないことがあるといつも笑顔で接してくれます。今後も健康・安全第一に過ごしていき、現地の人達のために少しでも役に立てたいです。

現役隊員

03

西村 亜希子

2019年度 3次隊

薬剤師 / ムスンドウェ / チャイルド・レガシー・インターナショナル



想像していなかった水道の通っていない任地Msundwe。毎日井戸に水汲み、桶で水浴び、穴だけのトイレの住居環境に最初は生活することだけで精一杯の毎日でした。でも水汲みのおかげで村のお母さん達との現地語チェワ語でのコミュニケーションの場ができ、頭の上での水の運び方、洗濯の仕方など色々教わったり。不便な事は多いけれどもそういった大変さを共有し、同じ目線で生活することで現地をより理解する機会と経験ができ、今はこの生活で良かったと感じています。配属先は地域のためのコミュニティ病院。コロナの影響を少なからず受けていて思い通りの活動が難しいと感じる面もありますが、活動開始から2か月が経ち、頼もしいスタッフに囲まれチェワ語でできる会話も少しずつ増えてきて、まずは良い環境作りが出来ていると思っています。一つでも、少しでも、私が活動したことで彼らにとって、病院にとって、患者にとって、良い方向に向かう手伝いが出来たとと言えるような活動をしていきたいと思っています。

現役隊員

04

尾崎 宏嗣

2021年度 1次隊

小学校教育 / ンサル / カプトゥ小学校



マラウイに来て2か月が経ちました。最初はたくさんの不安がありましたが、マラウイの人達の朗らかな人柄やマラウイの広大な自然にふれる中で、それらの不安も徐々に少なくなってきました。「日の出と共に起床し、日が暮れると就寝する」という穏やかな生活リズムの中で、私は日々を楽しんでいます。私の配属先であるKabuthu Primary Schoolは約1,300人の子ども達を抱える大規模な学校です。子ども達は明るく元気で、学習に対してとても前向きに取り組めます。先生達は教育熱心で、その熱意にいつも驚かされます。先生達からは、「子ども達の学力を伸ばし、マラウイの教育、そしてマラウイの将来をよりよくしていきたい」という熱い思いが伝わってきます。こんなマラウイの子ども達、先生達のために少しでも力になれるよう、協力隊での約1年半の活動に対して自分なりに、精一杯取り組んでいきたいと思っています。

現役隊員

05

田野辺 裕史

2021年度 1次隊

小学校教育 / スザ / スザ小学校



私は9月より任地カスング県スザ小学校で活動をしています。私の配属先のスザ小学校には、1年生から8年生まで、約1200名の生徒が在籍しています。スザ周辺の村に住む多くの生徒が通うことができている一方、途中で家庭の事情や学習の遅れからドロップアウトしてしまう生徒も少なくありません。マラウイ国は都市間の格差が大きく、特に地方の学校には教育用具や十分な教育環境が整っていません。たとえば、勤務するスザ小学校の生徒は誰も教科書を持っていません。生徒は一冊のノートを全教科で使いまわしているために、宿題を出し、回収することもなかなか難しい状態です。黒板は使い古されていて書きづらく、さらにチョークも十分にありません。

そんな状況のなかですが、子どもたちは元気に学習に励んでいます。この生徒たちのためになることのできるよう、少しずつ努力・工夫していきたいと思っています。

現役隊員

06

矢島 穂高

2021年度 1次隊

理科教育 / ナリクレ / ナリクレ教員養成大学付属中等学校



配属先の生徒は素直で、実験にはとても意欲的で目を輝かせながら行っています。

配属先の学校は2017年に設立されたということで綺麗で設備も整っています。薬品や器具も充実しており、工夫すれば一通りの実験を行える環境です。しかし、理科室にはいまだに箱に入ったままの器具や使った後放置されている薬品があるなど、管理が不十分の状態にあります。現地の教員は授業で基本的な実験を行っていますが、実験を行うだけで生徒に考察させることを行っていないようです。そのため、これからの活動は現地教員と協力しながら理科室の管理の仕方や実験を中心とした授業作りの改善を考えています。

マラウイ人は優しくフレンドリーな人が多いため、外を歩いていると気さくに声をかけてきたり、学校や店などで困ったことがあると積極的に助けってくれたりとは違う経験ができています。コロナ禍の派遣ということで困難なこともあります。ここで活動できることに感謝の気持ちを忘れずに、そして、来たくても来れなかった人の分まで活動に尽力していきたいと思っています。

現役隊員

07

新居 真梨子

2021年度 1次隊

小学校教育/ムジンバ/カプタ小学校



毎日驚きがいっぱいのマラウイ生活が始まって約2か月が経ちました。1年間の派遣延期を経て、待ちに待った小学校での活動も始まり充実の毎日を過ごしています。もともと日本で中学校の教諭をしていましたが、とにかく日本の学校との違いが新鮮です。1クラスが約70名と日本の倍。教室では全員分の机や椅子がなかったり、教科書やノートが十分じゃなかったりと、ないものを上げたらきりがありません。しかし、一生懸命に手を挙げて発言しようとする姿や、性別や年齢の垣根なしに物を共有したり、休憩時間に外でものすごく元気に裸足で走り回ったりする姿など、日本にはないものがたくさんここにはあることを実感しています。同僚の先生方も、大家さんも、モーストウェルカム!と言って迎え入れてくれたことが本当にありがたく、マラウイの人々の温かさを日々感じています。マラウイの人々にたくさん学ばせていただきながら、何か一つでも自分にできることを探していこうと思います。

現役隊員

08

井上 里奈

2021年度 1次隊

小学校教育/リウォンデ/セント・テレザ小学校



マラウイに来て2ヶ月が過ぎようとしています。任地リウォンデでの生活にも少しずつ慣れてきました。セントテレザ小学校では、算数の指導に関わっています。学校には黒板とチョーク、子どもたちが持ってきているノートと書くもの(ボールペン)しかありません。先輩隊員から聞いていた話が「本当に本当だ。」と感じる日々です。学校の中だけにとどまらず、子どもたちは街中ですれ違っても「Hi.RINA」と声をかけてくれます。そしてにこっとすてきな笑顔を向けてくれます。どこにいても子どもたちの力は∞だと本当に感じます。

リウォンデはマラウイで1番大きなシレ川、そして車で数分のところにナショナルパークがあります。リパークルーズに参加しましたが、すぐ近くで天然のカバやゾウ・ワニなどを見ることができました。夕暮れにはとてもすてきな風景が見られます。マラウイ人のよさと自然の広大さを感じながら、活動に精を出していきたいです。

現役隊員

09

後藤 さつき

2021年度 1次隊

環境教育/リロングウェ/リロングウェ市役所



カムズ国際空港に到着し市内への道中でまず目にしたのは、人々があちこちでゴミを燃やしている光景でした。市役所で働き始めてから様々な廃棄物管理施設を訪れました。想像以上の物資不足、資金難など問題は複雑で深刻です。私にこれらを改善できる力はあるのだろうかと思ってしまうこともありました。そんな時、同僚が"Little by little"と声をかけてくれ、なんだか気が楽になり、自分を見つめ直した私は、まずマラウイの現状や文化を知ることから始めました。マラウイには英国統治時代の名残りの朝のお茶の時間があります。毎日のお茶とおしゃべりは楽しみと現地を知る機会になっています。上司は私の拙い英語の質問にも丁寧に対応してくれ、同僚も常に気にかけてくれます。こうした恵まれた環境で働けることに感謝しつつ、私のペースで活動をしていきたいと思っています。

写真は清掃活動の際にゴミ収集車のドライバーと撮ったものです。

現役隊員

10

高橋 愛

2021年度 1次隊

小学校教育/ンサル/カプトゥ教師研修センター



任地ンサルに赴任して早1ヶ月が経ちました。最初は右も左も分からず、不安で不安で押しつぶされそうでしたが、ンサルの人々の優しさ・温かさに触れ、マラウイの「Warm Heart of Africa」を全身で感じています。担当する4つの小学校では、Expressive Arts の指導及び改善に担当の先生方と共に協力して取り組んでいます。どの学校も子どもたちのために一生懸命な素敵な先生ばかりです。むしろ自分の方が多くのことを学ばせていただいています。教科書がなくても、机がなくても、道具がなくても、教室がなくても、できることはたくさんあります。「教師は最大の教育環境である」という言葉を胸に、少ない資源の中でも、できることを考えて行動し、大好きなマラウイの子どもたち、先生たち、未来のために精一杯力を尽くしていきます！

現役隊員

11

寺門 香音

2021年度 1次隊

小学校教育 / モンキーベイ / モンキーベイ教師研修センター



私は、学生の頃から、途上国で子どもたちの支援をすることに憧れていました。協力隊の合格発表の際には、派遣国が最貧国マラウイであったこと、そして日々マラウイ湖を眺め、心穏やかに活動ができそうなモンキーベイへの赴任が決まり大変嬉しかったことを覚えています。

楽しみにしていた任地では、猛暑に加え、大量の蚊や蟻との闘い、そして色々な隙間から入ってくる葉っぱや砂、糞を掃除する日々が待ち受けていました。しかし暑さ以外の環境には数日で慣れ、今はそれらと楽しく共同生活をしています。また、毎日夕方、玄関先で火おこしを始めると同時に近隣の女性たちが集まり、チェワ語と共にシマの作り方を教えてくれる時間が、今はとても楽しいです。

私の周りには、コロナ禍の影響を受け、今も日本で待機をしている隊員、派遣取り消しになってしまった隊員がいます。そのような中、現在マラウイの地を踏めていることは本当に幸せです。この派遣に関わってくださっている方々への感謝を忘れず、日々の活動に元気に!楽しく!取り組みたいと思います。

現役隊員

12

中田 慧

2021年度 7次隊

言語聴覚士 / ムーア / ムーア聴覚障害児特別支援学校



マラウイへの協力隊派遣50周年おめでとうございます。

現在、私の活動は生徒の個別言語訓練を中心に教材作成、先生方への技術支援を行っています。ムーアでの生活は楽しく安定してきましたが、チェワ語、手話を覚えることに四苦八苦しています。

私は以前2019年度2次隊としてマラウイへ派遣されていましたが、新型コロナウイルスの影響により日本へ帰国しました。帰国が決まり任地を離れ、首都へ向かうと「コロナ!コロナ!」と叫ばれたりもしました。マラウイに来て初めて怖いと感じたのを覚えています。

帰国した当初は煮え切らない思いとどうにもならない現実と向き合いながら、再びマラウイの地を踏むことを願っていました。待機期間中は日本が緊急事態宣言ということもあり何も手につかなく、抜け殻になった気分でした。しばらく抜け殻状態が続き、いよいよ再派遣が難しくなり、気持ちを切り替えて病院での仕事を始めました。しかし心の中では必ず戻ろうと決めていました。それは、このまま中途半端な状態では終われないという意地のようなものだったと思います。そしてこの度、たくさんの方々のサポートのおかげでマラウイへ再び来ることができました。派遣が決まってからはコロナ禍での生活の不安、特に人々のコロナウイルスに関するアジア人に対する差別・偏見はどうか不安がありました。以前と変わらずマラウイの人々は温かく迎えてくれました。「こんにちは」と日本語でやさしくあいさつをされるたびに、今までのマラウイ派遣隊員の方々がどのように活動されていたのかがわかり、私もマラウイと日本をつなぐような活動をしていきたいという思いに駆られます。

青年海外協力隊マラウイ派遣50周年という節目に、現役隊員としてこの地にいられることに感謝し、また再派遣がかなわなかった同期や先輩方の想いも背負うつもりでこれからの活動に精進していきたいと思っています。

現役隊員

13

佐々木 裕

2021年度 2次隊

理学療法士 / リロングウェ / カムズ中央病院



10月にマラウイに到着したばかりですが、毎日30度を超える暑さに驚いています。

青年海外協力隊に参加したきっかけは、日本で理学療法士として勤務していた時、数年前に開発途上国の現状を知り、自分でも日本以外の場所で何かしたい、何かできないかと思い応募しました。COVID-19のため、派遣延期、任地変更などの影響もありましたが、マラウイに来れたことを嬉しく思います。

配属先は首都にある基幹病院で、広い敷地には多くの診療科目のほか、付属の教育施設や隔離病棟などもあります。地域から遠方まで沢山の患者を受け入れており、医療スタッフも大勢いました。その中で理学療法科は2階にあり、筋骨格系、整形外科系、小児系、腫瘍系、神経系、熱傷系、循環呼吸器系の7部門を担当し、各チームに分かれ、入院患者・外来患者の両方を施術しています。私の活動内容は主に中央病院での患者の治療と、同僚への技術指導と業務改善の提案です。

慣れない土地や外国語、食べ物などで不安も沢山ありますが、自分らしい活動を通じて現地に貢献し、開発途上国の現状を色々な人に興味を持って貰えるように活動したいと考えています。

現役隊員

14

船田 ひかり

2021年度 2次隊

小学校教育 / カブドゥラ / カブドゥラ小学校



生まれも育ちも北海道で、マラウイが人生で初めての道外居住です。北海道とはまったく異なる気候に毎日胸を踊らせています。日本では超インドア派でしたが、マラウイでは外に出て、豊かな自然を楽しみたいと思います。

マラウイに来る前は市役所の職員でした。授業を行うのは教育実習ぶりでもとても緊張しています。カブドゥラ小学校では算数と英語の授業を受け持つことになりました。その他にも先輩隊員の活動を引き継ぎ、キャリア教育も行えたらいいなと考えています。任地のカブドゥラを訪れた際、学校の先生たちから英語で村を紹介していただきました。村の方々との会話も通訳していただき、心の温かさを感じました。早く通訳なしで村の方々とコミュニケーションを取れるように、一生懸命チェワ語を勉強しようと思います。

2年間で自分ができるとは限られていると思います。しかし、子どもの将来に少しでも良い影響を与えられるよう尽力したいです。

巻末ご挨拶

協力隊マラウイ派遣50周年にあたり、マラウイへの協力隊派遣、マラウイと日本との交流に多大なるご支援、ご協力をいただいている皆様に、心から感謝申し上げます。また、本記念誌の発行にあたり、ご寄稿いただいた皆様、編集にご協力いただいた日本マラウイ協会の皆様はじめ、ご協力いただいた皆様に厚くお礼申し上げます。

本記念誌には、OVの皆様はじめ本当に多くの方々からご寄稿いただきました。マラウイ側からも隊員のカウンターパートや教え子であった方々から沢山のメッセージが寄せられました。協力隊派遣50周年の記念行事として行ったパネル展では、ふと立ち寄った方が協力隊員との思い出を語る場面が何度もありました。協力隊の皆さん、帰国後も交流を続けるOVの方々、隊員のご家族はじめ様々な形で協力隊を支えてくださっている皆様が築いてこられた絆の証であると思います。

50年にわたる歴史においては、交通事故等により12名の方が派遣中にお亡くなりになりました。心からご冥福をお祈り申し上げます。決して悲劇を忘れることなく、絶対に繰り返すことがないように万全を期してまいります。

マラウイにおける協力隊事業は、新型コロナウイルス禍による中断の後、今年6月、新たな一步を踏み出しました。新型コロナウイルスは、人との協働やコミュニケーションのあり方に大きな変化をもたらし、活動の場であるマラウイの社会や人々にも様々な影響を与えたと思います。With/Postコロナとされる世界において、現地の人々と共に働き、共に成長していくという協力隊の神髄をいかに発揮していくか、新たに派遣される隊員の皆さんとともに、試行錯誤しながら取り組んでいきたいと考えています。

今後ともご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

JICAマラウイ事務所長 丹原一広





JICAマラウイ事務所 スタッフ一同 2021年11月

編集後記に代えて

歴代の隊員たちが築いてきた50年の歴史。
マラウイの大地の上に、マラウイの人々の心に、
一人ひとりの隊員が残してきたものの尊さが思われます。

聞いたこともないマラウイへ送り出してくれた 家族、友達、恋人、
見たこともない日本人を懐深く受け入れてくれた マラウイの人々、
1,897名を支えてくれた数え切れない人々にも あふれる感謝を込めて
マラウイ協力隊の50年をお届けします。

50周年の節目の年に、未来に向かって新たなスタートを切ったマラウイ協力隊が、
マラウイ、日本双方にとっての大きな希望となることを心から願っています。

記念誌の編集にあたり、マラウイ協力隊OVの方々始め、
ご協力いただきましたすべての皆様に この場をお借りしお礼申し上げます。

企画調査員(ボランティア事業) 新関郁子



JICA Malawi Office

Pacific House, Area 13, Plot No.100,
City Centre, Lilongwe

TEL +265 1 771 644, 0888388704

E-mail mw_oso_rep@jica.go.jp

URL <http://www.jica.go.jp>

デザイン・印刷 / DESIGN AND PRINTING PLUS LIMITED

Corporate Mall, Area4, Lilongwe, Malawi | P.O. Box 502, Lilongwe
info@designandprintingplus.com | +265 (0) 998 311 666

